

土地ノ收入ハ天然ノ惠與ヨリ出ツルモノト實

シテ其餘利ノ利ヲ有スルコトヲ得サレハ必スヤ一府ノ低價ヲ以テ購求セシモノナルヘシ故ニ現時ノ地主ニハ相當ノ補償ヲ與フルニアラサレハ土地ヲ公共ノ財産トシテ之ヲ政府ニ收メ其地代ヲ全收スルコト能ハサルヘシ又現今ノ地價ハ最初地主カ天然ノ儘ナル土地ヲ占領セシ時代ノ價格ニアラス現ニ本邦ノ北海道及其他世界各地方ニ於ケル荒蕪地ノ尙ホ數多存スルアリテ之レニ多少ノ資本ト勞力トヲ施カハ大ニ地價ヲ有スヘキ見込ナキニアラサルモ現ニ資本ト勞力トヲ投下セサルカ故ニ未タ其價ナキニ非ラスヤ去レハ現今ノ熟田ノ如キハ地主カ天然ノ土地ヲ占有セシ以來今日ニ至ルマテ許多ノ資本ヲ注入シ種々ノ改良ヲ施シ即チ或ハ堤防溝渠ヲ作りテ運輸ノ便ヲ開キ或ハ灌水ニ排水ニ或ハ土地ノ爲メニ永久ノ改良ヲ行ヒ又ハ土地ノ品位ヲ高メ生産力ヲ増シタルヤ明カナリ故ニ今日地主カ獲ル處ノ地代ハ天然ノ

本ノ利子トテ混スル故ニ之ヲ難分ツコト

惠與ニ出ツル部分ト祖先以來土地ニ注入シタル資本ノ利子トノ二部ヨリ成立スルモノニシテ後世ニ至リテ之ヲ購求シタルモノハ天然ノ土地ト人間力之ニ施シタル永久ノ改良即チ固定資本トヲ併セテ買入レタルモノナリ是故ニ現今地主カ享受スル所ノ地代ニ付テ天然ノ惠與ヨリ生スルモノト資本ノ利子トヲ更ニ分タンコト是レ實際爲シ得ヘカヲサルコトナリ若シ又天惠ト資本ノ利子トヲ分ツコト能ハサルカ故ニ其資本ノ利子ヲモ合セテ共ニ政府ニ收入スヘシト云ハ、其不條理ナルヤ復タ言ヲ竣タサルヘシ

凡テ租稅ノ負擔ハ終局ニ盡ク地主ニ歸スルニ云ヘル重農學派ノ說

然レハ重農派論者ノ說ハ願フニ盡ク土地ノ純收入ヲ政府ニ納レ地主チノ困弊セシメントスルニハアテサルヘシ如何トナレハ重農學派ノ論者ハ農業ノ繁榮ヲ希望スルモノナレハナリ蓋シ此派ノ士カ土地ニノミ租稅ヲ課セントセシハ畢竟租稅負擔ノ原理ヲ誤解セシニ歸セス

ンハアラス抑、重農派ノ論スル處ニヨレハ租税ハ如何ナルモノト雖、
 轉遷轉移シテ終局地主ハ負擔ニ歸セサルモノナシト云フニアリ例
 ハ爰ニ葡萄酒ニ消費税ヲ課スルトセシニ葡萄酒ノ價ハ必ス騰貴ス
 シ是レ葡萄酒ノ販賣人ハ課税ヲ其價ニ包含セシメテ之ヲ辨償セント
 スルニ由ル然レ、凡價ノ騰貴ニ因テ消費ヲ減シ葡萄酒ノ製造高ヲ減シ
 又從テ葡萄酒主ノ生産高ヲモ減縮シ竟ニ耕植ヲ變ヘサルヘカラサル
 ニ至ラン即チ葡萄酒所有主ハ生産ヲ減少シ他ニ資本ヲ移スカ爲ニ之
 レカ損失ヲ蒙ルニ至ルヘシ是ヲ以テ見レハ葡萄酒ニ課セル消費税ハ
 終局園主ノ負擔ニ歸スルニアラスヤ又此理ヲ以テ推ストハ羊毛税、烟
 草税、其他ノ消費税並ニ製造家若クハ資本家ニ課スルノ税ト雖、凡
 ハ盡ク土地ノ所有者ニ歸着スヘシト又若シ果シテ凡テノ租税負擔ヲ
 ノ地主ニ歸スルモノナラシメハ實ニ種々ノ名目ヲ以テ種々ノ物件ニ

不動産
單稅說

課税スルハ無益ノ煩累ヲ諸營業ニ與ラスモノナレハ寧ロ盡ク中間ノ
 納税者ヲ省キ直接ニ地主ニ賦課スルノ優レルニ如カス斯ノ如クセハ
 以テ収税者ニ便ナルノミナラス人民モ徵收費ヲ損スルヲ免レ亦從
 テ地主ニ不利アルヲナカルヘシト以上ハ十八世紀ニ於ケル重農學派
 カ專ラ唱道セシ土地單稅說ナリトス現今合衆國ノメニエー氏ハ土地
 ノミニ課税スルノ代リニ凡テノ不動財產ニ向テ單稅ヲ課セントスル
 ノ說ヲ唱ヘリ其說タルヤ要スルニ課税ヲ土地家屋製造所等凡テ其形
 ヲ變セスノ利益ヲ生スル所ノ不動產ニ及ホスニ過キサレ、凡價之ヲ地租
 單稅ニ比スレハ多少課税ノ基礎ヲ大ニシタルモノナリ、凡理由トスル
 處ハ如何ナル種類ノ租税ト雖、凡價不動資本、凡價資本トイヘル中ニ土地
 ナモ包含セシムルモノ、如シノ生産力ヲ減殺スル者ニシテ其負擔ハ終
 ニ不動資本ニ歸スルモノナリト云フニアリ是故ニ勞力者若クハ商人

二租税ヲ課スレハ賃銀ノ増加ヲ惹起シ又タ生産品ノ需要ヲ減シ而シテ一般ノ生産費ヲ増加スヘキカ故ニ之カ爲メ損失ヲ蒙ルモノハ獨リ不動産所有主即チ製造家若クハ地主ニ外ナラス故ニ現今貧民カ消費税ヲ拂フト雖モ實際之ヲ負擔スルモノハ富裕ナル製造家若クハ地主ナルヲ以テ寧ロ貧民ニ課スルノ繁ヲ省キ中間ノ納税者ヲ廢シ直ニ不動産ノ所有主ニ課税シテ收稅費ヲ減シ營業ノ自由ヲ増加シ事務ノ取扱ヲ簡易ニシ煩雜ノ勞ヲ省クヲ以テ可ナリトセルモノナリ

第百節 地租單稅并ニ不動資本單稅說ノ辨妄 以

上ノ諸說ハ租稅負擔ノ歸着スル處ノ原理ヲ誤解シタルモノニシテ若シ租稅ノ負擔ニシテ果シテ地主若クハ不動産所有者ニ歸スルモノナラシメンカ地租單稅說及不動資本單稅說ハ亦理ナキニアラスト雖モ若シ負擔ノ歸着スル處ニシテ必スシモ地主若クハ不動資本所有主ニ

地租若クハ不動資本
本單稅說
ハ租稅負擔
ノ原理
ヲ誤解シ
タルニ基
因ス

アラストセハ此說クル已ニ議論ノ前提ヲ誤レルモノナレハ從テ其結論モ誤謬ナリト断定セサルヲ得ス消費稅ノ負擔ハ終ニ地主ニ歸スルモノナリトスルハ大ヒニ實際ノ狀況ニ適セサルノ說ト云フヘシ如何トナレハ今日ニアツテハ租稅負擔ノ版着スル所ノ原理ニ關シ既ニ畫一不動ノ定則ヲ與フルト至難ナリトセラレタレハナリ即チ租稅ノ負擔ハ時ノ經濟ノ有様即チ需要供給ノ模様如何ニヨリテ異狀アルモノナレハナリ今葡萄酒ニ課税シタルカ爲メニ葡萄酒ノ價ヲ騰貴スルセ之レカ爲メニ必ス需要ヲ減スルトハ云フヘカラス抑モ需要ノ増減ハ時ノ狀況如何ニヨリテ定マルモノナレハ價格騰貴スレハトテ強チ需要ヲ減シ又生産高ヲモ減シ從テ葡萄酒主ノ損失負擔ニ歸スヘシトハ云フヲ得サルナリ要スルニ單稅論者ノ租稅負擔說ハ精細ニ諸點ヨリ觀察ヲ下シタルモノニアラストシテ只一方ニ偏倚シタル誤謬ノ見解

タルニ邁キス佛國ノヴォルテイヤ氏ハ曾テ一小説ヲ著シ重農學派ノ説ヲ駁セリ其説タル一ノ寓言ニ邁キサレ其言フ所頗ル適切ナリ其主旨タルヤ地主ハ殆ント歳入ノ半ヲ收メラル、カ如キ慘狀ニ遇フモ証券ノ如キ動産ノ收入ヲ以テ生計ヲ營ムモノハ大ニ富裕ニシテ租税ノ負擔ヲ免ルヘシト云フニアリ然ルニ或ル單稅主唱者ノ一人ハヴォルテイヤ氏ノ此論ヲ駁シテ左ノ言ヲナセリ曰ク

(上略)若シ單稅ヲ以テ特ニ土地ニ課稅スルキハ證書類ヲ以テ富ヲ致ス者ノ如キハ其賦稅ヲ免ルヘシトナス論者アリ謂フ之カ辨駁ヲ試ミン爰ニ某財產家アリ其資本ハ貨幣ニシテ年々五分ノ利子ヲ得タレト租稅トシテ其五分ノ一ヲ繳収セテレシカ故ニ其純歲入ハ僅ニ四分ナリシト假定シ而シテ若シ一朝稅法ヲ改メ其租稅ニシテ廢セラレタリトセハ某ノ純歲入ハ五分トナルヘシ然ルニ前日其各五分

ノ利子タリシ時ト雖實際四分ニ止マリシハ本ト資本家ノ競争ニ由テ定リシ者ナルカ故ニ其稅ヲ廢シ實際五分ノ利子ヲ得ヘキニ至レハ又忽チ競争ヲ以テ名實共ニ四分ノ利子ニ低下スヘシ之ニ反シテ新稅ヲ設置シタリト假定シ特ニ之ヲ土地ニ課シ毫モ他ニ及ホサルモノトセハ金利ハ尙ホ依然トシテ變動ナカルヘシ然ルニ若シ其一部分ヲ以テ資本家ニ課セハ金利必ス騰貴セン故ニ資本家ヲシテ租稅ヲ拂ハシムルモ拂ハシメサルモ其實際ノ負擔ニ至リテハ毫モ異ナル所ナカルヘシ勿論資本家ニ課スル所ノ租稅ヲ變シテ地租トナス時ハ實際ノ負擔者モ一時ノ負擔者モ數年ノ間共ニ其利ヲ被ルヘシト雖地主ハ他ノ租稅法ニ於テ免ルヘカヲサル弊害ヲ免ル、カ故ニ其利スル所ハ一層大ナルヘシ(下略)

右ニ引用セシ論旨タル頗ル奇巧ニシテ多少眞理ニ適スル所ナキニ

ヲサレモ亦タ偏見ヲ免レサル者ナリ實ニ是等ノ説ヲ唱フル者ハ租稅負擔ノ販着スル所ハ固ト口ニ云フカ如ク簡易ナル者ニアラスシテ數多ノ複雜ナル事情ニ支配セラレ制御セラレテ到底一定ノ結果ヲ生スルヲ能ハサルモノタルヲ遺忘シタルモノナリ余ハ曾テ租稅負擔ノ原理ヲ前段ニ述ヘシカト猶ホ左ニボリユー氏カ此點ニ關シテ敘述セシ言ヲ引用シ以テ更ニ租稅負擔ノ原理ヲ一層明晰ナラシメヨシ曰ク

(上略)資本ニ課稅スルモ歲入ニ課稅スルモ均ク利子ヲ騰貴スルノ傾向アリ故ニ動產稅ノ事タル頗ル緻密ノ論題タリ佛國ニ於テ戰亂後嘗テ動產ノ歲入ニ三分ノ稅ヲ課シ大ニ證書類ノ價下落セシトアリ然レモ之ヲ以テ利子ハ必ス騰貴スヘキ者ナリト未タ遽ニ斷言スルニ足ラサルナリ元來不動資本(即チ土地若クハ製造所等)ニ課稅セスノ常ニ市場ニ流動スル所ノ流動資本ノ歲入ニ課稅スル時ハ其稅額

租稅負擔ノ原理ニ關スルボリユー氏ノ説ヲ引用ス

ニ應シテ利子ヲ騰貴スル勢アルハ亦免レサル所ナリト雖是レ只勢ノ傾向ニシテ十分ニ其成績ヲ見ルヲ得ヘキ者ニアラス況ヤ即時ニ其效驗ヲ見ルニ於テチヤ通例此傾向ノ現ハル、ハ徐々ニシテ且ツ其一部分ニ過キサル者トス如何トナレハ資本家ハ假令ヒ租稅ノ全額ヲ負ハサルモ幾分カ之ヲ負ヒ又之ヲ永遠ニ負ハサルモ暫時ハ之ヲ負フモノナルヲ以テナリ譬ヘハ利子ノ割合四分ナルニ當リ政府カ更ニ資本ニ一分ノ稅ヲ課セリトテ全國ノ利子忽チ一般ニ騰貴シテ五分トナルトナカルヘシ此時ニ當リ貸與者ハ必ス其負擔ヲ避ケントチカムヘシト雖四分ノ利子一朝變シテ五分トナル時ハ借受者候チ減シテ資本ノ需要ヲ減スヘシ或ハ云ハン然ル時ハ貸與者モ亦減スヘシト曰ク然リ内國ニ於テ新稅ノ爲メニ利子ノ減少ヲ見ンヨリ寧ロ其資本ヲ外國ニ移サント欲スル者アルヘシ然ルニ此事タル常

ニ非常ノ事ニシテ之ヲナス者ハ獨リ才識アル資本家若クハ冒險者ニ過キス衆人多クハ利子ノ少キモ之ヲ遠キニ致サンヨリ寧ロ之ヲ近キニ置カン₁ヲ欲スルモノナリ由是觀之ハ新稅ヲ資本ニ課スルモ急ニ利子ノ騰貴ヲシテ其稅額ト均キニ至ラシメサルハシ蓋シ此時ニ於テ多少利子ヲ騰貴スル₁アルヘシト雖決シテ租稅ノ全額ニ達セスシテ其負擔ハ必ス貸與者及借受者ノ間ニ分擔セラル、ニ主ルヘシ故ニ其資本稅ヲ廢スルノ時ニ於ケルモ亦同ク利子ノ下落必スシモ租稅ノ額ト均シカラサルヘク亦必スヤ亦貸與者借受者互ニ其利ヲ爭ヒ逐ニ(少クモ暫時ノ間ハ)雙方ノ間ニ利ヲ分ツニ至ルヘキハ敢テ疑ヲ容レサルナリ

經濟ノ現象ハ天理ニ左右セラル、₁猶ホ物理現象ノ天理ニ從₁カ如ク容易ナラサルナリ殊ニ經濟ノ現象ハ多少人心ノ制御ヲ受クル

動產稅ノ負擔

カ故ニ又往々競争ニ因テ左右セラレ常ニ天理ノ效驗ヲ見難キ者アリ

抑々重農派(ワイジオグラット)單稅論ノ一大迷誤タルヤ實ニ彼輩カ假令ヒ百般ノ消費稅ヲ廢シテ專ラ地租ニ課稅スルモ其廢稅ノ全額若クハ殆ト之レト均ク百貨ノ價ヲ騰貴シ地主ハ敢テ損スル所ナカルヘシト妄信スルニアリ若シ一國孤立シテ毫モ外國ト交通セサル時ハ久キヲ經テ或ハ斯ノ如キ景況ヲ見ルヲ得ン試ニ日耳曼ノ經濟家デチユチン氏カ想像セシ如ク一國孤立シテ毫モ外國ト交通セサル者ナリトセンカ然ル時ハ悉ク消費稅ヲ廢シテ地租トナスモ地主ハ敢テ之カ爲メニ苦ム₁ナカルヘシ又消費者ノ財力ハ必シモ變動セサルヘキカ故ニ人民ハ消費稅廢止後ト雖モ從前買ヒ慣レタル價ニテ物品ヲ買フヲ得ヘク又買ハサルヘカラスシテ物品ノ需要致

地租單稅
ノ負擔ハ
之ヲ消費
者ニ移ス
トナス說

ヲ變動ナカルヘシ又消費稅ヲ廢シ土地單稅トナスモ新稅ヲ以テ
悉ク消費者ニ負擔セシムルヲ得レハ地主ノ利益ヲ變セサルヘキ
カ故ニ物品ノ供給モ亦變動ナカルヘシ斯ノ如クナレハ地主ハ稅法
改革ノ爲メニ敢テ苦テ受ケス消費者ノ位置モ昔日ト異ナルヲナカ
ルヘシ如何トナレハ其形情同キ時ハ直接單稅ノ賦課易ク徵收費ノ
少キハ間接複稅ノ比ニアラサレハナリ只地主ハ時トシテ一時ノ困
苦ヲ免レサルヲアルヘシ例ヘハ凶年ニシテ收穫ヲ失フカ如キ即チ
是ナリ

然ルニ方今ノ世態ニアリテハ決シテ一國ヲ視テ以テ孤立セル者ト
爲スヘカラス百年以來殊ニ此二十年來外國貿易大ニ擴張シ資本ノ
來往頻繁ナル今日ニアリテ國家ヲ以テ孤立セル者ト假想スルカ如
ク妄議無稽ナル者ハ蓋シ之レアラサルナリ凡ソ諸國ノ財政ハ各其

外國トノ
關係アル
カ爲メニ
地租ノ負
擔消費
者ニ移ル
ハサル場
合

法度ヲ異ニシ又之カ爲メニ實際ニ影響スル所少カラサルモノトス
消費稅ヲ廢シテ土地單稅トナスモ外國ノ輸入品ニ租稅ヲ課シ内
國地主ノ新負擔ヲ補償スルニアラサレハ内國地主ハ其新負擔ヲ以
テ消費者ニ負ハシメ前日ト均ク利益ヲ得ルヲ能ハサルヘシ如何ト
ナレハ外國地主ノ負擔ハ決シテ内國地主ノ如ク重キノ理ナケレハ
ナリ

例ヘハ若シ重農學派ノ說ニ從ヒ佛國ニ於テ酒類ノ輸入稅小賣稅等
ヲ廢シ之ニ均キ直稅ヲ以テ葡萄園ノ所有主ニ課スル時ハ此輩ヲシ
テ從前ノ位地ヲ保タシメシカ爲メニ土地ニ單稅ヲ課セサル國ヨリ
輸入スル所ノ葡萄酒ニ同額ノ租稅ヲ課セサルヘカラス然ラサレハ
外國ノ葡萄酒ハ低價ニ賣ラルヘキカ故ニ佛國ノ葡萄園主ハ悉ク新
稅ヲ負擔スヘシ是レ酒稅ニ於ケルノミナラス甜菜砂糖稅煙草

税等凡ソ百ノ農産物ニ於テ皆然リトス是故ニ農産物ノ税ヲ廢シテ地租トナス時ハ外國ノ同物品ニ輸入税ヲ課スルニアラサレハ新税ノ負擔ハ悉ク内國ノ地主ニ歸スヘシ(中略)

元來租税負擔ノ歸スル所ハ頗ル複雑細密ニ涉リテ殆ト明解ニ苦ム所ノ者アリ然リト雖經濟ノ理タル固ト其効驗ヲ瞬時ニ見ルヘキ者ニアラサレハ舊制ノ効驗消シテ新制ノ効驗ヲ生スルニ至ルマテハ常ニ必ス數歲月ヲ要スルモノナリ故ニ此理ヲ服膺スル者ニアラサレハ未タ以テ共ニ租税負擔ノ理ヲ談スルニ足ラサルナリ

世往々以爲ラク凡ソ百ノ租税皆數歲月ヲ過クレハ正平ニ歸セン如何トナレハ社會ノ構造ハ自然ノ宜キニ歸スル者ナレハナリ譬ヘハ消費税ヲ課スレハ數歳ノ後早晚必ラス貨銀ヲ増加スルノ効驗アルヘク資本ノ歳入ニ課税スレハ利子ノ騰貴アルヘク土地ニ課税スレ

ハ地價ヲ減シ新ニ土地ヲ買フ者ヲシテ相當ノ歳入ヲ得セシムルニ至ルヘント曰ク然リ新税設置ノ初ニ當テハ不當ナルモ數年ノ後ハ殆ント正平ニ歸スル者少ナカラス如何トナレハ其弊ヲ受ケル者或ハ消滅シ或ハ貨銀ノ増加若クハ利子ノ騰貴等ニ由テ補償ノ路ヲ得ルニ至ルヘケレハナリ然リト雖此平均ヲ得ルニ至ルハ決シテ一朝一夕ノ事ニアラス故ニ其間一時ノ困苦ヲ受ケ時トシテハ補フ能ハサル損害ヲ被ル者少カラス(下略)

以上長文ヲ厭ハス余カ引用セシホリユー氏ノ言ハ租税ノ負擔ノ原理ハ單簡ナリト誤解シ以テ其說ノ根據トシタル地租單税若クハ不動資本單税說主張者ノ迷誤ヲ十分覺醒スルニ足ルノミナラス猶ホ余カ前章租税負擔ノ項ニ關シ定則ヲ與フル最モ難シト云ヒシ論旨ヲモ補フニ足ラン乞フ讀者再ヒ熟讀玩味ノ勞ヲ採ラレントテ

消費單稅ノ行ヒガタキ所以

第百一節 消費稅單稅 以上論究セシ所ニ因リテ地租單稅說及ヒ不動資本單稅說ノ謬見タルヤ既ニ明カナリ然ルニ茲ニ又タ消費稅ヲ以テ單稅トナサントスル一種ノ論者アリ然レモ消費稅ヲ課スルニ方リ若シ吾人數種ノ消費物ヲ撰テ之ニ課稅スルキハ其稅法ノ複雜ナル營業ノ自由ヲ檢束シ納稅者ニ煩累ヲ蒙ラス等復タ毫モ複稅制ニ異ナルヲ無キニ至ラン然ラハ則チ單ハラ一消費物品ノミヲ撰ミテ之ニ課稅センカ其物品ノ消費力各人ノ財力ト適當ナル比例ヲ保ツヘキモノヲ撰ムノ更ニ甚タ難キヲ如何ニセン抑々各人ノ財產若クハ所得ヲ使用スルヤ唯之ヲ消費スルノミニ限ラスシテ又之ヲ貯蓄スルモノナリ故ニ百般ノ消費物ニ課稅スルトモ必ラス其稅ガ各人ノ財力ニ公平ニ比例スルモノニアラス況ンヤ百貨ニ消費稅ヲ課スルヲハ元ト行フヘカラサルニ於テチヤ去レハ各人カ生計ノ度財力貧富ノ度ニ應シテ其

消費スル所ノ額ニ多寡アル有用品及ヒ驕奢品ニ課稅センカーノ消費稅ヲ以テ政府ノ巨大ナル収入ヲ得ンヲ決シテ爲シ能フヘキノ事ニアラス是レ其消費物タル元來課稅ノ基礎狹少ナルカ故ナリ然ラハ則チ消費額ノ最モ廣大ナル人生ノ必要品ヲ撰ンテ之ニ消費稅ヲ課センカ是又貧民ニ重クシテ富民ニ輕ク毫モ各人ノ負擔ヲシテ其財力ニ比例シムルヲ能ハサル一ノ不公平ナル租稅トナルヘシ故ニ消費單稅トイヘルヲハ之ヲ口ニ云フヘクシテ到底實行スルニ難キモノナルヤ亦明カナリ

單稅制ノ實行スルヘノ所以

第百二節 單稅制ノ實行スヘカラサル所以ハ單一ノ租稅ニシテ一般ニ普及スヘキ公平ナル課稅法ヲ見出ス能ハサルニ因レルヲ 以上述ヘシ如ク地租モ不動資本稅モ消費稅モ共ニ之ヲ唯一ノ單稅トナスルハ租稅ヲ國民一般ニ公平ニ普

單稅一以
テ公平租
公ニ普及
稅ヲ普及
セシムル
一能ハス

及セシムルノ目的ヲ達スル一能ハサルモノナリ若シ租稅ニシテ國民
一般ニ公平ニ普及セシムル一能ハサル時ハ是レ租稅分配ノ原則ニ背
クモノニシテ又稅制ノ宜シキヲ得タルモノト云フヘカラス單稅說ノ
實行シカタク所以ノ一モ亦實ニ此理由ニ因レリ或人ハ思ヘラク假令
地租不動資本稅及ヒ消費稅ハ共ニ單稅タルニ適セスト雖モ所得稅ノ
如キハ實ニ單一稅トナスニ適スヘシト是亦決シテ然ラサルナリ其詳
細ナル點ニ至リテハ之ヲ後章所得稅ノ篇ニ於テ詳論スヘケレモ抑々
或種ノ歲入ヲ確知スル一難キカ爲ノ亦決シテ之ヲ公平無比ノ租稅ナ
リトハ云フヘカラス故ニ之ヲ輕課スルニ於テハ毫モ懸念ナシト雖モ
若シ他ノ諸種ノ直稅及ヒ消費稅ヲ全廢シテ唯所得稅ノ一稅ノミニ人
民ノ負擔ヲ集合セシムルキハ實ニ不公平ナル負擔ノ燒點ヲ作ルモノ
ニシテ人民ハ到底其重歛ニ堪ヘサルニ至ルヘシ且ツ直稅ハ一時ニ多

單稅制ノ
實施シガ
タキ所以
單稅ハ以
テ巨額ヲ
支辨スル
ニ足ラス

額ヲ納ムルモノナルカ故ニ之ヲ貧民ニマテ及ホス一能ハス是レ各國
現行ノ所得稅ニ免除アル所以ニシテ亦萬止ムヲ得サルニ出タルモノ
ナリ然ルニ今之ヲ國民全体ニ及ホサントスルキハ假令一方ニ於テ同
額ノ消費稅ヲ全廢スルトモ貧民ハ到底直稅ノ負擔ニ堪ヘ能フマシキ
ナリ是レ則チ所得稅ト雖モ亦單稅トナスニ適セサル所以ナリ去レハ
如何ナル租稅ノ賦課法ヲ以テスルモ單稅制ハ到底其負擔ヲシテ國民
一般公平ニ普及セシムル一能ハサルノ欠點アルヤ亦明カナリ

第百三節 單稅制ノ實行シカタク所以ハ單稅ヲ以

テスレハ現今各國ニ於テ必要ナル經費ヲ充分ニ支辨
スル能ハサル一理論上ニ於テハ單稅制ニ毫モ利益ナシト云
フ一能ハス否單稅制ハ租稅制ノ理想的ナルモノナリ然レモ其實施ス
ヘカラス所以ノモノハ又實際ニ適セサルカ故ニシテ苟モ眼ヲ現今

ボリユ
氏カ佛國
ノ經費ニ
就テ假想
ニ入リテ
省減シ得
ヘキモノ
ノ得

ノ實際ニ注クモノハ離カ復タ單稅制ニ利アルヲ唱ヘンヤ夫レ近時
各國經費ノ巨大ナルハ曾テ余カ國家支出論ニ於テ説キシ所ニシテ就
中佛英二國ノ如キハ其經費世界ニ冠タリ故ニ實際ニ着眼スルハ吾
人ハ是等現今ニ於ケル各國政府ノ巨大ナル公費ニ就キテ尙ホ未タ之
ヲ十分ニ支辨スルニ足ルヘキ單稅ヲ見出スト能ハス否余輩ハ到底一
稅ヲ以テ斯ノ如キ巨額ナル經費ヲ填補スルハ爲シ難キヲ信スルナ
リ今假リニ各國財政上ノ實況ヲ離レテ假想ノ域ニ入りテ論センカ尙
ホ且ツ單稅ノ遂ニ行ヒ易カラサルヲ視ルナリ請フ爰ニ再ヒボリユ
氏カ佛國一八七七年ノ豫算ニ就テ爲シタル觀察ヲ引用セン
氏カ假ニ假想ノ域ニ入りテ一八七七年ノ佛國政府ノ豫算經費二六六
七〇〇〇〇〇〇法ニ就テ觀察ヲ下セシ結果ニ據レハ即チ其費目中若
シ佛國人民ノ祖先ニシテ一層聰慧ニ又方今隣國ノ民ニシテ一層賢明

トシテ列
舉シタル
費目

ナラシメハ實ニ省減シ得ヘキモノハ左ノ如シト

一二〇一〇〇〇〇〇法(國債元利ノ仕拂及諸手宛料)

若シ佛國人民ノ祖先ニシテ古來ヨリ常ニ賢明ナルカ若クハ假令
往古ヨリ賢明ナラサルモ八十年以來事ヲ處スル常ニ愼密ナラシ
メハ巨大ナル公債ヲ負ハサルカ故ニ以上國債ノ元利仕拂ニ係ル
經費ノ如キハ全ク省クヲ得ヘキモノトス但シ右額中諸手宛料一
二〇〇〇〇〇〇法ヲ合算スルカ故ニ眞ニ國債ノ存スルナクンハ
佛國政府ノ經費中ヨリ實ニ減省シ得ヘキ額ハ一一九〇〇〇〇〇
〇〇法トス

四、三五〇〇〇〇〇〇法 (佛國陸軍費ハ五、三五〇〇〇〇〇〇法トス
其中一、〇〇〇〇〇〇〇〇法ハ施政上緊要ナル憲兵ノ經費及ヒ假
令至平至和ヲ主トスルモ撤ス可ラサル常備兵及ヒ全廢シカタキ

陸軍省ノ經費ニシテ残り四、三五〇〇、〇〇〇法ハ歐洲列國ノ人民ニシテ互ヒニ公正ヲ以テ相遇シ信實ヲ以テ相交リ常ニ敵視スルヲナクシテハ亦減省スルヲ得ヘキモノトス

一、四〇〇〇、〇〇〇法 (佛國海軍及植民地費ハ一、八六〇〇、〇〇〇〇ナリ其中四六〇〇、〇〇〇法ハ商船保護海賊ノ患ヲ防ク爲メニ必要ナル海軍費ニシテ其餘ハ減省シ得ヘキモノトス)

二、五〇〇〇、〇〇〇法 (アルシエリヤ殖民地ニ關スル費用ニシテ假想ノ域ニアリテハ減省シ得ヘキモノトス)

五、五〇〇〇、〇〇〇法 (教部ノ費用ニシテ減省シ得ヘキモノ)

一、三五〇〇、〇〇〇法

八、〇〇〇〇、〇〇〇法

(右ハ租稅局費、收稅費諸拂戻シ高及大藏本省經費中假想ノ域ニアリ)

テハ財務ノ減少スルカ爲メニ節減スルヲ得ヘキ額トス)

以上列擧スル者ハ若シ都テ佛國ノ人民聰明ニシテ此百年間専ラ平和ヲ主トシ諸隣國モ亦深ク道義ヲ重シ各國舉ツテ兵備ヲ撤シ佛國ヲシテ國債ヲ起スノ不幸ナカラシメハ則チ佛國政府カ減省スルヲ得ヘキ經費ニシテ之ヲ通計スレハ其額實ニ一九、八八〇〇、〇〇〇法ニ達セリ故ニ若シ佛國ニシテ此想像ノ域ニアラシメハ其經費ハ僅カニ六七九〇〇、〇〇〇法ニシテ足ルモノトス

亦タボリユー氏ハ尙ホ假想ノ域ニ入りテ想像スルキハ佛國地方政府ノ費用モ六、〇〇〇、〇〇〇法ヲ以テ足ルベシトセリ故ニ空想ノ域ニアリテハ佛國中央政府及地方政府ノ費用ハ通計シテ一二、八〇〇〇、〇〇〇法ニシテ辨スルヲ得ヘシトナセリ

而シテ氏ハ此空想ノ域ニ於ケル最少ナル經費ト雖モ尙ホ唯一ノ租稅

ヲ以テ支辨スルノ容易ナラサルヲ示セリ氏ハ云ヘラク假令佛國ニシテ單稅ノ制ヲ行フモ之ト並ヒ存シテ其收入ヲ得ヘキ財源ニハ左ノ種類アリト曰ク

單稅制ヲ
行フモ併
存スル
財源
ヲ得ヘキ

官林官有地ヨリ中央政府ニ於テ凡ソ四五〇〇〇〇〇〇法一八七六年又タ地方ニ於テ四九五〇〇〇〇〇〇法一八七一年合セテ殆ント一〇〇〇〇〇〇〇〇法ヲ得ヘシ

郵便料電信料ニ於テ凡ソ一〇〇〇〇〇〇〇〇法餘ヲ得ヘシ

其他租稅ノ性質ヲ有セサル手數料ノ如キ雜收入ニ於テ凡ソ五〇〇〇〇〇〇〇法ノ收入ヲ得ヘシ

是等ノ收入ヲ併ヒ存スルトセハ單稅ヲ以テ支辨スヘキ額凡ソ一〇三〇〇〇〇〇〇〇法ニ過キサレシ然レモ此僅少ナル額ト雖モ尙ホ單稅ヲ以テ之ヲ得ントスルハ亦容易ノ業ニアラス抑英國ハ國富世界ニ

冠タル國ナリ且ツ假令佛國ハ其富英國ニ劣ラストナスモ佛國ハ元來富ノ配賦細分セラレタル處ニシテ英國ハ之ニ反シ其富一方ニ偏スル處ナルカ故ニ所得稅ヲ以テ收入ヲ得ルニ最適セル國柄トス然ルニ英國ニ於テ所得稅ヲ以テ最大額ヲ得タルノ時ト雖モ尙ホ其(一八一三年)ノ收入高四〇〇〇〇〇〇〇〇法ニ過キス今假ニ佛國一八七六年ニ於ケルノ富ハ英國ノ一八一三年ヨリ多ク又タ百般ノ複稅ヲ廢スルカ故ニ稅率ヲ増シテ所得稅ヲ課シ得ルトナスモ所得稅ノ單稅ヲ以テ佛國ニ於テ一〇〇〇〇〇〇〇〇〇法ヲ得ント欲スルハ未タ決シテ容易ナリトハ云フヲ得サルナリ

以上述ヘシ所ハボリユ一氏論旨ノ大要ナリ尙ホ詳細ナルトハ氏ノ著租稅論第三篇ニ就テ見ルヘシ之ヲ要スルニ以上ノ論旨ハ單稅ヲ以テ現今各國政府ノ必要ナル經費ヲ支辨スルニ適セサルヲ示シ併セテ單

税ノ遂ニ實行シカタク所以ヲ証明シタルモノト云フヘシ

第四百四節 複稅制ノ利

此章ノ端緒ニ敘述セシ如ク單稅制ノ

利アルトハ爭フヘカラス故ニ理想的ノ稅制トシテハ吾人之ヲ認ムト

雖凡如何セン方今ノ文明ノ程度ト社會實際上ノ事情トハ單稅ヲ行フ

ニ適セサルモノアルヲ蓋シ現今各國政府ハ皆巨大ナル陸海軍ヲ保持

スルノ必要アルカ爲メニ巨額ノ費用ヲ要シ且ツ各國政府ハ莫大ナル

公債ヲ有スルカ爲メニ亦少カラサル費用ヲ要スルハ實ニ爭フヘカラ

サルノ事實ナリ今此事實ニシテ存スルモノトセハ如何ナル收入多キ

租稅ト雖凡吾人ハ單一ナル租稅ヲ以テ此巨大ナル費用ヲ支辨スル

能ハズ即チ此巨額ヲ支辨セント欲スレハ勢ヒ諸種ノ租稅ヲ複課セサ

ルヲ得サルヲ見ルナリ是レ複稅ノ廢スヘカラサル所以ノ一ナリ然レ

凡尙ホ假ニ大ニ政費ノ節減シ得ヘキモノアリトスルモ如何ナル租稅

巨大ナル費用ヲ支辨スルハ

複稅制ニ如クハナシ

複稅制ハ平均ヲ防

カ長ク稅源ノ各局部ニ普及シ以テ負擔ヲシテ更ニ平等ナラシムルヲ得ヘキカ吾人ハ既ニ地租ト雖凡資本稅ト雖凡消費稅ト雖凡所得稅ト雖凡若シ單一ナルキハ決テ租稅ニ於ケル平等普及ノ目的ヲ達スルヲ能ハサルヲ見タリ複稅ノ制ハ實ニ此點ニ於テ少カラサル利便ヲ有ス即チ複稅制ニ於テハ一稅ノ達シカタク稅源ヨリ租稅ヲ徵收セント欲スルトハ他ノ租稅ヲ併課シテ其稅源ヨリ更ニ其租稅ヲ汲出シ又一稅ニ於テ一局部ニ偏重ナルキハ他ノ稅ヲ以テ其偏重ナル部分ヲ輕フシテ相補償セシメ又一稅ニ於テ一局部ニ偏輕ナルキハ他ノ稅ヲ以テ其偏輕ナル部分ニ複課シテ以テ其平均ヲ容易ナラシムルヲ得ヘシ夫レ租稅タルヤ其如何ナル種類ヲ論セス一得一失一長一短アルハ實ニ免ルヘカラサルモノトス然リト雖モ若シ稅制ニシテ單稅ナルキハ課稅常ニ一局部ニ偏重トナリ其害モ亦一局部ニ集合スルヲアルヲ免レス

然ルニ之ニ反シテ複税ノ制ヲ探ルルハ數多ノ租税ニ於テ一利一害互ニ相補償セシノ以テ一局部ニ幅濶スルカ如キノ弊害ヲ容易ニ避クルヲ得ヘシ然レハアダムスミス氏ヲ首トシテ諸ノ經濟家モ既ニ此點ニ於テハ一致ヲ表スルモノ、如シ曰ク若シ徵收ノ法煩雜ニシテ非常ノ不便ヲ與フルニアラサレハ複税ハ巨額ノ國費地方費ヲ要スル時ニ當ツテ租税ノ不平均ヲ防クノ一具ト云フヘシ如何トナレハ各税徵課ノ過誤悉ク一人ニ集ル者ニアラス則チ一税ヲ過徵セラルレハ他ノ一税ニ於テ幾許カ之ヲ避ケ其レヲシテ輕重平均セシムルヲ得レハナリト以テ複税ニ此大利益アルヲ知ル可キナリ然レハ單税ハ一方ニ於テ政費ノ大ニ節減スヘキモノアリト假定シ一方ニ於テ所得税ノ如キ直税ヲ細民ニマテ課税スルヲ容易ニシテ且ツ所得税ニ於テ各種ノ所得即チ課税ノ基礎ヲ知ルヲ最モ正確ナルヲ得ルモノト假定セハ輒チ

所得税ヲ以テ單税トナスモ或ハ可ナラン然レモ若シ此理想ノ境域ニ達スルヲ能ハスンハ實ニ複税制ハ止ムヲ得ベカラサル租税ノ良制ナリト云ハサルヘカラス然レモ吾人ハ又アーサー・ヤング氏及ヒ英國ノソル・コロンウオール・ルウイス氏ノ如ク税種益多ケレハ税法益善長ナリト云ヘル説ニハ左袒スルヲ能ハサルナリボリユイ氏云ヘラク純然タル單税制ト無限ノ複税制ノ間ニ自ラ中庸ノ存スルアリ(中略)方今ノ實況ニ於テ余輩カ望ム所ノ者ハ實ニ多種税ニアラスシテ簡單ナル複税ニアリト余モ氏ニ同意スルモノナリ方今吾國ノ税種ハ其收入ノ僅少ナル割合ニハ稍多キニ過クルモノ、如シ抑收入ノ極メテ僅少ナル租税ノ許多併存スルハ敢テ利ナキカ故ニ本邦税制改正ノ第一着手ハ宜ク國庫ニ利スルトコロノ僅少ナル税種ヲ可成減省シテ更ニ收入ノ巨大ナル税目ヲノミ保存スルニアルヘキカ

第十四章 一般ノ財産税及所得税(資本税及歳入税)

課税ノ基礎ハ財産ニ採ルヘキモノカ
ニ採ルベキモノカ
將タ所得ニ採ルベキモノカ

第百五節 課税ノ基礎ハ財産ニ採ルヘキモノカ將
タ所得ニ採ルヘキモノカ 租税ヲ徵收スルニ當リテ其税源ヲ
所得ニ取ルベク之ヲ各人ノ所有財産若クハ使用資本ニ課税スベカラ
ストハ余カ前章ニ陳ベシ所ナリ夫レ所有財産ヨリ租税ヲ徵收シ若ク
ハ使用資本ヲ減殺スルノ租税ハ租税ノ最モ不良ナルモノタル所以ハ
復タ多言ヲ要セスシテ明カナリ故ニ此章ニ於テ專ラ論究セントスル
所ノ目的ハ只租税ヲ賦課スルニ當リテ其基礎標準ヲ各自ノ財産ノ價
額若シクハ資本ノ價額ニ取ランカ或ハ各人ノ所得即チ歳入ニ取ラン
カノ問題即チ是レナリ蓋シ財産若シクハ資本額ヲ標準トシタル租税

租税ノ負擔ハ凡テ
不動資本
ニ墜ツル
トノ説

ト雖凡其負擔必シモ財産若クハ資本ニ落チ而シテ其財産若クハ資本
ヲ減殺スルモノニ非ス又所得ヲ基礎トシタル租税ト雖凡其徵課ノ程
度重キ片ハ所有財産ヲモ舉ゲテ之ニ供シ終ニ其資本ヲ減少スルノ結
果ヲ生スルモノナリ故ニ財産税若シクハ資本税ト所得税トノ比較ヲ
觀察スルニ方リテモ余輩ハ之ヲ租税ノ負擔ハ税源ノ如何ナル部分ニ
落ツルヤト云フノ點ヨリ觀察セスシテ矢張り之ヲ租税ノ原則ニ照ラ
シテ公正經濟財政ノ諸點ヨリシ即チ課税ノ基礎ヲ一般ノ財産若クハ
資本ニ採ルト之ヲ歳入ニ採ルトハ其利害孰レカ最モ甚シキヤ否其得
失ニ就テ研究セント欲スルニ在リ

第百六節 財産税及ヒ資本税論者ノ説 資本ニ課税セ

ント主張スル論者ノ第一ノ要點ハ彼重農學派ノ人士カ結局租税ノ負
擔ハ其如何ナル租税ヲ問ハス土地ノ所有主ニ歸スルモノナリト思考

セシト均シク凡テノ間接税ハ農工産物ノ消費ヲ減シ一般ノ生産ノ費用ヲ増加シ國家ノ生産ヲ妨グルモノナルカ故ニ其負擔ハ終ニ資本就中不動資本ノ所有者ニ歸スルモノナリ故ニ若シ消費税其他諸種ノ間税ノ負擔ハ實際常ニ必ス不動資本所有者ニ歸着スルモノナリトセバ中間ニ立ツ所ノ納税者ヲ除キ更ニ直接ニ資本ニ賦課シテ以テ徵稅費ヲ節減シ且ツ繁雜ナル手續ヲ廢スルニ如カズト爲ス者ナリ是レ資本稅論者ノ主唱スル所ノ第一ノ理由トス

第二 財産稅論者ハ又租稅ハ各人民ノ身体財産保護ノ保險料ナルカ故ニ其所有財産ノ多寡ニ應ジ各人ノ財産額ヲ標準トシテ之ニ課稅スルハ最モ公正ナルモノナリト主唱セリ

第三 財産ヲ以テ課稅ノ基礎ト爲スベキコトヲ主唱スル者ハ曰ク財産ヲ以テ課稅ノ基礎トスルトキハ其使用ノ如何ヲ問ハズ凡テ同額ノ

財産ニ課稅スルハ公正ナルトスル説

財産ニ課稅スルトキハ其基礎トスル説

ヨリモ廣シク課稅トスル説

財産ヲ有スルモノニハ均シク課稅セラルヘキヲ以テ租稅ノ負擔ハ最モ能ク各人ノ財産ト其平均ヲ得ベキナリ若シ其レ然ラズシテ歳入ヲ標準トシテ課稅センカ方今畫藏室ノ如キ金剛石ノ如キ専ラ美術ニ關スル繪畫裝飾物等ノ如キ物品ニ至リテハ設ヒ富民ハ其巨額ヲ有スト雖是レ皆其歳入ヲ生ゼザル財産ナルカ故ニ亦悉ク其課稅ヲ免カレ從ツテ巨額ナル財産ハ實際免稅セラル、ノ有様ヲ呈スルニ至ルベシ之ニ反シテ財産ハ其使用ノ如何ヲ問ハズ即チ其資本ニ用ヒラル、ト否ト又其歳入ヲ生ズルト否トヲ論セズ悉ク採ツテ之ニ課稅セバ課稅ノ基礎モ亦之ヲ歳入ニ採ルヨリ一層廣キヲ得ベシ是レ則チ財産稅ニ利益アルノ點ナリト

又曰ク動産ノ歳入ニ租稅アルニ當リテハ同額ノ資本亦必ズシモ同一ノ歳入ヲ生ゼザルカ故ニ歳入ノ多キ者ハ資本ニ對シテ租稅重ク歳入

歳入ニ課稅スルハ不公平

ノ少キ者ハ資本ニ對シテ租税輕キノ傾キ無キヲ得ズ例ヘバ同一ノ資本ヲ有スル者ニシテ一ハ之ヲ以テ土耳其若シクハ埃及ノ公債証書ヲ購ヒ一ハ之ヲ以テ巴里ノ公債証書若クハ土地抵當銀行ノ証券(クレジフオンシエ)ヲ購ヒシトセンニ一ハ信用薄キ政府ノ公債証書ナルカ故ニ利子ノ歩合非常ニ高ク一割以上ノ歳入ヲ生ズベキモ一ハ信用ノ厚キ政府ノ公債証書ナルカ故ニ三分乃至四分ノ歳入ヲ生ズルニ止マラン然ラバ則チ此二種ノ動産ヨリ生ズル歳入ニ均ク課税スルトセンカ低價ノ證書ヲ有スル者ハ之ヲ其高價ノ證書ヲ有スル者ニ比シ却テ三四倍ノ重税ヲ徵收セラルノ不權衡ト見ルニ至ラン豈不公平ノ甚タシキモノニアラスヤ然ルニ今之ヲ其公債証書若クハ證券ニ投シタル資本ノ額ニ比例シテ之ニ課税スル片ハ誠ニ公平ナルヲ得ベシト是レ資本税ヲ以テ歳入税ニ比シテ公平ナリトスル論者ノ言ナリ

財產ニ課税スルハ不生産的ノ財產ヲ導ヒテ更ニ有利ノ事業ニ就カシムルヲ得ヘシトノ税

財產ヲ知ルハ歳入ヲ知ルヨリモ易シト云フ説

第四 其使用如何ヲ問ハズ一般ニ財產ニ課税スルトキハ凡ヘテ不生産的ノ財產ヲ促カシテ有利ノ事業ニ就カシメ避金ヲ促カシテ資本ニ使用セシムルニ至ル其故如何ト云フニ凡ヘテ財產ハ其使用ノ如何ヲ問ハズ課税セラル、時ハ各人舉ツテ之ヲ不生産的ニ使用スルヲ止メ更ニ資本ニ利用シテ利益ヲ生ゼンヲ計ルベケレバナリ

第五 又曰ク各民ノ財產若クハ資本ヲ知ルハ歳入ヲ知ルヨリモ易シ財產若クハ資本ハ常ニ判然之ヲ確知スルヲ得ルト雖トモ其歳入ニ至リテハ唯之ヲ概算若クハ豫算スルニ止マリテ其實際ノ額ハ常ニ知リ易カラザルモノナリト

以上ノ五點ハ財產ヲ以テ課税ノ基礎トシ或ハ資本ヲ以テ課税ノ基礎トナスノ利ナルヲ説ク所ノ論者ノ説ヲ彙類シタルモノナリ請フ是レヨリ詳カニ之ヲ考究明セントス

現今ノ社
會ニアリ
テハ租稅
ノ負擔ハ
必スシモ
不動資本
ノ所有者
ニ販セス

第百七節 租稅ノ負擔ハ悉ク不動資本所有者ニ歸

スルト云ヘル説ノ辨妄 前章ニ於テ余ハ既ニ地租單稅說ヲ駁シ即チ其消費稅等諸種ノ間稅ノ負擔ハ竟ニ盡ク地主ニ歸ストノ説ハ全ク租稅負擔ノ原理ヲ誤解シタル者ニシテ更ニ其實ナシト云ヘリ今消費稅ノ負擔ハ悉ク不動資本ニ歸ストノ説ニ於テモ亦之ト等シク決シテ租稅負擔ノ眞想ヲ得タル者ナリトハ云フ丁能ハズ夫レ現今ノ各國ハ孤立ノ有様ニ非ズシテ殆ント外國ト交通セザルモノ莫ク又物品ノ輸出入アラザルハ莫シ故ニ又此等ノ地ニ於ケル生産者ハ内國消費稅ノ爲ノニ損失ヲ蒙リ其全額ヲ負擔スルニ至ルベシト云フ丁得ザルベシ今一例ヲ舉ゲテ云ハソニ曾テ佛國ニ於テ大ヒニ砂糖稅及葡萄酒稅ノ如キ消費稅ヲ増加シタリト雖モ葡萄園主及甜菜園主ノ歲入ハ其租稅額ニ應ジテ減少セス即チ消費稅ノ負擔ハ毫モ土地ノ所有者ニ

墜落セザリキ何トナレバ此等ノ地主ハ佛國ノ如ク租稅ヲ賦課セサル諸外國ニ常ニ其葡萄酒及砂糖ヲ輸出スル丁チ得タレバナリ殊ニ此時ハ砂糖ヲ輸出シタル丁最モ著ルシカリキ由是觀之ハ世界萬國ノ交際貿易ヲ爲スノ國ニ於テハ其消費品ニ課スル租稅ト雖モ其負擔悉ク不動資本ニ歸セザルヤ明カナリ抑々此種ノ租稅ノ負擔カ不動資本ニ歸スル丁ハ外國ト一切交通ヲ爲ササルカ若シクハ其交通ヲ爲スト雖モ萬國皆悉ク財政ノ制度ヲ同フスル片ニ於テノミ然リトス又消費稅間稅等ヲ全廢シテ不動資本ノ所有者即チ農産物若シクハ製造品ノ生産者ニ課稅スル片ハ之ヲ生産物ノ代價ニ加ヘテ漸次消費者ヨリ回收スベシト夫レ然リ若シ一國孤立シテ外國トノ關係絶無ニ歸スレハ或ハ生産者ガ其課セラレタル租稅ヲ悉ク消費者ニ移ストチ得ベケレ凡ソ今日ノ如ク外國ヨリ廉價ナル物品ヲ盛ンニ輸入シテ其競争ヲ試ミル

ノ時ニ於テハ其租税ノ轉移ノ如キモ亦豫期シタルカ如ク行ハル、能ハザルヤ明カナリサレハ斯ル租税負擔ニ於ケル誤謬ノ原理ニ基キタル資本税説ノ其道理ニ適セザルヲ復タ更ニ辨テ竣タサルベシ

第百八節 租税ハ財産保護ノ保險料ナルガ故ニ之ヲ

財産ニ課スベシト爲ス説ノ辨妄 財産税論者ハ曰ク人民カ政府ニ納ムル所ノ租税ハ人民カ身体財産ノ保護ニ對シ拂フ所ノ保險料ナルカ故ニ各人ハ其所有財産ノ額ニ應ジテ租税ヲ納ムルハ誠ニ至當ノヲナリト此種ノ論者ハ租税ヲ以テ財産保護ノ保險料ナリトスル者ナリ余ハ既ニ租税義解ノ章ニ於テ其妄ナル所以ヲ論破シタルカ故ニ今爰ニ再ビ之ヲ論駁スルノ必要ナキニ似タレモ更ニ一言之ヲ辨ズレハ政府ノ職務ハ身体財産ノ保護ノミニ止マラズ又タ國家カ租税ヲ徵收スルハ則チ其權利ニシテ人民カ之ヲ拂フハ義務ナリ豈ニ何ゾ租税ハ一

租税ハ財産保護ノ保險料ニアラズ

私人間ノ契約ニ因レル財産ノ保險料ト其性質ヲ同フスル者ナランヤ故ニ各人カ財産ノ多少ニ應ジテ納税スルノ理由ハ他ニ之アリテ存ス抑モ巨大ナル財産ハ政府ノ之ヲ保護スルニ當リテ巨大ノ費用ヲ要シ少數ナル財産ハ政府ノ之ヲ保護スルニ當リテ費用ノ少額ヲ要スルカ故ニ吾人ハ財力ニ比例シテ納税スヘシト云フニアラズ只ニ忍苦平等ノ理ニ基ツキテ貧富財力ヲ異ニスルノ人ハ其財力ニ比例シテ納税額ニ差異アラシムルノミニ又假令政府ノ職務ハ身体財産ノ保護ノミニアルトスルモ何故ニ代言士醫師勞動者畫工器械師等ノ如ク職業勤勞等ニ依テ其收入ヲ得ル者ニ至リテハ其財産ナキガ故ニ之ニ課税セラレザルヤ此等人民ノ身体歳入等モ亦等シク政府ノ保護ヲ蒙ムル者ニアラスヤ然ルニ此等ノ者ニ施ス保護ノ費用ニ限リテ獨リ之ヲ財産所有者ニノミ取ラントスルハ豈之ヲ不公平ナリト言ハザルヲ得ンヤ

第百九節 所得ニ課税スルヲ公平ナラズト爲ス説ノ辨妄

第一 財産税ヲ唱フル者ハ曰ク歳入ニ税スルトキハ書藏室金剛石庭園其他美術品ノ如キハ賦税ヲ免ル、者ニシテ凡ベテ此等ノ財産ハ所有主ノ富ノ度ヲ表スル所ノ外標ナリ然ルテ其財産ニシテ歳入ヲ生ゼザルガ故ニ之ニ課税セザルハ寔ニ公平ナラザルナリト然レモ余輩ハ財産中ノ不生産的ニ属スル部分例ヘバ庭園裝飾品書籍繪畫等ニ課税セザルカ如キハ左マデ公正ノ理ニ反スルモノトセズ縱令又公正ノ理ニ背クト爲スモ是等ノ財産ハ全國ノ富ニ比シテ極メテ少部分ニ過ギザルベシ故ニ此等ノ財産ニ課税セザレバトテ幾許ノ不公平カ有ル況ンヤ資本トシテ現レザル財産ノ如キハ之ヲ探知スルコト極メテ難ク又其價格ノ如キモ之ヲ確知スルコト最モ難キニ於テナヤ譬ヘバ繪畫美術品金剛石等ニ課税スルトセンニ其等ノ物品ハ之ヲ隠蔽スルニ甚

不生産的
財産ニハ
課税シ易
カラス

マ易キモノナルガ故ニ政府ハ常ニ收税官吏ヲ派遣シテ富民ノ家ニ入り其押入箆筒土藏等ヲ探究シテ繪畫若シクハ金剛石ヲ隠蔽スル者ナキヤ否ヤチ一々探査セザルベカラズ人民豈其煩瑣ニ堪ヘンヤ且ツ之レヲ探知スルコト容易ナリトスルモ元ト美術品ノ價格ノ如キハ各人ノ嗜好見識ニ依リテ常ニ一定セザルモノナルガ故ニ其評價甚ダ難ク從テ政府ハ檢査ノ爲メ評價ノ爲メニ許多ノ官吏ヲ使用ヒザルヲ得ズ故ニ其得ル所ノ收入ハ其收税ノ爲メニ要スル所ノ費用ト更ニ相償ハザルヤ明カナリ故ニ平常是等資本タラザル所ノ財産ニ課税スルコト眞ニ困難ニシテ只斯ノ如キ物品ニ課税スルノ便利ハ實ニ遺傳贈物ノ場合ニ在リトス蓋シ財産ノ人ニ遺讓サレ或ハ贈ラル、場合ニ當リテハ之ヲ受ル者自己ノ利益ヨリ物品目錄ニ脱漏ナキコトヲ欲シ從テ其價格ノ算定ニ非常ノ差違ナキヲ得ベキヲ以テナリ故ニ斯クノ如キ財

產所有權ノ移轉アル場合ニ當リテ其財産ニ課税スルハ最モ其當ヲ
得且ツ便利ヲ兼テタルモノト云フヘキナリ

第二 資本額ノ同一ナルニ當リテ若シ其資本ヨリ生ズル所得異ナル
トキハ其歳入ニ課税スレハ租税ニ輕重不平均ヲ生ズルモノナリ然レ
モ資本税ニ於テハ同一ノ資本ノ負擔ハ常ニ同一ナルコトヲ得ルガ故
ニ最モ公平ナリト爲スノ論者アリ然レモ此點ニ於テ余ノ考フル所ハ
全ク之ニ反セリ何トナレバ余ハ歳入ニ比例シテ租税ヲ課スベク而シ
テ歳入ノ同額ヲ生ズル資本ニ至リテハ果シテ同額ナルヤ否ヤヲ問ハ
ザルモ可ナリトスル者ナレハナリ加之ナラス余ハ却テ同一ノ資本ニ
同額ノ租税ヲ課スルヲ以テ公平ニ適セズト爲ス而シテ其資本額ニ
シテ同一ナリトスルモ其歳入ニ大小ノ差異アルニ當リテハ一ハ許多
ノ利益ヲ生シ一ハ些少ノ利益ヲ生ズルモノナレバ其各人ノ歳入利益

資本ヨリ生ズル所得ニモ
課税スル
トセハ資本
本ヨリ生ズ
ル所得ニモ
課税スル
ルニ當リ
テモ資本
額ニ憑ル
ヨリモ所
得額ニ基
クテ以テ
公正ナリ
トス

ニ比例シテ課税スルヲ以テ寧ロ正當ナリト考フル者ナレハナリ夫レ
人民ノ所得ニハ財産若シクハ資本ヨリ生ゼザル歳入モ數多存ゼリ例
ヘバ代言人醫師等ノ職業ヨリ得ル所ノ歳入官吏労働者等ノ俸給賃銀
等ヨリ受クル所ノ歳入ノ如キ皆然リ若シ夫レ租税ハ國民共同シテ之
ヲ負擔スルモノナリト云フヲ以テ原則トセバ何ゾ此等一身上ノ労働
ニ依リテ其歳入ヲ得ル所ノ人ニ課税セザルノ理アランヤ資本ヨリ生
ズル所得ト一身上ノ勤勞ヨリ生ズル所得トハ之ニ歳入税ヲ課スルニ
當リテ之ヲ區別セザルベカラザルハ固ヨリ論ナシ何トナレバ資本ヨ
リ生ズル所ノ歳入ハ正確ニシテ且ツ永久ノモノナリ一身上ノ労働ヨ
リ生ズル所ノ歳入ハ不正確ニシテ且ツ一時ノモノナリ故ニ前者ノ收
入ヲ有スルモノハ更ニ貯蓄ヲ爲スノ必要ナケレモ一身上ノ労働ニ依
テ歳入ヲ得ル者ハ必ズ歳入ノ一部ヲ貯蓄シテ以テ他日疾病其他老後

ノ用意ニ備ヘザルベカラス是レ永久ノ歳入ト生涯若クハ一時ノ歳入トハ更ニ區別シテ課税スベキ所以ナリ尙其詳細ナル點ニ至ツテハ之ヲ所得税ノ編ニ論ズベシ(若シ一身上ノ勤勞ニ依リテ歳入ヲ得ル所ノ人ニ課税セバ其課税ノ基礎ハ吾人之ヲ歳入ノ額ニ採ラサルヲ得ズ即チ資本價格ノ更ニ依ルベキ基礎ナケレバナリ若シ此等ノ歳入ニ課スルニ一定ノ租税ヲ以テスルトセバ何ツ資本ヨリ生ズル歳入ニノミ限リテ其歳入ノ額ニ依ラスシテ獨リ資本ノ額ニ比例シテ課税スベキノ理アラシヤ前ニ舉ゲタル例ニ依リテ見ルニ土耳其埃及ノ公債証書ノ如キ最モ危険ナルモノニ投シタル財産ハ之ヲ巴里府ノ公債証書若シクハ土地抵當銀行証券ノ如キ萬全ナルモノニ投シタル財産ニ比スレバ其資本額ハ同一ナリト雖モ歳入税ノ負擔ニ至リテハ實ニ三倍四倍ノ多キニ至ルベシ此動産負擔ノ不平均ニ就キテハボリユー氏モ亦之ニ

財産税ハ
不生産的
的トナス
ハト云ヘル
ハ蓋シ不

同意スルモノ、如シ何トナレバ氏ハ曰ク「歳入多クシテ價格少キ財産ノ歳入ハ分チテ二部ト爲ス即チ一部ヲ投入シタル資本ノ利子トシ一部ヲ危険ノ報酬ト爲ス故ニ危険ノ報酬ヲ除キテ之ニ課税スルハ稍々當然ナルガ如シ」ト然レモ余輩ハ危険ノ報酬ト雖トモ一己人ノ歳入ハ則チ歳入ナルガ故ニ凡ベテノ歳入ニ課税スルニ當リテハ(例ヘバ一身上ノ危険ヲ冒シテ獲得シタル投機商ノ營業利得若クハ危険ヲ冒セシ勤勞者ノ所得等ニ課税スルガ如ク)危険ノ報酬ナリトテ之ヲ免除スルノ理由ナク亦均シク之ニ課税スベキモノナリトスルナリ

第一百十節 財産税ハ財産ノ生産的使用ヲ誘導スル

ト云ヘル説ノ辨妄 財産ニ課税スルトキハ不生産的ノ財産ヲ變シテ更ニ生産的財産即チ資本ト爲シ從テ又浪費及奢侈ヲ抑制スルノ利アリト斯クノ如キノ思想ハ概テ空想ニシテ眞ニ其實効アルモノニ

アラズ且ツ設令聊カ其實アリトスルモ畢竟其租税ノ目的ニアラサル
ヤ明ケシ然レモ若シ其レ租税ノ目的ニシテ財産ヲ資本ニ使用セシメ
有利ノ事業ニ投ゼシムルニアリトセバ蓋ゾ職業勤勞等ヲ以テ生計ヲ
營ム者ニモ尙ホ課税シテ此等ノ人ヲ勤勉節儉ニ誘導獎勵セザル若シ
租税ノ結果ニシテ怠惰ナル財産ヲ起シテ更ニ活動スル所ノ資本ト爲
サシムルノ効驗アリトセバ何ツ又勤勞職業ヲ以テ生計ヲ營ム人等ニ
モ均ク課税シテ其勤勉努力ヲ獎勵セザルヤ此等ノ説ハ實ニ財産税ノ
利益ヲ稱揚セント欲シタル附會ノ説タルニ過ギザルナリ

**第百十一節 財産若クハ資本ハ所得ヨリモ之ヲ確知スルヲ易
シト云ヘル説ノ辨妄** 財産若クハ資本ハ明白ニシテ知リ易シト
雖モ歳入ノ如キハ唯推定スルニ止マリテ之ヲ確知スルヲ難シ然ルニ
財産税ニ於テハ課税ノ基礎確乎明瞭ナルガ故ニ之ヲ賦課スルニ最モ

歳入ハ知
難クハ知
り難クハ知
り難クハ知
易シト云
フハ非ナ

易キノ利アリト然レモ財産ハ知リ易ク歳入ハ確知シ難シト一概ニ論
斷スルハ蓋シ謬見ノ太甚シキモノタルヲ免カレズ夫レ財産ト雖モ各
個人ノ所有スル動産ノ如キニ至テハ其之ヲ査定確知スルハ甚ダ難ク
又其價格ノ如キモ美術品ノ類ニ至リテハ殊ニ知リ易カラザルナリ而
シテ又土地若シクハ家屋ノ如キ明瞭ナル財産ト雖モ其精密ナル價格
ヲ確知セント欲スルヤ實ニ容易ナラズ其概略ハ之ヲ近隣ノ土地家屋
等ノ賣買價格ニ比較シテ定メ得ベケレモ其精密ナル價格ニ至リテハ
先ツ其歳入ヲ知リテ後始メテ決シ得ベキモノナリ如何トナレバ之ヲ
賣買スル者ハ其土地若クハ家屋ノ如キ資本ヨリ生ズベキ歳入ノ多少
ニ依テ財産ノ價格ヲ算定スルモノナレバナリ故ニ此等財産ノ賣買價
格ハ多クハ其歳入ヲ乗算シタルモノニシテ其實際ニ近キ價格ヲ推測
スルヲ得ルハ獨リ其歳入ノ明瞭ナル時ニアリトス去レハ斯ノ如ク外

財産税ハ
收入ヲ生
セサル財
産ニモ課
税スル

ニ現レテ知り易キ財産ト雖モ其價格ヲ知ルテ誠ニ容易ナラズ其困難ハ歳入ヲ知ルト其間ニ甚タシキ徑庭アラザルナリ然レモ或ハ日ハハ歳入ト雖モ不動産ノ歳入ヲ知ルテハ易ク商業ノ利益職業等ノ所得等ヲ知ルハ實ニ容易ナラザルベシト然リ此等商工業ノ利益職業ノ所得等ノ如キハ歳入税ヲ賦課スルニ當リテ吾人ノ最モ之ヲ探知スルニ苦ム所ノモノニシテ之ヲ査定スルヤ亦容易ナルヘシト云フニアラス然レモ資本ニ課税スル時ハ此等ノ所得ハ凡ベテ課税ヲ免カル、モノナルガ故ニ全ク之ヲ免除セシムルモノナリ乃チ如カス寧ロ全ク免除セシヨリハ假令其所得ハ確知スルニ難シトスルモ少シク之ニ租税ヲ賦課シテ以テ更ニ租税ヲ一般ニ普及セシムルノ勝レルニハ

第百十二節 財産税ノ欠點第一 凡テ財産ヲ基礎トシ之ニ租税ヲ課スル時ハ其収入ヲ生ゼザル財産ニマデ課税スルノ不公平アリ

税スルノ
欠點アリ

收入同一
ナルナル
資本ニ全
一ニ課税
スルノ欠
點アリ

財産ニ課
税シテ歳
入ニ課税
セサルハ
國民ノ大
部分ヲ

リ又財産ニ課税スル時ハ元ト同一ノ資本ナレバ假令ソレヨリ生ズル収入ニ多少ノ差アリト雖モ猶ホ同一ノ租税ヲ課セサルヲ得サルモノニソ實ニ不公平タルヲ免レズ夫ノ財産税論者ノ唱フル不生産的財産ヲ變ジテ更ニ生産的財産ニ誘導シ其資本ヲ増加スト云ヘル論旨ヲ以テ押スルハ猶ホ同額ノ資本ニ同一ノ租税ヲ課スルモノハ人々ヲシテ争フテ成ルベク之ヲ利用シテ以テ巨大ナル収入ヲ得ンヲ務メシムルガ故ニ經濟上大ニ利アリト云フヲ得ヘシ然レモカ、ル説ハ幾分カ理ナキニ非ズト雖モ蓋シ亦不實ノ説ニシテ財産税ハ常ニ必ズシモ斯クノ如キ長結果ヲ生ズベシトノミ推定スベキモノニアラザルナリ

第百十三節 財産税若シクハ資本税ノ欠點第二

第一 公正ノ點ヨリ觀察テ下スルハ租税ハ財力ニ應ジテ國民一般ニ協同シテ負擔スベキノ理ハ己既ニ明カナリ然ルニ財産若シクハ資本

免除ス故
ニ不公平
ナリ

且ツ課税
ノ基礎狭
少ニシテ
少庫ニ收
入少シ

ニノミ課税スルトキハ一身上ノ勤勞ヲ以テ歳入ヲ得ルモノハ悉ク租
税ヲ免除セラルニ至ル夫レ勤勞ノ歳入ハ固ト資本ヨリ生ズル歳入ト
均シク課税スベキモノニアラザレハ巨大ナル歳入ヲ有スル富民ニシ
テ尙ホ且ツ其收入一身上ノ勤勞ヨリ生ズルガ爲メニ亦均ク之カ租税
ヲ免除セラル、ニ至リテハ租税ハ國民全体ニ普及セズシテ實ニ不公
平ノ甚シキモノタルニ至ルヘシ

第二 財政ノ點ヨリ觀察テ下シ即チ若シ財産ニノミ課税シテ凡ベチ
一身上ノ歳入ハ之カ租税ヲ免除スルモノトセハ其賦課スベキ租税ノ
基礎極ノテ狭少ト爲リ財政上其政府ニ納ムル所ノ收入ニ至リテモ亦
少カラザル相異ヲ生ズボリ、氏ハ此點ニ關シテ佛國ニ就テ觀察ヲ爲
シテ爾ヘタク「資本税ヲ行フ時ハ之ヲ各種ノ歳入ニ課税スル時ニ比セ
ハ其租税ヲ免カル、者ハ國家ノ財源及歳入ノ四分ノ三ニ至ルベシト

氏ハ又曰ク「方今佛國ノ資本ハ流動不動ヲ合セテ概算スレバ千五百億
法ニ過ギザルベシ此レヨリシテ平均五分ノ歳入ヲ得ルトスレバ甚メ
實際ヨリハ多カルヘケレハ今假リニ五分ヲ得ルト爲セバ全國ノ資本
ノ歳入ハ七十五億法トナルベシ故ニ資本税ヲ行フトキハ國稅地方稅
ノ全額ヲ徵收スルノ基礎ハ實ニ此七十五億法ノ歳入ニシテ今其半ヲ
徵スルモ佛國政府全体ノ必要經費ヲ補フニ足ラザルベシ之ニ反シテ
佛國人民ノ歳入ハ官吏ノ俸給高尚ナル職業ヲ事トスルモノ假令ヘハ
代言士醫師等ノ如キ者ノ所得ト工業商業ヲ營ム者ノ所得トヲ合算ス
レバ蓋シ殆ド二百五十億法ニ達セン方今開明社會ニ於テ獨リ最モ巨
利ヲ得ル者又得ザルベカラザル者ハ代言士醫師器械師技術家等ナリ
然ルニ此輩ハ一錢ダモ國費地方費ヲ補ハズ又學士教員勞力者營業者
皆其負擔ニ與カラザルヲ以テ果チ至正ノ稅法ト云ハンカ余輩ハ之ヲ

解スルヲ能ハザルナリ況ンヤ此等ノ人民ノ歳入ヲ合算スレバ殆ンド二百五十億法ニシテ資本ヨリ生ズル歳入即チ七十五億法ニ比較スルトキハ實ニ三倍ノ巨額ニ達スルニ於テチヤ故ニ佛國人民ノ資本ニノミ課税スルトキハ此等歳入ノ三分ノ一ヲ税シ他ノ三分ノ二ハ凡テ租税ヲ免カル、モノナリ然ラバ則チ資本税ハ之ヲ歳入税ニ比シ其課税ノ基礎僅カニ其三分ノ一ニ達セザルモノナリト云フヘシ是レボリョー氏が佛國ノ有様ニ就キテ爲セシ所ノ概算ナリ余輩ハ此例ヲ推シテ以テ資本税ハ歳入税ニ比シテ課税ノ基礎非常ニ狭小ニシテ且ツ財政上收入ノ最モ乏シキモノナリト云ヘル趣ユヘカラサル一大欠點ノアル在リテ存スルヲ認ムル者ナリ

第十五章 直税及間税ノ比較

第百十四節 直税及間税ハ共ニ各得失アルヲ余ハ前章

ニ於テ累進税ノ不可ナル所以ヲ論シ且ツ單税ノ行ヒ難キ所以ヲモ亦既ニ明カニシタリ夫レ現今各國政府ハ皆複税ノ制度ニ依テ其歳計ヲ維持シ收入ヲ得ルコトヲ爲セリ即チ余ハ何レノ國ニ於テモ數種ノ租税ノ並課セラル、チ見ルナリ今ヤ進ンテ余ハ各種ノ税目ニ就ヒテ論及スルニ先チ豫メ先ツ租税ノ二大種類即チ直税及間税ノ長短得失ヲ研究セントス此處ニ直税ト云フハ前章ニ詳論シタルカ如ク地租家屋税其他一般ノ所得税等ヲ總稱シ間税トハ消費税關稅財產ノ移轉税等ヲ總稱スルモノナリ抑々直税ト間税トハ頗ル其性質ヲ異ニスルモノ

第十五章 直税及間税ノ比較

直税及間
税ハ共ニ
各得失アル
ルカ故ニ
其スルヲ
能ハス

ナルカ故ニ其利害得失ニ至リテモ其間亦自ラ徑庭ナキ能ハス夫レ直
 税ニシテ完全無缺ノモノタラハ吾人ハ更ニ間税ヲ賦課スルノ必要ヲ
 見ス若シ又間税ニシテ完全無缺ナラシノハ直税ハ則チ全廢スルモ尙
 ホ可ナリ然ルニ現今各國財政ノ制度ニ於テ直税間税並ヒ存シテ其
 チ全廢スルヲ能ハサル所以ノ理ハ直税間税各々一得一失一長一短ア
 ルカ故ナリ世人ハ往々租税ノ制度ヲ論スルニ方リテ唯タ一税ノミチ
 見テ其不平均其缺點ヲ喋々論難スレモ現今ノ租税制度ニアリテハ復
 税ノ制度ヲ採ルカ故ニ一税ノ偏重若シクハ偏輕ナルヲ見テ以テ直
 ニ其利害得失ヲ斷スヘカヲサルナリ凡ソ複税ノ制ニ於テハ吾人ハ宜
 シク數多ノ租税ヲ併セ之ヲ鑒ミ其全体ニ於テ國民ノ如何ナル部分ニ
 偏重ナルヤ將タ偏輕ナルヤニ就テ更ニ觀察ヲ下スヘキナリ直税及間
 税ノ如キハ其性質ノ全ク相反スルカ故ニ之ヲ並ヒ存スルニ利アリ即

直税ハ公
 平ニ被税
 者ノ財力
 ニ比例ス

チ一税ニ於テ偏輕ナル所ハ一税ニ於テ之ヲ補ヒ一税ニ於テ偏重ナル
 ハ所他ノ一税ヲ以テ之カ平均ヲ計ルコトヲ得ヘキナリ故ニ直税及ヒ
 間税ノ利害得失ノ如キハ宜シク公平ノ眼ヲ以テ之ヲ比較シ而シテ其
 判斷ヲ下スヘキモノトス

第百十五節 直税ノ利益第一、公平ニ被税者ノ財力ニ

比例スルヲ(公正ノ點ヨリ觀察ス)直税ハ之ヲ賦課スルニ其
 基礎ハ專ラ納税者ノ財産若クハ歳入ノ如キモノニアリテ又之チ人ニ
 賦課スルノ場合ト雖モ其生計ノ度貧富ノ差財力ノ差ニ依リテ以テ之
 カ段階ヲ設ケ而シテ之ニ比例セシメントチ務ムルカ故ニ直税ハ常ニ
 被税者ノ財力ニ比例シ從テ其賦課ノ公平ナルヤ實ニ明白ナリトス假
 令實際ニ於テハ充分被税者ノ財力ニ比例シテ公平ナルヲ能ハサル
 ケレモ(即チ例ヲ所得税ニ取レハ該税ニ於テハ營業ノ所得若クハ高尙

ナル職業ヨリ生スル所得ノ如キハ之ヲ各自ノ申告若クハ調査ニ依リテ知り得ヘキモ元ト納税者ノ性質ニ正直ナルト不正直ナルトノ差アルト調査委員若クハ検査官吏等ニ寛ナルト嚴ナルトノ差アリテ到底其正確ナル所得ヲ明知スルコト能ハサルカ故ニ實際ニ於テハ十分公平ニ所得税ヲ賦課スルヲ難シト雖凡免ニ角理論上ニ於テハ直税ハ最モ善ク財力ニ應シテ公平ニ賦課セラレタル租税ニシテ間税ハ全ク之ニ反ス何トナレハ間税ニ在リテハ之ヲ人民ノ消費ニ課シ或ハ財産ノ移轉ニ課スルカ故ニ其消費ノ多寡若クハ財産移轉ノ度數ハ決シテ消費若クハ移轉者ノ財力ニ比例スルモノニアラサレハナリ去レハトテ消費税ヲ前納シテ後チニ之ヲ消費者ヨリ回收スヘキ消費物品ノ製造者若クハ販賣者ハ直接ニコソ其納税ノ衝ニ當ルモノナレ政府ハ決シテ是等ノ人ノ財産ニ比例シテ消費税ヲ課スルモノニアラス故ニ消費

直税ハ其
收入確定
不動産ナリ

税ノ如キ財産移轉税ノ如キ元ト初メヨリ政府ハ財力ニ比例シテ之ヲ徵收センコトヲ務メタルモノニ非ス故ニ又其租税ノ既ニ主義ニ於テ財力ニ比例シテ公平ナラサルヤ復タ多言ヲ用ヒスシテ明カナリトス

第百十六節 直税ノ利益第二收入ノ確定不動産ナルコト
(財政ノ點ヨリ觀察ス) 直税ニ於テハ收入額ノ正確ニシテ不動ナルノ利益アリ凡ソ直税ニ於テハ之ヲ賦課スルニ二個ノ方法アリ即チ一ハ配賦法ニシテ定額ヲ納税者ニ配賦スルコト一ハ定率法ニシテ定率ヲ以テ徵收スルコト是レナリ其何レノ方法ニ據ルモ直税ニ於テハ其收入ハ平時ニ於テ確乎正確ナルヤ實ニ争フヘカラス例ヘハ配賦法ニ據ルトキハ租税ハ初メヨリ一定ノ額ヲ納税者ニ配賦スルモノナルカ故ニ必ス其豫期通りノ額ヲ得ラルヘキヤ明カナリ又定率法ニ據ルモ課税物件ノ基礎ハ確乎動カスヘカラスモノアリテ且ツ定率ヲ以

且基礎課税ノ基礎課税ノ定スルカ故ニ於テ戦時ニ於テ税率ヲ増シテ收入ヲ増スルヲ利アリ

直税ハ徴収簡易ニ徴税費少シ

直税ハ間接税ニ比シテ經濟上ニ損失妨害ヲ加フルヲ少シ

直税ノ巨額ナル收入ヲ得ルニ難シ

テ之ニ賦課スルモノナルカ故ニ其收入額ハ豫算ニ違フコトノ甚シカラサルヲ亦照々乎トシテ蔽フヘカテサル事實ナリ其ノ此ノ如ク直税ニアリテハ其基礎平時ニ於テ確定スルカ故ニ戦争若シクハ非常ノ場合ニ當リテ政府其收入ヲ要スル時ハ直チニ税率ヲ増加スルノ方法ニ由テ必要ナル收入ヲ得ヘキカ故ニ甚タ利便アルモノトス例ヘハ夫ノ英國政府ノ所得税ニ於ケルカ如ク政府ハ平時ニアツテハ其税率ヲ輕クシ而シテ一朝戦争等非常ノ時ニ際シテハ忽チ増率ヲ以テ容易ニ軍費ノ一部ヲ補フコトヲ得ルカ如キ即チ是レナリ

第百十七節 直税ノ利益第三直税ハ徴収簡易ニ徴税費少シ 直税ハ納税ノ帳簿ニ依リ年々之ヲ賦課スルモノナレハ其徴収太タ容易ニシテ徴税費ニ至リテモ亦從テ些少ナリ且ツ監督法簡單ナルカ故ニ人民ノ自由ヲ妨害シ營業ニ繁雜ナル検査束縛等ヲ加フル

カ如キコト至リテ鮮ク爲メニ政府ト人民間ニ紛議ヲ生スル等幾ント希レナルノ利アリ

第百十八節 直税ノ利益第四直税ハ經濟上ニ損失妨害ヲ加フルコト間接税ニ比シテ少ナシ(經濟ノ點ヨリ觀察ス) 夫レ直税ハ一々ヒ其基礎定マリ課税物件ノ調査一度終ルトキハ少クトモ暫時ノ間ハ其性質一定シ變動稀レニ且ツ年々一定ノ基礎ニ據リ一定ノ帳簿ニ本キテ徴收セラルモノナレハ時々定期ノ改正アルニアラスンハ毎年屢々人民ノ生産營業等ニ煩累ヲ蒙ムラセ産業ヲ妨害スル等ノコトナキカ故ニ經濟上富ノ生産分配等ニ有害ナル影響ヲ及ホスコト割合ニ少キハ實ニ直税ニ在リトス

第百十九節 直税ノ不利第一實際上現今各國政府ノ巨大ナル支出ハ直税ノ收入ノミヲ以テ之ヲ充タス能

ハザルコト 夫レ現今各國政府ノ歳計ハ率チ巨額ノ支出ヲ要ス
 故ニ余輩ハ其支出ニ應スルニ方リ獨リ直税ノミチ以テセシコト實ニ
 其困難ナルヲ見ルナリ夫レ歐洲各國ノ租税ニ於テ直税ハ何程ニシテ
 間税ノ收入ハ如何ナルヤ其比例ハ余曾テ之ヲ前章ニ示シタリキ即チ
 租税收入ノ七割乃至八割ハ間税ノ收入ニシテ直税ハ實ニ租税全体ノ
 二割乃至三割ニ過キサルナリ今以上ノ各國ニ於テ假ニ此巨大ナル收
 入ヲ生スル所ノ間税ヲ廢シ更ニ直税ノミチ以テ巨大ナル收入ヲ得ン
 ト欲スルハ直接國税ヲ三四倍ニ増加セサルヘカラス是レ現今ノ有様
 ニ於テ到底爲シ難キモノナリ嘗テ前章ニモ述タル如ク日本政府ハ割
 合ニ巨大ナル直税收入ヲ有スルモノニシテ間税ノ收入ノ如キハ其租
 税ノ一小部分ヲ爲スニ過キス然レモ尙ホ且ツ今日ニ於テ間税ヲ全廢
 シテ直税ノ收入ニノミ依ラントスルハ直税ヲ五割増加セサルヘカ

直税ハ之
 細民ヨ
 リ難シ
 ルヲ徴
 收ス

ラス是レ未タ容易ナリト謂フコト能ハサルナリ何トナレハ本邦ノ直税
 ハ既ニ稍々重キノ傾アリ然ルニ今間税ヲ廢シテ之ニ換フルニ他ノ直
 税ノ新規ナル者ヲ以テセント欲セハ假令一般ニ營業税ヲ布キ若クハ
 一般ニ家屋税ヲ賦課スルトスルモ今日間税ヨリ收入スル所ノ租税ノ
 全部ヲ得ルコトハ亦決シテ容易ノ業ニアラサルヘケレハナリ何故ニ
 直税ハ究竟之レノミチ以テ現今巨大ナル各國政府ノ經費ヲ支フルニ
 足ラサルカ其理由ノ如キハ他ノ直税ノ不利ナル點ヲ觀察スル時ハ便
 チ明亮ナリトス請フ次節ニ之ヲ陳ヘン

第百二十節 直税ノ不利第一 直税ハ細民ニ賦課スルコ

ト難キコト 夫レ直税ノ性質タルヤ納税者チシテ定期ニ割合ニ貧民
 坏ノ生計ノ度ニ比シテハ巨額ノ財産ヲ徵收スルモノナルカ故ニ中等
 以上ノ人民ニアリテハ敢テ怠タラスシテ之ヲ一時ニ納付スルコトナ

得へケレバ彼ノ勞力者ノ如キ星ヲ戴キ月ヲ帶ヒ以テ僅カニ日々ノ賃銀ヲ得テ其生計ヲ營ミ常ニ些少ノ餘裕蓄財タモナキ輩ニアリテハ定期ニ割合ニ巨額ナル金錢ヲ政府ニ徵收セラル、一是レ實ニ堪へ能アヘキニアラス且ツ彼等ハ實ニ之ヲ上納スルノ能力ヲ欠クモノナルカ故ニ中民以下ノ細民貧民等ヨリ直稅ヲ徵收スル一ハ假令其額極メテ僅少ナリトスルモ其徵收極メテ行ヒ難ク又其督促ヲシテ如何ニ嚴急ナラシムルモ終ニ政府ハ納稅ノ目的ヲ達スル一能ハサルニ至ルヘシ是レ則チ直稅ノ細民ニ及ホシ難キ重モナル理由ナリトス

第百廿一節 直稅ノ不利第三、直稅ハ課稅ノ基礎間稅ニ比シテ狹小ナル一 直稅ハ一時ニ割合ニ巨額ナル金錢ヲ徵收スルモノナルカ故ニ細民ハ到底之ヲ納ムルニ困難多キコトハ前節ニ述ヘタルカ如シ故ニ若シ極メテ僅少ナル額ニシテ分頭稅ノ如キ租稅ナ

直稅ハ間稅ニ比シテ基礎狹少ナリ

課稅物件ヲ定ムル三方法

第一、被稅者ノ申告

レハ假令直稅ト雖モ幾分カ之ヲ細民ニ推シ及ホス一得へケレバ此レトテモ分頭稅ヲ課スル一ハ消費稅ヲ課シテ貧民ヨリ納稅セシムルカ如ク固ト容易ナルモノニアラサルナリ或人ハ當今ノ所得稅ヲ擴張シテ更ニ細民ニマテ直稅ヲ課スルノ容易ナル一ヲ主張スレバ彼ノ各人ノ所得ヲ基礎トスル所得稅ノ如キハ之ヲ細民ニマテ推シ及ホス一極メテ難シトス元來直稅ヲ賦課スルノ基礎ヲ知ルノ方法ハ次ノ三方法ノ外ニ出サルモノナリ曰ク

- 第一 被稅者ノ申告
- 第二 外標ヨリノ推定
- 第三 政府ノ檢定

是レナリ
第一被稅者ノ申告トハ即チ被稅者各自カ課稅物件ヲ政府ニ届ケ出テ

第二、外標
ヨリノ推
定
第三、政府
ノ檢定

以テ申告スルノ方法ヲ云フモノニシテ土地所有者カ土地ノ面積收穫等ヲ申告シ家屋所有主カ家屋ノ大小價格家賃等ヲ申告シ又各營業者カ各自ノ所得高ヲ届ケ出ツルカ如キ是レナリ然レモ申告ノ方法ハ果シテ財産若シクハ所得ノ正實ナル額ヲ知ルヲ得ヘキヤ否ヤニ至リテハ更ニ之ヲ知ルヲ能ハス何トナレハ人ニ正直ナル者アリ不正直ナル者アリ不正直ナル者ハ詐偽ノ申告ヲ爲シ財産若クハ所得ヲ隱蔽シ以テ課稅ヲ免ル、コトナシトセサレハナリ故ニ申告届出ノ方法ニ依リテ課稅物件ノ額ヲ知ラントシ唯此レノミニ依頼スヘカラス然テハ第二ノ方法ハ如何夫ノ推定法ノ如キモ只外部ノ標準種々ノ徵候ニ依リテ其實際ヲ推測セントスルモノナレハ之カ財産若クハ所得額ノ實ヲ表示セル外標ヲ得ルコト難ク爲メニ其實ヲ推定スルニ當リテ亦必スシモ常ニ正確ナリトハ斷定スルコトヲ得サルナリ其最モ實地ニ近

キモノハ第三ノ方法即チ政府ノ檢定法是レナリ抑モ檢定法トハ政府直接ニ官吏ヲ派遣シ或ハ人民ノ家宅ニ就キ或ハ種々ノ文書帳簿ヲ檢査シ隱蔽スル者アレハ從テ之ヲ發ク等凡テ人民ノ財産所得等ノ如キ課稅物件ヲ探査スルモノナレハ其最モ實地ニ近キモノ、得易キヤ亦明カナリト雖モ然レモ此方法ノ弊害アルコトハ前二者ニ比スルマテモナク人民ノ自由ヲ束縛妨害シ收稅吏ト人民間ノ紛擾ヲ惹起シ易ク從テ人民ノ政府ニ對スル感情ヲ害スル等其弊竇一ニシテ足ラサルニアリ故ニ人民カ殊ニ壓制ニ狎ル、ノ國ニ在リテハ檢定法ハ稍々行ヒ易キニ似タレモ自由ヲ重ンスルノ國ニ於テハ之ヲ行フコト極メテ難シ去レハ政府カ課稅物件ヲ知ルニ當リテ三者何レカ其一ヲ用ユルモ到底正確ナルコトヲ得ルコト難シト云フヘシ抑々彼所得ニ課稅スルニ當リテ其課稅ノ基礎ト爲スヘキ所得額ヲ知ルカ如キハ實ニ吾人ノ最モ

或種類ノ所得ハ之ヲ確知シシガタシ

難スル所ナリ何トナレハ工業商業ノ如キ營業ノ利得高尙ナル職業ノ利益ノ如キハ之ヲ査定スルコト極メテ困難ナルノミナラス到底正確ナルコトヲ得ル能ハサルモノナレハナリ然ルニ其不正確ナル基礎ニ依リテ更ニ所得稅ヲ人民一般ニ課セントスルニ至ラハ納稅ノ資力乏キ細民ハ尙ホ一層負擔ノ重キヲ荷フノ感覺アルヘキナリ今現今各國ニ有スル所ノ巨大ナル間稅ノ收入ヲ總チテ之ニ換フルニ直稅ヲ以テセントスレハ分頭稅ヲ以テスルカ如ク少額ヲ人民ヨリ徵收スルセ遂ニ其欠ヲ補フニ足ラサルヘシ然ラハ則チ所得稅ヲ以テ細民ニマテ推シ及ホシテ以テ一般ニ課稅センカ既ニ隙フルカ如ク一身上勤勞ノ所得ヲ確知スルノ困難アリ(細民ハ財產ヲ有セサルカ故ニ其所得ハ専ラ勤勞ノ所得ナリ)爲メニ其不確實ナル基礎ニ依リテ所得稅ヲ細民ニ賦課スルハ實ニ一層ノ困難アルヲ免レス抑々所得稅ヲ以テ夫ノ間稅ノ

所得稅ヲ細民ニマテ課スルマテ困難

收入ヲ補フホドノ額ヲ徵收セントセハ勢各所得ニ對スル稅率ヲ高メサルヲ得ス然ルニ其基礎ニシテ既ニ不正確ナルカ上尙ホ之ニ加フルニ重稅ヲ課セントスルキハ細民ハ殆ント堪ユヘカラサルノ困難ヲ感スルヤ知ルヘキナリ故ニ現ニ各國ノ所得稅法ニ免除ノ點アルアリテ之ヲシテ細民ニ推シ及ホサシメサルハ是レ實ニ直稅ハ小歳入ニ賦課スルノ難キト正確ナル所得額ノ知リ難クシテ且ツ不公平ナル負擔ヲ細民ニ負荷セシムルノ困難ナルニ基カスンハアラス既ニ人民一般ニ直稅ヲ課スルコト果シテ困難ナリトセハ直接稅ハ實ニ課稅ノ基礎ノ狭小ナルモノナリト云ハサルヘカラス夫レ一國人民中ニ於テ中等以上ノ財產ヲ有スルモノハ極メテ稀レニシテ其數割合亦甚タ少キモノナルヲハ夫ノ現ニ各國所得稅納者ノ數ノ國民全体ノ數ニ比シテ極メテ少數ナルニ徴シテモ尙ホ之ヲ知ルヘキナリ然ラハ直稅ノミニ依ル

故ニ直税ハ國民ノ大部分ニ及ハス

直税ハ收入ニ屈伸力乏シ

トキハ租税ハ國民中ノ少數ノミニ課セラルルモノトナリ國民ノ大部分ハ却テ全ク之カ租税ヲ負ハサルモノトナルヘシ是レ租税ノ全体ニ就テ不公平ナルモノト云ハサルヲ得サルノ所以ナリ

第百廿二節

直税ノ不利第四直税ニ於テハ收入ニ屈伸力乏シ

間税ニ比較シテ直税ノ殊ニ不利ナル點ハ其收入ニ屈伸力ノ存セサルコト是レナリ直税ノ收入ハ殆ント一定不動ニシテ一方ヨリ之ヲ見レハ前ニ陳ヘシ如ク財政上確定ノ收入ヲ得ルノ利便アレトキハ國富ノ増進ニ應シ人口ノ増加ニ伴フテ自然ニ收入ノ増加スルカ如キ性質ハ直税ニ於テハ最モ罕レナルモノトス夫レ地租ト雖地土地ノ價格ノ増加スルニ從テ之カ期ヲ定メ以テ地價改正ヲ行ヘハ其地租ノ收入ヲ増スヲ得ヘケレト年々改正セラルヘキモノニアラス故ニ一定ノ年期間ハ地租收入ノ如キハ殆ント確定不動ノモノナリト

消費稅財
產移轉稅
ノ如キ間
稅ノ收稅
ハ自然ニ
増加スル
ノ傾向アリ

直税中屈伸力ヲ有スルヲ多キモノハ營業稅及

云フヘシ然ルニ彼間税ノ收入即チ消費稅ノ收入財產移轉稅ノ收入ノ如キニ至リテハ常ニ國富ノ發達人人口ノ増加ニ伴フテ更ニ稅率ヲ變更スルヲナクシテ自カラ其收入漸次増加スヘキノ傾向ヲ有スルモノトス理論上ヨリ云フモ元來人間ノ消費人間ノ行爲例ヘハ賣買讓與取引移轉等ノ如キハ國富發達シ人口増加スルニ從テ自然繁多ニ趣クヤ實ニ疑フヘカラサルノ理ニシテ其之ニ課稅スル者ニアリテモ其收入ノ年々増加スヘキモノタルトハ亦既ニ明カナリ是故ニ之ヲ各國ノ實際ニ徵スルモ消費稅及ヒ財產移轉稅ノ收入ノ如キハ漸次増加シテ止マサルモノトス夫レ直税ニアリテ所得稅ノ如キ或ハ營業稅ノ如キモノハ人民増加シ營業益々頻繁隆盛ニ赴クトキハ幾分カ收入ニ於テ増スヘキ傾キヲ有スルモノナルカ故ニ直税中ニテ最モ自然ノ屈伸力ヲ有スルモノハ亦所得稅及ヒ營業稅ナリトス然ルニ今此二稅ヲ取リテ更

所得稅ト

四百十二

ニ間稅ニ比較スルニ尙ホ且ツ其收入ノ屈伸力ニ於テ間稅ニ劣レルモノアルヲ見ルナリボリユ一氏ハ直稅及ヒ間稅ノ收入ニ就テ左ノ觀察ヲ爲セリ

直稅及間稅ノ收入
ニ就テボリユ一氏
カナセシ
觀察ヲ引
用ス

氏ハ曰ク一八五〇年ヨリ一八七三年ニ至ル英國ノ統計年表ニ據ルニ同國所得稅ノ收入ハ一八六四年度及一八七一年度ニ於テ其稅率免除額減除額共ニ同一ニシテ又兩年中ニ英國政治上ノ地位敢テ異變ナキ時ニ於テ更ニ兩會計年度ノ所得稅收入額ヲ比較スルニ一八六四年度ニ於テハ其收入高七九五、八〇〇〇磅ニシテ一八七一年度ニ於テハ其收入九〇八、四〇〇〇磅ナリ去レハ此六年間ニ増加シタル收入高ハ僅カニ一割四分トス然ルニ間稅ニ於テ蒸酒稅ノ景況ヲ見ルニ一八六四年度及一八七一年度ニ於テハ其稅率ニ敢テ變更ナケレハ蒸酒稅ノ收入高ハ一八六四年度ニ於テ輸入稅内地稅ヲ合セテ一三四七、九四二六

英國直稅
及間稅ノ
收入高増
加ノ比較

磅ニシテ一八七一年度ニ於テハ一六七九、八四四磅ナリ其増加ハ實ニ三割四分ニ當ルモノトス又同兩年度ニ於ケル間稅即チ其稅率ノ變更セサリシ所ノ百般ノ間稅即チ蒸酒ノ輸入稅内地稅麥芽稅珈琲稅葡萄酒稅煙草稅約定書類ノ印番稅(遺傳稅ヲ除キ)爲替手形並ニ請取書ノ稅郵便稅等ヲ合算シテ見ルトキハ一八六四年度ニ於テハ三四八三、二七四八磅、一八七一年度ニ於テハ四一四二、二七三八磅ニシテ其増加六五八、九九九〇磅即チ一割九分ノ増加ニ當ル更ニ此間稅増加ノ比例ヲ前ノ直稅即チ所得稅増加ノ割合ニ比スレハ亦以テ間稅屈伸力ノ大ナルヲ知ルニ足ラン

又一八五八年ヨリ十五箇年間ノ有様ニ就イテ觀察シテ曰ク一八五八年度ニ於テハ英國内地間稅ノ收入額ハ一七九〇、一五四五磅ナリシニ一八七三年度ニ至リテハ二七一一、五九六九磅ニ上レリ其増加ハ九二一、

第十五章 直稅及間稅ノ比較

四百十三

四四二四磅ニシテ即チ五割一分ニ當ル又一八五八年度ニ於ケル英國ノ所得税法ハ一〇〇「ポンド」以上ノ所得ニ一「ポンド」ニ付五「ペンス」ノ割合ヲ以テ課税セリ今之ヲ一「ポンド」ニ付一「ペニー」ヲ課セリトシテ更ニ同年ノ收入ヲ換算スルトキハ一三三六七一六磅ヲ得ルノ割合ニ當レリ又一八七三年度ニ於テハ所得税ノ賦課ハ一「ポンド」ニ付三「ペンス」ヲ課セシカ今之ヲ同一ノ割合即チ一「ポンド」ニ付一「ペニー」ニ引直シ更ニ同年度ノ收入ヲ換算スルトキハ一八九七〇〇〇磅ヲ得ヘキ割合ナリ然ラハ則チ歳入一「ポンド」ニ付一「ペニー」ヲ課スルノ割合ニシテ其十五箇年間ニ於ケル歳入ノ増加ハ實ニ五六一〇〇〇磅即チ凡ソ四割二分ニ當ルモノトス

一八五八年度ノ所得税ト一八七三年度ノ所得税トハ其税率ニ於テ變更アルノミナラス稍々少シク異ナル點ナキニアラス一〇〇「ポンド」

「以上ノ所得ニ悉ク課税スルモノハ兩年度ニ於テ敢テ異ナル所ナケレバ獨リ一八七三年度ニ於テハ百「ポンド」ヨリ三〇〇「ポンド」ニ至ル收入ハ八〇「ポンド」ヲ除キテ其殘額ニ課税セリ然レバ此差異ハ其收入ニ敢テ甚シキ變更ヲ生セサルヘキナリ何トナレハ一八七三年度ニ於テハ前ノ年度ニ比シテ一「ポンド」ニ付二「ペンス」ヲ減率セリ故ニ申告高ニ詐偽隱匿少ナク從テ幾分ノ收入ヲ増加セルモノアリト推測スルコトヲ得ヘケレハナリ

此十五年間ニ内地間税ニ於テモ頗ル著ルキ改正起ラサルニアラス即チ一八六一年ニ於テ其巨額ノ收入ヲ得タリシ紙税ヲ廢シタルカ如キ「是レナリ又一八六〇年ニ於テハ麥芽税ヲ減率シタルレバ此減率ハ蒸酒税ヲ増加シタルカ爲メニ相償フヲ得タリ

一八五八年度ニ於テハ内地間税ノ收入一七九〇、一五四五磅ナレバ之

ニ同年外國及ヒ殖民地ヨリ輸入セシ蒸酒輸入税ヲ加フルトキハ其額
 二〇一七、九八六四磅ニ達ス然ルニ一八七三年度ニ於ケル内地間税收
 入高二七一一、五九六九磅ニ加フルニ更ニ同年外國及ヒ殖民地ヨリ輸
 入シタル蒸酒輸入税ヲ以テスルトキハ其總額三二四四、五五九九磅ト
 爲ル實ニ此十五年間ノ増加ハ一二二六、五七三五磅ニ當ルモノナリ但
 シ其中税率ノ増加ニ依リテ増加シタルノ額ハ九三、七〇〇〇磅ナルガ
 故ニ自然ノ増加ハ即チ一一三二、八七三五磅ニ當ルモノトス即チ一八
 五八年度ノ收入ニ比スレハ五割六分ヲ増加シタリ之ヲ此間ニ於ケル
 所得税ノ増加四割二分ニ比スルキハ亦以テ間税ニ於ケル收入増加ノ
 至大ナルヲ見ルニ足ラン又此十五年間ニ於ケル英國ノ印紙税ノ増加
 ハ五割八分ニ當リ又同年間ノ郵便税ノ如キハ非常ノ増加ヲ爲シ其割
 合ハ殆ント八割ニ達スト云ヘリ

英國直税
及間税收
入高増加
ノ比較

氏ハ又換地利ノ實例ニ就キ更ニ觀察シテ曰ク一八六八年ヨリ一八七
 三年ニ至ル間ニ間税ノ税率ハ非常ノ變更ナク而シテ此六年間ニ於ケ
 ル間税收入ノ増加ハ三割五分二八ニシテ直税ノ増加ハ歳入税ノ増加
 ナモ合算シテ僅カニ二割四分一四ニ當ルト云ヘリ

佛國直税
及間税收
入高増加
ノ比較

次ニ氏ハ佛國ノ景況ニ就テ爾ヘラク一八三〇年ヨリ一八六九年ニ至
 ル四十年間ハ尤モ變動ノ少カリシ時期ナリ然ルニ一八三〇年ニ於ケ
 ル直税ノ收入高ハ三三〇〇〇〇〇〇法ニシテ一八六九年ニハ五、七
 五〇〇〇〇〇〇法ニ達セリ故ニ其増加ハ二四五〇〇〇〇〇〇法ニシ
 テ即チ七割四分ノ割合ナリ其間同時ニ間税ノ收入ハ五、七四〇〇〇〇
 〇〇法ヨリ一三、二八〇〇〇〇〇〇法ニ達シ即チ七、五四〇〇〇〇〇〇
 法ノ増加ニシテ一倍三割一分ノ増加ニ當ルト然レモ此比較ハ稍々正
 當ナラザル所ナキニアラズ何トナレバ佛國ノ直税ハ配賦法ニ依ルモ

ノユシテ其收入ノ確定不動ナルヤ決シテ怪シムニ足ラサレハナリ且
 ヲ佛國ニ於テハ彼直税中最モ多ク屈伸力ヲ有スル一般ノ所得税ナシ
 然ラバ何レノ税カ佛國租税中最モ屈伸力ニ富ムモノツト云ヘバ彼ノ
 商工業ノ發達營業ノ繁榮ニ伴フテ收入ヲ増スベキ一税即チ營業稅是
 レナリ今暫ク營業稅ノミニ就テ觀察スルニ一八三三年ノ營業稅收
 入ハ二四三一四七七〇法ニシテ一八六九年ノ收入ハ六一五七二〇〇
 〇法ナリ即チ三七二五八〇〇法ノ増加ニシテ其割合一倍五割三分
 ニ當ル只此巨額ナル營業稅増加ノ景況ヲ見ルトキハ直税ノ増加ハ却
 テ遙ニ間税ノ増加ニ優レルノ觀ナキニアラスト雖此間ニ於ケル營
 業稅ノ發達ヲ見テ以テ之ヲ通常ノ度トシ營業稅ノ増加ハ常ニ間税ノ
 増加ニ過クルト此ノ如キモノナリトハ未タ斷定スルヲ得ザルナリ
 何トナレバ一八三三年ヨリ一八六九年ニ至ルノ間ニハ屢々條例ヲ改正

間税ニ自
 然ノ増加
 力アルハ
 政府ノ濫
 費ヲ獎勵
 ストノ説

レテ從前免狀ヲ與ヘタル諸職工ノ免許稅ヲ廢シ更ニ建築家代言士邑
 ノ官吏等從前營業稅ナカリシ職業ニ稅ヲ課セシカ如キ改革アリシ
 ノミナラス此間規模ノ擴張シタル工業増加シ生産ニ協力分業等ノ方
 法盛ニ用ヒラレ從テ營業ノ景況盡ク其面目ヲ一變シ大ニ殖産工業ノ
 發達進捗ヲ見ルニ至リシニ依レハナリ故ニ此等ノ原因ヲ計算ニ入レ
 テ之ヲ非常ナル場合ト看做サバ常時ニ於ケル營業稅收入増加ノ有様
 ハ之ヲ其間稅收入ノ屈伸力アルニ比スレハ遠ク及バザルヤ明カナリ
 或ル人ハ曰ク收入ニ自然ノ屈伸力アルハ間税ノ一大利益ナレ此ノ
 如ク收入ニ自然ノ増加アルハ政府ノ濫費ヲ獎勵スルノ傾キアリ何ト
 ナレバ政府ハ年々其收入ニ幾分ノ増加アルベキヲ見込ミ必ズ事業ヲ
 擴張センコトヲ勉ムベケレバナリト然レ此ノ如キ攻撃ハ余輩爰ニ
 論辯スルノ價值ナシト信ズ何トナレハ斯ノ如キノ説ハ人間ノ百事ハ

間税ノ收
入ハ戰等
不景氣際
ノ時ニ際
シテ減少
スルカ故
ニ不便ナ
リトスル
説

皆不善ニ歸スルト爲ス彼厭世論者(ベツシミスト)ノ説ニシテ余輩財政ノ變チ爲ス者ハ其收入ニ自然ノ増加力アルハ宜シク財政上ノ一便宜トシテ常ニ喜ブベキナレハ政府力之ヲ浪費スルト之ヲ濫用スルトハ敢テ不問ニ付スルモ可ナレハナリ
又或ル人ハ曰ク間接税ハ自然ノ屈伸力アルガ故ニ常ニ國富繁榮ニ赴キ人口増殖スルノ場合ニ當リテハ收入自然ニ増加スベキ傾キチ有スレハ其屈伸力アルノ所以ハ只伸張スル力アルノミチ云フニアラズシテ又時トシテハ減縮スルヲナシトセズ假令ハ商業上ノ不景氣恐慌戰亂等ノ時ニ際シテ直税ノ收入ハ敢テ變動ナカルベキモ間税ノ收入ニ至リテハ必ず減少スベシ乃チ政府カ收入ヲ尤モ要スル非常ノ時ニ於テ其幾分チ減スルノ傾キナキ能ハズ此レ間税ノ欠點ニアラスヤト是レ蓋シ收入上屈伸力アルカ故ニ亦商業上不景氣ノ時ニ於テ其收入

直税ノ收
入ト雖ハ
戰時ニハ
幾分チ減
少ス

減ズルノ恐アルチ以テ間税ノ一大欠點ト爲スモノナリ夫レ然リ間税ノ收入ハ直税ノ如ク固定不動ノモノニアラズ然レハ或ル論者ハ又此間税ノ減縮力チ以テ不便ナリトセズ即チ縱令直税ト雖ハ戰亂等ノ時ニ當リテハ其收入チ減少シ或ハ減少セズトスルモ怠納者延納歎願者等續出スベキチ以テ直税ニ於テモ固定不動ノ收入ハ亦決シテ得ベカラズ故ニ不景氣戰爭等ノ時ニ當リテ財政上ノ不便アルハ何レノ租税ニ依ルモ終ニ免カルベカラサルモノナレバ其收入ノ欠乏スルニ當リテハ須ラク國債ヲ募集シテ以テ之ヲ補フベク唯リ租税ノ收入ノミチ類ムベカラサルナリ抑々間接税ハ農工商ノ諸業活潑ニシテ人民ノ福利増進シ從テ物品ノ消費高増加スルノ時ニ在リテハ政府ノ財政モ亦之ガ利益ヲ享有シ得ヘキモノトス然ルニ農工商ノ諸業振ハズ所謂不景氣ノ虞ニ際シテハ人民ハ其消費ニ加ヘ租税ノ負擔ヲ免カル、コトチ

間税ノ收
入ニ減縮

力アハ
國家ノ財
政ヲシテ
人民ノ計
ノ盛衰ト
同時ニ進
退セシム
ルモノニ
シテ公正
ナルモノ
ナリトス
ル説

得ルガ故ニ國ノ財政モ亦即時ニ此不景氣ノ影響ヲ蒙ルリ爲メニ間接
 税ノ收入減シ政府ハ止テ得ズ歳出ニ節儉ヲ加ヘザルベカラザルニ至
 ル去レバ國家ト雖亦民間ノ不景氣困難ニ連レテ自ラ節減シ得ヘキ
 程度ニ從ヒ其節儉ヲ勤ムベキハ理ノ當ニ然ルヘキトス故ニ斯ノ如
 ク人民ノ盛衰ト共ニ伸縮消長シテ増減スルノ性質アルハ則チ國家ノ
 財政ト人民ノ生計トヲ同時ニ進退セシムルモノニシテ寔ニ稱賛スベ
 キ自然ノ作用ナリト云フヘシ是レ一方ニ於テ間税收入ノ減縮力アル
 モ絶テ害ナクシテ反テ公正ノ理ニ適スト論ズル論者ノ説ナリ
 (備考)ホリユー氏ノ説ニ據レバ戦争困難等ニ當リテ間税ニ係ル收入
 高ノ減少ハ必ズシモ甚シキニ至ラサルモノナリ一八七三年佛國ノ大
 藏卿マングユ氏ノ報告セシ普佛戦争費ノ出納報告ノ統計ヲ見ルニ
 一八七〇年租税ノ不納額ハ一二二五九、〇〇〇法一八七一年ノ不

納額ハ二四一六〇、〇〇〇法ナリトス此損失高ハ其戦争以前ニ於
 ケル收入額ニ比スレバ一八七〇年ハ僅カニ六七分ニシテ一八七一
 年ニ於テハ一割四五分ニ過ギズ是ヲ以テ之ヲ見レハ其損失高ノ如
 キモ割合ニ少ナキモノト云フベシ去レバ戦亂ノ時ト雖亦間税ノ損
 失ハ割合ニ大ナラス此レ他ナシ人民消費高商業取引高ノ如キハ平
 素習慣ト爲リテ急ニ之ヲ減縮セザル所以ノ理ニ因ルモノトス然ル
 ニ直税ハ斯ル狀況ニ際シテハ却テ之ヲ拂フニ困難ノアル在リテ存
 スルモノ、如シ蓋シ直税ハ今日ニアリテハ幸ニ之ヲ輕課スルガ故
 ニ納税ニ延期怠納者少シト雖亦若シ間税ヲ廢シテ獨リ直税ノミニ
 依テ重税ヲ課スルカ如キアテハ戦争等凡ソ非常ノ場合ニ際シテ
 ハ必ヲスヤ怠納者延納者等續出シテ收入上必要ノ場合ニ乏欠チ生
 スルガ如キ事實ヲ呈スルニ至ルヘシ云々ト

間稅收入ノ豫算ハ内端ニ積ルベシ

ホリユー氏ハ斯ノ如ク論ズルト雖凡固ト間稅ノ收入ハ直稅收入ノ如ク固定不動ナルコト能ハズ故ニ年々豫算ヨリハ多少ノ増減アルコトヲ豫期セザルヘカラズ然レ凡財政ノ當局者ハ宜シク間稅ニ此増減變動ノ性質アルコトヲ肝銘シテ以テ豫算ノ際ニ當リテハ小心翼々慎密ヲ之レ旨トシ彼ノ豫算ヲ組ムニ直チニ前年ノ收入高キ以テ之カ標準ト爲スカ如キコトナク亦宜シク數年以前ノ收入高ノ例ヘバ前五年間ノ收入ノ平均ヲ取り少額ニ豫算ヲ見積ルヘシ斯ノ如クセハ決シテ實際ノ收入ニ於テ其豫算ニ甚シキ差違アルカ如キナカルベキナリ然レ凡或ハ曰ハンズノ如ク間稅ノ收入ヲ少額ニ見積ル時ハ實際ノ收入常ニ豫算ニ超過スルカ故ニ政府ハ其剩餘ヲ濫用浪費スルノ恐レアリト然レ凡此レ只杞憂ニ過ギザルナリ若シ果シテ年々實際ノ收入ニ餘裕ヲ生ズルガ如キ幸福ノコトアラバ宜シク財政ノ都合ニ依リテ償還ス

ルコトヲ約束シタル國債ノ償却ニ之ヲ充ツヘキナリ尙ホ何チカ其措置ニ苦マンヤ抑々豫算ニ超過シタル實收入ハ之ヲ平時ノ用ニ供スレバ從テ翌年度ヨリ増費ノ傾キヲ生ズルガ如キ虞アルガ故ニ豫算外ノ收入即チ歳入ニ餘利アルキハ則チ政府ハ常ニ之ヲ公債ノ償却ニ充ツルヲ以テ得策トス斯ノ如ク豫算調製法ニ注意スルトキハ實際ノ收入豫算ヨリ屢々減少スル等ノコトナカルベシ例ヘバ一八六九年刊行ノ佛國財政要覽ニ據ルニ一八四〇年ヨリ一八六八年ニ至ルマデ二十九年ノ間間稅ノ收入豫算外ニ超過セシコト二十五回ニシテ其豫算ニ達セザリシコト僅カニ四回ニ過ギス而シテ其四回ハ一八四七年一八五一年一八六〇年一八六四年ニアリテ就中其不足ノ尤モ甚シカリシ年ト雖モ僅カニ三四〇〇〇〇〇〇法ニ過ギズ以テ間稅ニ收入ノ屈伸力アリト雖トモ決シテ恐ル、ニ足ラザルコト知ルベキナリ直稅ハ時トシテ英國

直税ハ戰
争等ニ際
シテ税率
ヲ増シテ
收入ヲ増
加スルヲ
得

所得税ノ例ニ於ケルカ如ク國家戰爭困難等ノ時ニ際シ更ニ税率ヲ増
加シ以テ其收入ヲ増加シ得ベキノ利益アリ然レモ若シ直税ニシテ此
利益ヲ得ント欲セバ宜シク平常ニ於テ之ヲ輕課シ彼英國ガクリミヤ
戰爭ノ時ニ實施セシガ如ク國民安危ノ關スル所國家存亡ノ判カル秋
ニ當リテ人民愛國ノ感情ニ訴ヘ以テ直税ヲ重課スヘシ斯ノ如クセハ
其望ム所ノ巨大ナル收入ヲ得ヘキナリ

第百廿三節 直税ハ政府ノ冗費ヲ抑制スルノ効驗アリ

直税ハ政
府ノ濫費
ヲ抑制ス
ルノ効ア
リト云フ

ト云ヘル説 余輩ハ既ニ直税ノ利害得失ニ就テ其概略ヲ説述セリ
然ルニ直税ノ利ヲ唱フル者ハ又曰ク直税ハ間税ニ比スレハ人民自
其負擔ヲ感覺スルコト甚シキガ故ニ直税ノ増加ニ當リテハ往々甚
キ抵抗アリ是ヲ以テ直税ノ負擔ハ濫リニ増加スルヲ能ハズ爲メニ中
央政府若シクハ地方政府ノ經費ノ濫費ヲ抑制シ從テ冗費ヲ節スルノ

効アリト然レモ此説タル直税ノ効用ヲ賞揚スルヲ其實ニ過ギタリト
云フベシ何トナレバ假令間税ヲ全廢シテ直税ノミヲ賦課スルトスル
モ決シテ政府ノ費用ノ濫増ヲ防グニ足ラザルベケレハナリホリユ
一氏ハ曰ク佛國革命ノ亂ニ當リテ諸々ノ消費税ヲ廢シ殆ンド專ラ直
税ヲ施セシト雖モ佛國人民ヲシテ更ニ深慮ノ徒タラシムルニ足ラズ
又埃及ノ役ノ如キ遠征ヲ抑止スルニ足ラズ其他毫モ人民ノ負擔ヲ減
ゼシムルニ足ラザリシニアラズヤ英國ニ於テハ一七九八年ニ於テビ
ット氏所得税ノ法ヲ設ケテ一割ヲ課シ一八〇二年アミエンス和議條約
ニ依リテ之ヲ廢シ一八〇三年再ビ之ヲ置キ五分ノ税率ヲ課シ次ニ一
八〇六年ニ再ビ一割ヲ課セリ其重キコト斯ノ如シト雖モ毫モ英國人
民ヲシテ狂ゲテ和議ヲ望マシムルニ足ラザリシニアラズヤ又方今直
税ノ尤モ重キモノハ伊太利ニ及フモノナク即チ勳産税ニ一割三分二

課シ其他地地利ノ歳入税ニ一割六分ヲ課スルカ如キ既ニ重税ニ違
 スト雖モ尙ホ兵備土木等ノ費用其國力ニ過グルモ之ヲ如何トモスル
 能ハサルニアラスヤ世ノ經濟家ハ往々輕卒ニ失シテ本ト人民ノ舉動
 ハ一時ノ激發感動ニ由ルモノニシテ之ヲ各人一個ニ問ヘバ必ズシモ
 然ラザルモ一國ノ人民トシテハ決シテ其利益ノ如何ヲ考ヘテ進退ス
 ルモノニアラザルコトヲ願ミザルモノナリ彼ノマコーレー氏ノ卓絶ナ
 ル英國史ノ序文ヲ讀ミシ者ハ一六四〇年ノ戰ニ當リテ英國人民カ其
 前日ニ在リテハ之ヲ思フタモ尙ホ厭ヒシ所ノ租税ヲ拂フテ更ニ願ミ
 ザリシコトヲ記スルナルベシ云々ト

故ニ直税ノ効驗ハ政府ノ濫費ヲ抑制シ政府ヲシテ謹慎ナラシメ而シ
 テ道德上ノ効驗アリト云フニ至リテハ蓋シ經言タルニ過ギズ又假令
 幾分カ其利益アリトスルモ抑モ財政ノ論ニ於テハ政府ノ財源ヲ限ル

間税ハ納
 税隨意ニ
 納額些少
 ニシテ負
 擔ヲ覺ユ
 ト云フ說

チ以テ主ト爲スベカラズ只其探究セントスル所ハ英國ノ大家サア、コ
 ルンウオール、ルウイス氏ガ云ヒシ如ク大藏大臣ノ任ハ人民ノ不平ヲ
 起スコト最モ少クシテ貨幣ヲ得ルコト最モ多キニアリト云ヘルカ如
 ク國家ノ生産ヲ妨グルコト最モ鮮少ニ國家毎年ノ貯蓄ヲ減ズルコト
 最モ少ク而シテ貨幣ヲ得ルコト最モ多キノ方法ヲ研究セント欲スルニ在
 ルナリ去レバ租税ノ効驗ニ道德上ノ利益アルヤ否ヤハ固ヨリ之ヲ問フ
 ニ及バザルナリ請フ是レヨリ更ニ間税ノ利害得失ニ就テ論究セントス

第百廿四節 間税ノ利益第一、間税ハ納税期隨意ニシ
 テ納額亦極メテ輕微ナルガ故ニ負税者カ其負擔ヲ感
 ズルコト常ニ輕キコト 間税ノ負擔ハ其最後ノ負税者ニ達スル
 ニ當リテ其金額甚メ僅少ナルニアリ假令ヘバ日本ノ造酒税ノ如キ間
 税中ノ巨大ナルモノニシテ其税率モ極メテ重キモノナレバ最後ノ消

費者が負擔スベキ金額ハ僅カニ清酒一合ニ付四厘ノ割合ニ當ルト云
 へリ且ツ間税ニ於テハ其一時ノ負擔額極メテ僅少ナルノミナラズ屢
 數回ニ分チテ隨意ノ時ニ之ヲ納ムルノ便利アリ即チ彼直税ノ如ク一
 時ニ且ツ定期ニ少ナカラサル額ヲ政府ニ納税セザルベカラザルカ如
 キ性質ノモノニアラズ故ニ直税ノ負擔ハ直接ニシテ人民ノ之ヲ感ベ
 ルコト甚シ然レモ間税ノ負擔ニ至リテハ一様ニ人民ハ之ヲ負フト雖
 モ其負擔ヲ感ズルコト甚シカラズ勿論直税ト間税トチ間ハス其實際
 ノ負擔ニ至ツテハ敢テ異ナル所ナシト雖モ一ニアリテハ直接ニ政府
 ノ督促ヲ受ケ政府ハ直接ニ之ヲ收納シ人民ハ租税納濟ノ請取書ヲ取
 ルモノナルカ故ニ人心ニ納税ノ苦痛ヲ感セシムルヲ直接ナリ然ルニ
 間税ニアリテハ假令其負擔ハ實際人民力之ヲ受クルモノナリト雖モ
 隨時消費物ヲ購求スルニ際シテ之ヲ拂フモノニシテ例ヘハ酒ノ消費

間税ハ人
 心ニ適ス
 ルト云ヘ
 ル説

税ヲ拂フトセンニ酒ヲ購買スル毎ニ租税ハ酒ノ代價中ニ包含サル、
 ト雖モ酒屋ハ其代價請取証ノ隅ニ租税ノ額ヲ記載スルモノニアラサル
 ナリ故ニ實際ノ負擔ニ至リテハ間税ト雖モ直税ニ比シテ毫モ異ナル
 ヲケレモ只人心上ニ與フトコロノ感動ニハ多少ノ差別アリテ存ス是レ
 直税ノ負擔ハ人民甚ダ苛酷ナルガ如クニ之ヲ感シ間税ノ負擔ハ恰モ大
 氣ノ壓力ノ如ク其之カ負荷ノ重キヲ感ズルコト較々薄キ所以ナリトス
 然レモ此點ニ關シテホリユー氏ハ曰ク此説タル間税ノ利ヲ偏視スル
 モノタルヲ免カレズ何トナレハ此説タル既ニ久シク設置セン所ノ租
 税ニ於テノミ爾カ云フヘキモ若シ新ニ間税ヲ課スルカ若クハ之ヲ増
 加スルノ場合ニ際シテハ被税者必ズ其負擔ヲ覺ユヘケレハナリト又
 曰ク是故ニ間税ノ利ハ直税ニ比シテ遙カニ人心ニ適スト云ヘル説ハ
 非ナリ何トナレバ間税ト雖モ其税率輕クシテ徵收法簡易ナルニアラ

スンバ人心ニ適スルコトナケレバナリ例ハ佛國ニ於ケル酒類税ノ如キ摺附木税ノ如キ往時佛國ノ鹽税ノ如キハ皆人心ニ違背シ人心ヲ激動シ且ツ嫌厭セラルコト實ニ直税ニ優ル所アルガ如シ故ニ間税ハ必ズシモ直税ニ比シテ人心ニ適ストハ蓋シ誣妄ノ言ト云フヘシ彼生産容易ニシテ從フテ奸詐行レ易ク又家内ノ搜索若クハ繁雜ナル規則ヲ以テ廣ク人民ノ大部分ニ及ボス時ハ其人心ヲ激動スルコト却テ直税ヨリモ甚シカラン云々ト云ヘリ

又間税ヲ拂フハ人々ノ隨意ナリト云フニ至リテハ余輩之ニ同意スルコト能ハザルナリ何トナレバ若シ間税ノ負擔ヲ免レント欲シテ世人其消費ヲ廢スルヲ得ルトセバ例ハ直税ニ於テモ之ト均シク節儉ヲ勵メ以テ税額ヲ經濟シ得ベケレバナリ例ハ人アリ曾テ月々五圓ノ烟草ヲ消費シタルモノカ烟草税ノ増加シタルガ爲メニ之ヲ廢ムル

間税ノ隨意ナリト云フナリト云フ直税モ亦然リ

租税ニ隨意ナルハ不可ナリ

但シ間税ノ隨意ナルハ時即チ拂ヒ易キ時ニ分チテ少額ヲ納ムルカ納ムルノ便アルナリ

コトヲ得ルトセハ直税ノ増加ノ爲メニ亦均シク五圓ノ消費ヲ節儉シテ其税額丈ヲ經濟スルコトヲ得ヘケレハナリ且ツ夫レ租税ノ上ニ就テ隨意ノ性質アルハ國家財政上ノ利便ニハアテサルナリ何トナレハ税率ノ増加スルニ從テ消費著ルク減額スルモノハ財政上ニ尠カラザル不利ヲ生ズルモノナレバナリ然レモ又醜リテ之ヲ見ルトキハ消費税ト雖モ常ニ必ズシモ隨意ノ性質ヲ有スルコトハ言ヒ難シ何トナレバ若シ消費税ニシテ人生ノ必需品ニ課セラレタリトスレバ假令税率ニ増加アルトモ其消費ノ節減シ難キヤ明カナレバナリ故ニ納税ノ隨意ナル性質ヲ以テ間税ノ一大利便ナリト稱スルニ至リテハ蓋シ無稽ノ言タルヲ免カレザルナリ然レモ又現今消費税ノ重モナル者即チ酒類税烟艸税等ニ就テ見ルハ凡テ人ノ酒ヲ購ヒ又烟艸ヲ購フ時ハ幾分か餘裕アル時ニ於テシ隨意ノ時ニ於テシ或ハ拂ヒ易キ時ニ於テスル

第十五章 直税及間税ノ比較

モノナレハ餘裕ナキ時ニ當リテハ幾分カ其消費ヲ節儉シ得ベキモノトス去レバ間税ノ必需品ニ課セラレタルモノヲ除キテハ納税者ハ常ニ餘裕ノ有無ニ依テ納税ノ時期ヲ多少隨意ニ伸縮加減スルコトヲ得ベキヤ亦明カナリ

節百廿五節 間税ノ利益第二、間税ハ巨大ノ收入ヲ得

ルノ財源ニシテ又其賦課ヲシテ容易ニ細民ニマデ及ホサシムルコト 間税ノ眞ノ一大利益ハ既ニ前節ニ陳ベシカ如ク其一時ニ納税スル額極メテ僅少ナルト其納税期ノ隨意ナルト又數回ニ分チテ少額ヲ隨時納税スルノ便利アリ直税ハ既ニ詳論シタル如ク理論ニ於テハ稍々公平ナルモ眞正ニ公平ナル直税ヲ見出スコト最モ難キト且ツ一時割合ニ巨額ノ税ヲ徵收スルガ故ニ之ヲ小財産家、細民及ビ貧民等中等以下ノ生活ヲ爲ス者ニ課スルト難ク從テ課税ノ基

間税ハ細民ニ租税ヲ負擔セシムル一良法ナリ

間税ハ基礎廣ク隨テ收入巨大ナリ

礎極メテ狭少ナリ然ルニ間税ハ全ク之ニ反シテ課税ノ基礎極メテ廣ク即チ必需品ニ課シタル間税ノ如キハ殆ンド分頭税ノ如ク國民全体ニ普及スルモノナルカ故ニ其收入ノ巨大ナルハ亦爭フベカラザルノ事實トス且ツ漸次國民ノ參政權ヲ擴張スルニ至リタルガ如キ現今ノ自由國ニ於テハ例ヘバ佛蘭西共和國ノ如キ其細民ハ一方ニ於テ政權ヲ有シナカラ一方ニ於テハ毫モ租税ヲ負擔セザルガ如キ傾キナキヲ得ズ故ニ其參政權ノ區域甚ダ廣闊ナル自由國ニ在リテハ其如何ナル手段ヲ施スモ租税ヲ細民ニマデ及ボサザルヲ得ズ即チ其廣ク課税スルノ方法ハ只消費ノ最モ廣キ物ニ消費税ヲ課スルノ外復タ他ニ良方法ヲ見出ス能ハザルナリ或ル人曰ク租税ハ結局不動産ノ收入利潤給料ノ一ニ賦課スルモノニシテ若シ唯一箇ニノミ賦課シテ他ノ二者ニ及ボサザルトキハ必ず不平等ヲ來サザルヲ得ズ即チ租税中右三者

ノ收入ニ向ツテ平等ニ賦課シ得ベキモノハ只一ニ消費税ニアリ但シ
不動産税ノ如キハ只其一ニ賦課スルニ過ギズト云ヘリ

(備考)間税ハ其基礎廣大ニ且ツ一般人民ニ普及スルモノナルガ故ニ
内地ニ滞留スル外國人ニマテ租税ヲ負擔セシムルヲ得是レ外國
人ノ出入頻繁ナル大都會ノ地ニ於テハ殊ニ緊要ナリトス

第百廿六節 間税ノ利益第三間税ハ收入ノ屈伸力ヲ

間税ノ屈伸力アリ

有スルガ故ニ國家ノ財政ハ人民生計ノ盛衰ニ伴フテ
自然ノ平均ヲ保ツヲ得ルコト 此點ニ關シテハ既ニ前節ニ
於テ詳細ニ論セシガ如ク間税ハ其收入ニ自然ノ増加力アルカ爲メ亦
財政上少カラザル利便ヲ有ス且ツ時トシテハ民間ノ不景氣困難ナ
ニ際シ其^力アルガ爲メ政府ノ財政上ニ幾分ノ不利ヲ生スト雖^レ亦
政府ノ財政ヲシテ人民ノ生計ト更ニ平均ヲ保タシムルカ如キ作用ア

間税ハ精密ニ被稅者ノ財力ニ比例セ

ラシムルモノナルカ故ニ特ニ此點ニ關スル間税ノ利益ハ實ニ照乎ト
シテ爭フベカラサルモノトス

第百廿七節 間税ノ不便第一間税ハ精密ニ被稅者ノ財

力ニ比例セズ 余輩ハ假令實際ニ於テ至極公平ナル直税ヲ見出
ス^レ難シト雖^レ理論上其主義ニ於テ初ヨリ被稅者ノ財力ニ應ジテ
偏重徧輕ナカラント勉メタルモノナリト云ヘリ間税ハ此點ニ於テ
ハ則チ其主義ニ於テ理論上既ニ被稅者ノ財力ニ比例センコトヲ勉メ
タルモノニアラス故ニ公平ノ點ヨリ觀察シテ此一大不便アルヤ明カ
ナリ抑々間税ニハ消費税行爲税即チ消費税ハ必需品ノ消費税奢侈品
ノ消費税及ヒ關稅等行爲税ハ専ラ財産ノ移轉税印紙税登記料等ヲ含
有ス^レノ二種アリ其必需品物ニ課シタル消費税ニアリテハ殆ント平等
ニシテ分頭税ト略ホ其性質ヲ同フスルモノニシテ貧富ノ差ニ依リテ

間税ニハ消費税アリ

毫モ税額ニ差異ナキモノトス然レハ彼驕奢品ニ課シタル消費税ノ如キハ例ヘハ車馬、僕婢等ニ課スルモノニシテ其消費物品或ハ使用物ト稱スノ性質タル固ト永続スルモノナルカ故ニ此等ニ課スル驕奢税ハ其性質酷ク消費税ニ似タレハ之ヲ驕奢税若シクハ使用物税ト稱シテ直税中ニ區分ス故ニ消費税ニアリテハ概テ其納税者ノ納ムル所ノ税額納税者ノ生計ノ度等ニ精密ニ比例スルモノニアラス然レハ他ノ一種ノ租税即チ印紙税、登記料等ハ納税者ノ財産ノ高ニ比例セスト雖レ然レハ以上ニ於ケル租税ノ性質ハ大ニ手数料ニ類似スルカ故ニ納税者ノ財力ニハ比例セザルモ政府ガ納税者ニ對シテ盡ス所ノ勤勞行爲ノ多寡ニ比例スルモノニシテ亦敢テ不公平ナル租税ト云フニ能ハザルナリ只必要品ニ課スル所ノ消費税ニ至リテハ例ヘハ葡萄酒、菓子、茶、砂糖、醬油、鹽等ノ消費税ノ如キ富民ハ幾分カ品質ノ善良ナルモノヲ消

費シ貧民ハ劣等ナルモノヲ消費スルノ區別アリト雖レ其分量ノ如キハ元ト貧富間ノ消費ニ甚シキ差異アルモノニアラス故ニ鹽税、醬油税、飲料税等ノ如キモ亦分頭税ノ性質ヲ帶アルモノナリト云フニ至リテハ吾人敢テ之ヲ争フニ能ハザルナリ然レハ消費税ニハ亦此分頭税ノ性質アルカ故ニ若シ之ヲ徧視スルトキハ貧富等ク之カ抑制ヲ受ケルカ如キ不公平ナル租税ニ似タレハ又此性質アルガ爲メニ複税制ニ於テ直税及ヒ間税ヲ並課スルニ當リ實ニ謬カラザルノ利便ヲ有スルモノナリ何トナレハ直税ハ概テ中民以上ニ課セラル、モノニシテ即チ國民ノ一部分ニ徧重ナルモノナルカ故ニ一方ニ於テ間税ヲ以テ國民全体ニ賦課スルコトヲ得バ即チ直税ノ一部部ニ徧重ナルヲ補償スルコトヲ得ベケレハナリ而シテ其効用ヲ彰ハスハ獨リ此間税ノ作用ニアリトス

間税ハ直
税ニ比シ
テ經濟上
其及ホス
所ノ損害
甚タシ

生産營業
等ノ上ニ
加フル障
害

マク
ク氏
税ハ生
ノ方法
ヲ

改良セシ
ムルノ効
アリト云
フハ非ナ
リ

間税ハ人
爲テ以テ
強イテ工
業商業ノ
位置ヲ配
賦シ自由
交通ノ便
ヲ妨害ス

第百廿八節 間税ノ不便第二間税ハ直税ニ比シテ經濟上其及ホス所ノ損害多シ

其一 營業ヲ束縛シ其進歩發達ヲ抑制スルニアリ抑モ間税ニ在リテハ營業者ヲ監督シ生産物ノ價格分量等ヲ常ニ検査セザルベカラザルモノナレバ亦常ニ營業ノ自由ヲ束縛シ且ツ一定ノ規律ヲ以テ検査ニ服從セシメ或ハ營業ノ方法ニ依テ廣大ナル場所ヲ要セシメ或ハ生産者ヲシテ數多ノ人夫ヲ使用セシメ或ハ斬新ナル生産ノ方法ヲ用ルルコトヲ妨グル等凡ソ營業上富ノ生産ノ上ニ少カラザル損害ヲ加フルモノナリ英國ノマククラック氏ハ消費稅ヲ課スルノ利益ハ生産方法ノ進歩ヲ獎勵スルモノナリト云ヘリ蓋シ氏ハ英國ノ蒸酒稅ノ結果ヲ見テ斯ノ如キ言ヲ爲セシモノナルベシ曾テ英國ニ於テ蒸酒稅ヲ課シ蒸酒ノ蒸溜法ニ非常ノ改良ヲ來シタル事實アリキ氏ハ此特別ノ實例ヲ

採リテ廣ク一般ノ規則ト爲シ更ニ間税ノ利益ヲ説クモノナリ然レモ英國蒸酒稅ノ例ハ以テ一般ニ適用スルコトヲ得ズ抑々英國ニ於テ蒸酒ニ租稅ヲ課セルヤ其賦課法ヲシテ蒸餾釜ノ容量ニ比例セシメタルガ故ニ遂ニ蒸餾家ノ努力ヲ勵マシ漸次器械ノ改良ヲ見ルニ至リタルモノトス租稅ハ時トシテ斯ノ如ク營業ノ方法ニ改良進歩ヲ來スコトアリト雖モ斯ル例ハ之ヲ間税ニ依リテ一般ニ生スル利益ナリト稱スルコト能ハズ實ニ間税ノ直税ニ比シテ其生産營業ノ自由ヲ妨害スルヤ蓋シ顯然掩フベカラザルノ事實トス
其二 間税ハ人爲ヲ以テ強イテ商業工業ノ位地ヲ配賦スルノ傾向アリ租稅ナキ時ハ商業工業ノ位地自然ニ定マルモノナレモ間税アルトキハ強イテ商業工業ノ中心ト爲ルベキ市街ヲ配賦スルノ傾キアリグリフレスリー氏曾テ此事ヲ論シタリキ凡ソ間税中殊ニ關稅ヲ課スル

ニ當リ諸方ヨリ物品ノ輸入ヲ許ルスニ際シテハ密輸入ヲ防セギ輸入
 税ヲ徵課スルニ脱漏ナカランコトヲ欲スルガ爲メ殊ニ二三ノ港灣ヲ
 限リテ輸出入ヲ免許シ此處ニ税關ヲ置テ輸出入物品ノ検査ヲ爲サ
 ルベカラズ故ニ斯ノ如ク關稅ノ徵收ヲ爲ストキハ全國ノ港中二三ノ
 海港ヲ撰定スルガ故ニ從テ他ニ數百ノ小灣小港ノ貿易ニ適スル者
 リト雖モ復タ輸出入ノ自由ナク特ニ税關ノ設ケラレタル場所ニ限リ
 テ獨リ其輸出入貨物輻輳ノ中心トナリ乃チ商業家工業家爭フテ磨玉
 シ從テ倉庫高樓犬牙相接スルカ故全國ノ繁榮ハ竟ニ此二三港灣ノ占
 有ニ歸スヘシ是レ關稅ヲ課シ税關ヲ設ケルノ結果ニシテ工業商業ノ
 中心タルヘキ地位自然ニ發達セス專テ人爲ヲ以テ強イテ或ル一方ニ
 配賦セシムルガ如キハ即チ間稅カ經濟ニ於ケル自然ノ進行ヲ妨害ス
 ルモノニアラズンテ何アヤ且ツ間稅ハ斯ノ如ク貨物循環ノ途中ニ於

間稅ニ於
 テハ徵稅
 ノ爲メニ
 多數ノ吏
 員ヲ要ス

テ課稅スルモノアルガ故ニ例ハ關稅入市稅ノ如シ實ニ自由交通ノ
 便ヲ妨害スル下妙少ナラサルナリト
 其三 間稅ニ於テハ徵收ノ爲メニ幾多ノ人員ヲ不生産的ノ事業ニ從
 事セシム關稅及ヒ消費稅等ノ賦課徵收ハ更ニ監査ト煩雜ナル手續キ
 トヲ要スルカ故ニ數多ノ検査官吏收稅官吏ヲ要スルヤ亦タ明ラカナ
 リ例ハ彼稅關ニ於テ輸出入ノ物品ヲ監査シ輸出入物品ノ價格ヲ評
 定シ或ハ消費稅ニ於テハ殊ニ營業者ニ就テ一々生産物ノ分量性質等
 チ検査スル爲メニ數多ノ官吏ヲ要スルカ如キ即チ是レナリ故ニ實際
 ニ於テ間稅ハ徵收上直稅ニ比シテ更ニ多數ノ官吏ヲ要スルヤ必セリ
 ホリユ一氏曰ク佛國ニ於テ登記料官有物及ビ印紙稅ノ爲メニ使役セ
 ラル吏員ノ數ハ四二六七人間稅ノ爲メニ使役セラル者一、一四六五人
 稅關ニ使役セラル者二、二九二九人ナリト故ニ佛國ニ於テ間稅ノ事ニ

佛國直稅
吏員及問
稅吏員ノ
數

從事スルモノハ上下人員合セテ三八〇〇〇人ニ達ス實ニ此等ノ人ハ皆巨額ナル俸給ヲ消費スルモノニシテ且ツ一方ニ於テハ壯年有爲ノ人ニシテ生産事業ニ從事シ得ベキ人々ナレバ此等ノ多數ノ人員カ收稅ノ如キ不生産的ノ事業ニ從事シテ經濟上富ノ生産ニ從事セザルハ國家ノ爲メ太甚シキ不利ト云フベシ之ニ反シテ直稅ノ吏員ニ至リテハ極ノテ僅少ニシテ唯局長檢察官一等書記賦稅吏ノ數一一六二人ナルヲ見ルノミ其他一般ノ收納官八五人特別收納官二七五人收稅吏及ビ上局ノ屬吏數百人アリテ其精密ナル人數ハ之ヲ知ルニ由ナシト雖凡直稅ニ關スル吏員ノ數ヲ概算スレバ無慮六七千人ニ下ラザルベシ此事實ニ徴スルモ直稅吏員ノ數ハ間稅吏員ノ數ニ比シテ甚ダ少數ナルヲ見ルニ足ルベシ

第百廿九節 間稅ノ不便第三、間稅ノ收入額ハ常ニ正

間稅ノ收
入額ハ直

稅ノ如ク
固定不動
ナラス

確ナラズ且ツ臨時緊急ノ場合ニ當リテ稅率ノ増加ニ相當シタル收入ヲ得ルヲ難キ事 此點ニ關シテハ既ニ前節ニ說キシカ如ク直稅ノ收入ハ固定不動ニシテ間稅ノ收入ハ之ニ及バズ併シナガラ間稅ノ收入額ノ正確ナラザルコトハ豫算調製ノ際ニ於テ十分注意スルキハ敢テ恐ル、ニ足ラズト余輩カ既ニ明言セシ所ナリ且ツ此收入ノ不確定ナルガ故ニ其裏面ニ存在スル所ノ利益ハ即チ前ニ舉ゲタルガ多ク收入ニ自然ノ增加力アル所以ニシテ蓋シ利害相半スルモノト云フベシ

第百三十節 間稅ノ不便第四、間稅ハ直稅ニ比シテ多クノ徵稅費ヲ要ス 間稅ノ大部分ヲ占ムル所ノ關稅消費稅ニ於テハ前既ニ陳ヘシ如ク調査檢査評價等ノ爲メニ數多ノ役人ヲ要シ且ツ取締監督等實ニ繁雜ヲ極ムルガ故ニ從テ巨額ノ徵收費ヲ要スル

間稅ニハ
徵稅費ノ
多額ヲ要
ス

ヤ亦明カナリ例へバ前ニ舉ゲシ如ク關稅ヲ徵收スルニ當リテ特ニ稅關ヲ設ケ從テ國境ノ監督輸出入物品ノ取締ヲ嚴ニセサルベカラザルガ故ニ許多ノ官吏ヲ要シ又其拂フ所ノ俸給ノ如キモ實ニ少小ナラサルヲ見ルニ足ラン勿論英國ノ如キ孤島ニアリテハ之ヲ佛蘭西ノ如キ陸地ノ國境ヲ有スル國ニ比スレハ其輸出入ヲ防ギ稅關ヲ設ケテ監督ヲ嚴ニスルノ上ニ於テ幾分カ官吏ノ數ヲ減省スルヲ得ルカ故ニ徵收費モ隨テ減少スルコトヲ得ベケレバ其大体ニ至リテハ間稅ノ徵稅費ハ直稅ヨリ多キトハ實ニ爭フヘカラザルモノトス又消費稅ノ徵收費ハ物品ノ製造家販賣人等ノ一地方ニ徧集シタル所ト數多ノ小製造家販賣人ガ處々ニ散在スル所トハ間稅ノ徵收費ニ於テ幾分ノ相異ヲ生ズベシト雖モ猶ホ斯ル國(英國ノ如キ)ニ於テモ間稅ノ徵收費ハ往々直稅ノ徵收費ニ超ユルモノトス英國ノ例ニ依レハ一八六八年度ニ於

間稅及直稅ノ徵收費ノ比較
英國

テ關稅ノ徵收費ハ其關稅ノ總收入高ニ比シテ四分四三ニ當リ又一八七三年度ニ於テハ其徵收費收入ニ比シテ四分九五ニ當リ又英國内地間稅ノ徵收費ハ郵便稅ヲ除キ三分八乃至四分ニ當ルト云フ斯クノ如ク英國ハ其地勢等ニ於テ種々ノ便利アルカ爲ノニ關稅ノ徵收費極メテ少々ナリ然レバ之ヲ直稅ノ徵收費ニ比スルニ(直稅ニ於テモ又精密ナル計算ヲ知ルコト能ハズト雖略直稅ノ徵收費ハ其徵入高ノ三分位ニ相當スルモノト推測スルヲ得ベシ)稍多キヲ見ルニ足ルヘシ然ラバ英國ノ如キ利便多キ國ニ於テモ尙ホ幾分カ間稅ノ徵收費ハ直稅ノ徵收費ニ比シテ大ナルヤ看ルヘキナリ又佛蘭西ノ有様ニ就テ見ルニ直稅ノ徵收費ハ三分二一間稅ノ徵收費ハ一八七五年ノ豫算ニ於テ三分七其決算ニ於テ三分四ニ當ル故ニ此二者ノ徵收費ノ費額ヲ見ル時ハ甚シキ懸隔ナシト雖モ關稅ノ徵收費ニ至リテハ一割三分二ニシテ之

佛蘭西

ナ内地間税ニ合シテ更ニ其平均ヲ見ルトキハ五分ニ當ル故ニ直税ニ比シテ間税ハ一般ニ徴收費ノ多キヲ見ルニ足ルベシト、パリエー氏ハ曰ク近來行政機關ノ改良アリタルガ爲ノニ徴收費ハ割合ニ大ニ減少シタレ、一八二八年ニ於テハ佛蘭西直税ノ徴收費ハ其收入ニ對シテ殆ンド五分ト千分ノ一ニ當レリト又同時代ニ於テ關稅及鹽稅ノ徴收費用ハ一割六分ト六分ノ一飲料稅及ビ雜稅ニ於テハ一割五分ト百分ノ二ニ當レリ、町村入市稅ノ徴收費ハ平均一割數多ノ地方ニ於テハ二割乃至三割ニ上ルモノアリト云ヘリ

第百三十一節 間税不便ノ第五、間税ハ之ヲ重課スル

トキハ屢國民ノ道德ヲ損傷スルノ原因ト爲ル事

間税ニ於テハ往々人民ノ奸詐隱蔽妄誓ヲ獎勵シ易ク國民ノ道德ヲ汚損スルコト少カラズ假令ハ貨物ヲ偽造シ國民ノ衛生上ニ害ヲ及ボ

間税ハ國
民ノ道德
ヲ汚損ス
ルノ原因
タリ

直税及間
税ハ之ヲ
併課スル
ニ利アリ

シ或ハ逋稅ヲ企テ密輸出入密賣買ヲ爲スガ如キ凡ベテ營業ヲ束縛シ重稅ヲ課スルニ原因スルモノニシテ其害ヤ洵ニ大ナリ然レモ租稅ノ人民ノ道德ヲ汚損スルノ弊害アルハ獨リ間税ノミニ限ラズ直税ニ於テモ其稅率非常ニ重ケレハ又隨テ隱蔽奸詐妄誓等ノ弊害ヲ醸成スルコト少シトセズ即チ所得稅ニ於テ詐偽ノ申告隱蔽生シ易キガ如キ是レナリ然レモ此弊タルヤ間税ニ於テ殊ニ甚シキモノトス
以上五箇ノ不便ハ間税ノ短所ト稱スヘキモノナリ然レモ間税及ビ直税ニハ實際各一利一害一得一失アルモノナルカ故ニ吾人ハ其一ヲ撰ンデ他ヲ全廢スルヲ得ス乃チ之ヲ並課スルニ於テ始メテ租稅全体ニ於テ公正且ツ平均ヲ保チ政府ノ財政ニモ亦少カラザル利益ヲ與フルヲ得ベキナリ是レ複稅制ノ利ニシテ又直税及ビ間税ヲ並課スルノ利ナリ吾人ハ決シテ一方ノ利一方ノ害ノミヲ偏視スベキニアラス宜

シク公平不偏ノ眼ヲ以テ其利害得失ヲ洞察スヘキナリ

財政學

第二部門 國家收入論

第一篇 國家ノ公權ヨリ生スル諸收入論

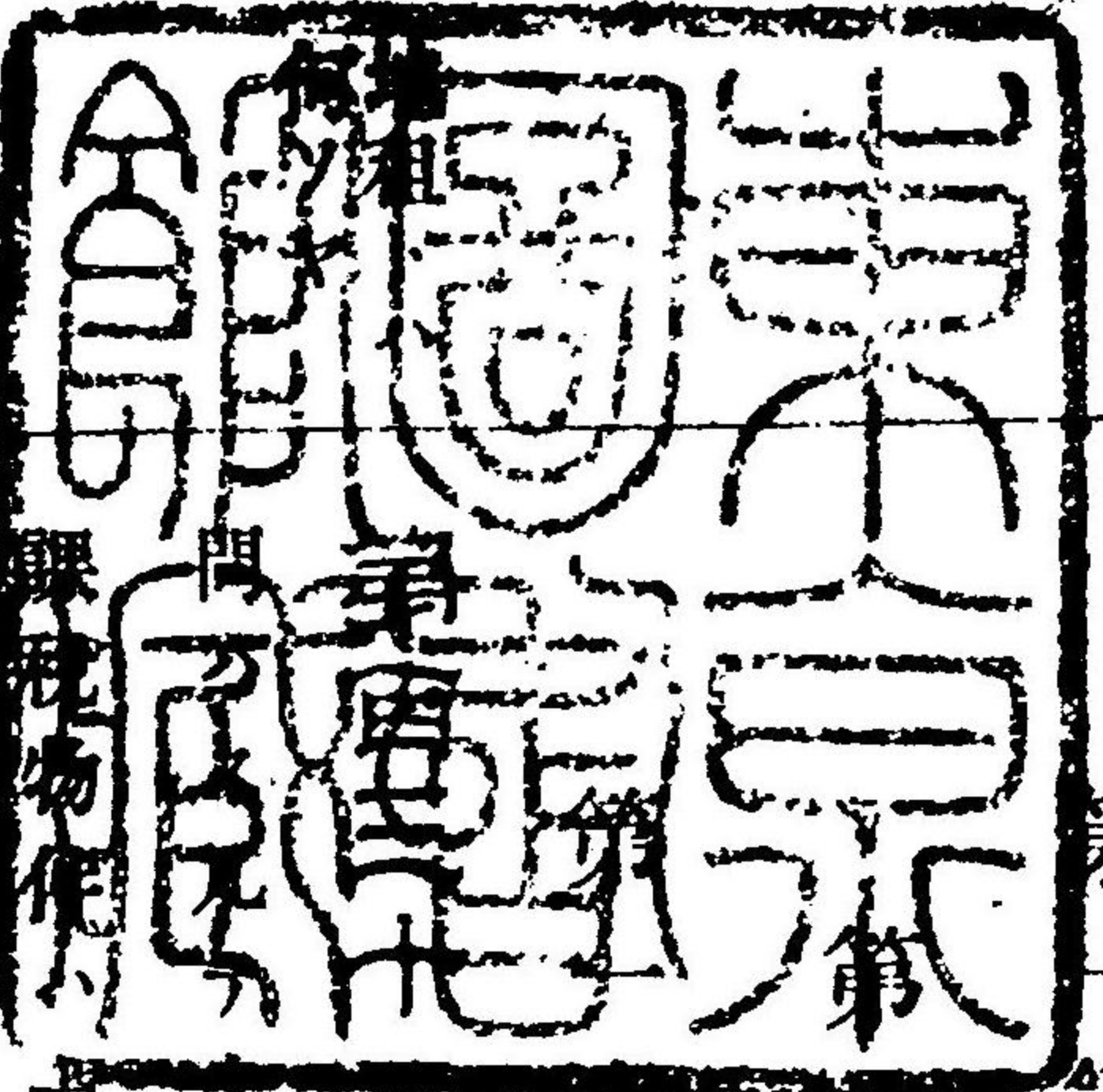
第一部 租稅論(乙)租稅各論

第一章 地租

一節 地租ノ性質 地租トハ其賦課徵收方法ノ如何ヲ

土地ヲ課稅ノ目的トシタル租稅ヲ云フ即チ地租ニ於ケル
課稅物作ハ土地ト云ヘル不動產是レナリ左レハ地租ハ財產稅中不動

產稅ノ首坐ヲ占ムルモノニシテ現今ニ於テハ概チ地租ハ各種耕作地
ノ全収獲高若クハ純収獲高ニ課シ或ハ全収獲若クハ純収獲ヲ基礎ト



シテ計算セル地價ニ課スルヲ以テ常ト爲セ元來土地ノ總收穫即チ農産物ノ性質中ニハ左ノ數件ヲ含有スルモノナルカ故ニ先ツ之ヲ區別セサルヘカラス

土地收穫ノ元素

第一、地代爰ニ地代ト云ヘルハ經濟學上所謂地代(或ハ借地料或ハ小作料)ト稱スルモノ、意義ヲ含メルモノニシテ即チ土地ノ自然ノ生産力ヨリ生スル所ノモノ是レナリ故ニ此ノ地代ノ多寡ハ土地ニ於ケル生産力ノ優劣及ヒ自然ニ於ケル品位ノ差違等ニ據リテ等差アルモノトス

第二、土地ニ投シタル資本ニ對スル收穫即チ

甲、各種ノ改良ヲ施サンカ爲メ永遠ノ目的ヲ以テ土地ニ投シタル資本ニ對スル收穫(土地ノ永久ノ改良ニ對スルモノヲ謂フ)

乙、耕作ニ使用スル所ノ活動資本即チ土地ト分離シ得ヘキ資本例

〜ハ耕作ノ機械、牛馬、農具、肥料等ニ對スル收穫

第三、耕作勞力即チ小作人其他諸種ノ雇人ノ勞力ニ對スル收穫

以上ノ諸元素中地代並ニ第二ノ甲、即チ土地永久ノ改良ノ爲メニ費シタル資本ニ對スル收穫ハ所謂地主即チ土地所有主ノ所得ニ歸スルモノニシテ土地ノ耕作ニ使用シタル活動資本ニ對スル收穫ト耕作ノ勞力ニ對スル收穫トヲ合算シ右額ヨリ其耕作ニ使用シタル勞力者即チ小作人其他雇人ノ賃銀ヲ引去リシモノ是レ即チ企業ニ對スル收穫ニシテ又之ヲ農業ノ利得ト稱シ企業主ニ屬スルモノトス(勿論此レハ學理上ヨリ地主ト企業主即チ借地人ト力役者ト三者全ク別人ニテ農業ノ行ハル、場合ヲ指稱スルモノナリ)

現今ノ地租法ニテハ概チ土地臺帳ヲ基礎トシテ課税スルカ故ニ地租ハ單ニ地主ノ所得ニノミ課シ乃チ地主ヲ以テ納税者トハナスナリ而

地租ハ地主ノ所得ニ課スルモノナリ

シテ農業耕作ノ利得即チ農業企業主(借地人)ノ所得ニハ地租ノ名目ヲ以テ課スルモノ絶エテ之レナク又國ニ依リテハ一切之ニ直税ヲ賦課セサルモノトセリ但シ國柄ニ依リテハ英國ニ於ケルカ如ク一般所得税ノ名目ヲ以テ往々人税ヲ賦課スルモノ亦之レ無キニアラス

土地ハ被
税物トナ
スニ適ス

第百二十三節

土地ハ被税物ニ適スル

地租ハ古來ヨリ

萬國共ニ行フ所ノ者ニソ實ニ諸税中ニ在リテ最モ廣ク一般ニ行ハレ且ツ最モ舊置ノモノトス抑モ我邦ニ於テハ古來ヨリ豐蘆原ノ瑞穂國ト稱シ即チ農業ハ國本ノ憑リテ以テ立チ民命ノ因リテ以テ繫ル所ナルカ故ニ舊來ノ租税中ニ於テ稍見ルニ足ルヘキモノハ獨リ此地税ノ一科目ナリトス左レハ地租ハ我邦ニ於テ最モ廣ク行ハレタル租税ニシテ尙ホ現今ニ迄ルモ其租税中ニ在リテ獨リ首坐ヲ占ムル深ク怪ムニ足ラサルナリ而シテ何故ニ然ルヤト云ハンニ蓋シ土地ハ實ニ被税

其理由第
一、土地第
一、財產ノ
性質

物タルニ適セルカ故ナリ請フ左ニ三個ノ理由ヲ開陳セン

第一、土地ハ財產ノ最モ確實ナルモノニシテ且ツ少カラサル収入ヲ生スルカ故ナリ抑、往古ニ在リテハ社會ノ秩序未タ今日ノ如ク整頓發達セズ財產ノ種類モ亦今日ノ如ク多カラス故ニ其所有權ノ如キモ未タ確實安固ノ場合ニ至ラザリキ然ルニ其頃ニ在リテ稍、財產ノ本體ヲ具ヘタル者ハ只僅ニ土地ノミノ有様ニシテ且ツヤ當時未タ資本ヲ貸與シテ利息ヲ収ムルカ如キ風、社會ニ發達セス被雇、勞力等未タ洽テ行ハレザリシカハ、土地ヲ以テ唯一ナル生産ノ本源ナリト考ヘシハ亦強チ理由ナキニアラス即チ重農派ノ人々カ農業ハ唯一ノ生産業ニシテ土地ハ唯一ノ富源ナリト思考シタリシ事モ亦當時ニアツテハ洵ニ至當ノ思想ト謂フヘシ斯ノ如ク土地ハ古來ヨリ早ク既ニ財產ノ本體ヲ具ヘ且ツ富ヲ生スルノ本源タリシカ故ニ其ノ早クヨリ課税ノ目的物トナリ

シテ復タ怪ムニ足ラサルナリ且夫レ現今ニ於テ土地ハ各種ノ財産中
最モ確實ナルモノニシテ又富民カ依リテ以テ収入ヲ得ルノ一大財源
タレハ土地所有者ハ自ラ他ノ人々ニ比シテ社會ニ非常ノ勢力ヲ有ス
ルノ狀アリ是レ乃チ現今ニ在リテモ土地ハ課稅物件ト爲スニ最モ適
セル所以ノ一ナリ

第二、土地ノ所有ハ一種特別ノ性質アルカ故ナリ元來土地ハ天然物ナ
ルカ故ニ現今ハ姑ラク措キ逸タル往古ニ在リテハ人民ハ專ラ之ヲ共
有共用ノ其自然ノ生産力ニ依リテ天然ノ恩賜ヲ享受シ各自偏頗ナク
共同シテ其利ニ浴セシテ猶ホ吾人カ今日一同雨露ノ惠ニ均霑スルカ
如キ有様ニテアリケンコソ至當ナレ又往古ニ於テハ實際斯クナクテ
ハナラヌナリ故ニ土地所有ノ制ノ如キハ財産私有中決シテ最古ノモ
ノニアラスデ、ラヴェレ、氏等ノ諸經濟家ハ其起原ヲ探究シテ以爲テ

第二、土地
所有ノ一
種特別
ナル

ク土地カ純然タル私有財産トナリシハ固ト太古ノ遺制ニアラス之ヲ
夫ノ家蓄ノ所有、營業用器具ノ所有、家屋若クハ什器ノ所有ニ比スルニ
遙カニ後世ノ制ナリト然ラハ今日ノ地主ト云ヘル者ハ之ヲ嚴酷ニ評
スレハ社會ノ共有物タリシモノヲ更ニ私有シタルモノナリ之ヲ換言
スレハ土地ノ所有ニハ一種特別ノ性質アリテ地主ハ勞力ノ報酬並ニ
其祖先若クハ自身カ費ヤシタル資本ノ報酬ノ外天然生産力ノ補助ニ
據リテ經濟學者カ所謂地代、即チ往時ノ重農派人士カ純收入ト名ケタ
ル曖昧ナル語ヲ以テ殊別セシ恩惠ヲ享受スル者ニシテ此事ヤ亦以テ
眞理ト爲スニ足ル去レハ地主ハ此殊遇ニ對シテ幾分カ社會ニ向ツテ
報償セサルヲ得ス否社會ニ對シテ共有物ノ借料ヲ拂フノ義務ヲ有ス
ルモノト云ハサルヲ得サルナリ實ニヤ國內ニ土地餘リアリテ未タ盡
ク各人ノ私有ニ歸セサル時ハ政府モ亦敢テ意ヲ此ニ留メスト雖モ若

土地ノ共有
社會ニ向
物ナリ故
ニ地主ハ
社會ニ借
テ借地料
テ拂ハサ
ルヘカラ

夫レ全國ノ土地盡ク各人一個ノ所有ニ歸シ復タ寸壤ヲモ餘サ、ルノ時ニ至テハ勢政府カ眼ヲ此ニ注クハ理ノ當然ニシテ恰モ是レ徃古封建時代ニ於テ領分ト云ヘルト領分内ノ土地ハ盡ク領主國主ノ所有ニ屬スルモノナリト云ヘル觀念ト當ニ離ルヘカラサルモノナリシカ如シ故ニ當時土地ヨリ貢物ヲ徵スルハ寧ロ租稅ト云ハンヨリハ借地人ナル百姓ヨリ領主ナル地主ニ拂フトコロノ地代ナリト解スル方却テ妥當ナルカ如シコレ他ナシ國家ト國土トハ恆ニ離隔シ難キ關係ヲ有スルモノナレハナリ(我邦一派ノ論者カ外人ノ土地私有ヲ嫌惡スル蓋シ故ナキニ非ス)我邦ニ於テモ土地私有權ノ確定シタルトハ實ニ近來ノ事ニシテ蓋シ維新後土地賣買ノ禁ヲ解キ更ニ地券ヲ發シテ所有者ニ交付シタル時ヲ以テ法律上確認セラレタルノ濫觴トス而シテ土地私有制ノ斯ノ如ク一種特別ノ性質ヲ有スルト是レ則チ土地ノ課稅物ト

土地自然
力ノ生
ト資本ヨ
リ生スル
分利トナ
ルノ困難
ナ

シテ最モ適セル所以ナリ然リト雖モ現今ノ地主ヲシテ其他代ノ全額ヲ盡ク政府ニ納メシムルモ可ナリトスルカ如キ極端說ハ決シテ贊襄スヘキモノニ非ス何ントナレハ既ニ前陳シタル如ク現今ノ地主ハ多クハ當初土地ヲ以テ利益ヲ生スヘキ一種ノ資本ナリト思惟シ而シテ其代價ヲ拂ヒテ買得シタル者ナルベケレハナリ殊ニ又現今ノ土地ハ其天然ノ儘ナルハ極メテ罕レニシテ皆種々ナル永久ノ改良ヲ施セシ者ニアラサルハ莫キナリ夫故ニ現今ノ地代中ヨリ其土地ニ係ル純粹ノ生産力ヨリ生スル収入ト土地ニ係ル永久ノ改良即チ固定資本ヨリ生スル利子トチ分離スルト極メテ困難ナルベケレハナリ
余輩ハ決シテ茲ニ土地私有制ノ起因ヲ論シ若クハ土地私有制ヲ非難スルモノニアラス又地主ハ社會ノ共有物ヲ專有シタルモノナリト云ヘハ恰モ地主ヲ攻撃スル社會黨論ノ如クナレハ決シテ否ラス若シ夫

土地私有制ノ利アリ

レ土地私有制アテサレハ如何ニシテ土地ノ耕植ヲ獎勵シ如何ニシテ農業ノ効驗ヲ最高度ニ達セシメ如何ニシテ社會ノ穀類菜果獸蓄ノ生産ヲ旺盛ナラシメ將タ瘠確ノ地ヲ變シテ美田トシ土砂ヲ變シテ黄金ト爲サシムヘカリシヤ是等ノ功ハ固ヨリ祖先以來地主ノ丹精ニ歸セサルヘカラサルモノナリ余輩ハ唯爰ニ土地カ被稅物ニ適スル所以ノ理ヲ述フルニ止ルナミ

第三、土地ハ社會ノ繁榮ナルカ爲メニ利益ヲ享クルト多クシ

第三、土地ハ社會ノ靜謐ナルトト國家ノ起ス公益事業ニ依リテ其利ヲ享クルト多キカ故ナリ抑、土地ハ前陳シタル如ク社會カ憑リテ以テ食物ノ供給ヲ仰ク所ノ本源ニシテ又其面積地方ニ限リアルカ故ニ社會ニ依リテ以テ自然ニ地價ノ騰貴地代ノ増加ヲ見ルモノナリ是故ニ土地所有者ハ他ノ財產所有者ニ比スレハ社會益靜謐ニシテ繁榮ニ赴キ

地租徵課方法

政府公益事業ヲ起スト愈頻繁ナルニ隨ヒ間接ニ直接ニ其利ヲ享クルト益大ナルモノナリ是レ則チ地代ニ租稅ヲ課スルヲ以テ適當ナリトスル第三ノ理由ナリトス

第二百二十四節 地租徵課方法ノ沿革 凡ソ文明ノ進歩開化發

達ノ順序ハ簡ヨリ繁ニ移リ疎ヨリ密ニ入ルヲ以テ常ト爲スカ故ニ地租徵課法ノ如キモ現今ノ地位ニ達ルマテハ必ラスヤ幾多ノ變遷ヲ經過シ來タラサルヘカラス是レ現今ニ在リテモ尙ホ處ニ依リ其徵課法ヲ異ニセル所以ナリ今種々ノ方法ヲ觀察スルニ左ノ如シ

土地ノ廣狹ニ比例セシムル法

第一、單ニ土地ノ廣狹ニ比例シテ課稅スルノ法、此方法タルヤ單ニ土地ノ面積ヲ丈量スルニ止マリテ別ニ煩雜ナル手續キヲ爲スヲ要セス而シテ土地ノ品位耕耘ノ方法總収穫高ノ多少等ニハ更ニ關スルトナク只一段歩若クハ一町歩ニ付キ若干額ト云ヘル同率ノ租稅ヲ課スルモノ

ナリ故第一此方法ノ利便トスル所ハ簡易ナルニ在リ蓋シ此制ハ方
 今殖民地ノ如キ人口未タ稠密ナラス土地ノ開墾未タ全部ニ浴キカラ
 サル新國ニハ最モ簡便ニシテ而モ甚タシキ不公平不利ヲ見サル善良
 ノ方法トス抑モ社會ノ新ニ開始スル時ニ方リ其最初開クル土地ハ必
 ラスヤ最良ノ土地ニシテ良シ其地味地質最善ナラストスルモ交通運
 輸ノ便若クハ耕植ノ利最大ナラサルヘカテサルカ故ニ新立ノ社會ニ
 在リテ一般同率ノ租稅ヲ各種ノ土地ニ課スルモ其間敢テ太甚シキ不
 公平ヲ生シ若クハ不便ヲ招クノ虞ヒナキモノナリ然リト雖モ此方法
 ヲ以テ全國ノ土地既ニ各個人ノ私有ニ歸シ農業ノ進歩已ニ高度ニ達
 シ而シテ地主ハ土地ヲ改良スルカ爲メ少カラサル資本ヲ下サ、ルヘカ
 ラサル舊國ニ施スルハ決シテ適當ノ方法トハ謂フヘカラス何ントナレ
 ハ舊國ニ在リテハ土地ニ數等ノ優劣段階アルハ勿論其土地ニ於ケル

前法ノ不便

土地ノ分
 級ナシ
 面積ノ
 別ナシ
 租稅ノ
 不均

収獲高ハ各所一様ナラス又假令土地ノ品位較同一ナルモ農業耕作ノ
 方法ニ數種ノ等差アリテ耕植ノ種類亦許多ナルカ故ニ必ラスシモ収
 獲高均一ナリトスルヘ能ハサレハナリ是故ニ舊國ニ在リテ前上ノ如
 ク單ニ土地ノ面積廣狹ニ比例シテ同率同額ノ租稅ヲ課スルハ實ニ不
 公平ノ太甚シキモノト云ハサルヘカラス且ツヤ現今ノ社會ニ於テ此
 方法ヲ採用セントセハ勢最惡地収獲ノ負擔ニ堪ヘ得ル高ヲ以テ之カ
 限度トセサルヘカラス去レハ全體ノ収獲ニ對シテハ非常ノ輕稅ニシ
 テ其收入亦極メテ少カルヘキナリ是レ豈ニ現今開明社會ノ巨大ナル
 經費ヲ供給スルノ稅法ト爲スニ足ランヤ此方法ノ不便不利不公平ナ
 ルヲ以テ知ルヘキナリ

第二、土地ノ等級ヲ分テ其善惡ヲ區別シ而シテ其面積ニ比例シテ課稅
 スルノ法、此方法ト雖モ課稅ノ根據ハ前ト同一ニシテ毫モ異ナルヲナ

テレハ只土地ノ階級ヲ分チテ同級ナレハ同率ノ稅ヲ課シ其級ヲ異ム
スレハ稅率ヲ異ニスル一之ヲ前ノ土地ノ上下ノ別ナク同一ノ稅ヲ課
スルモノニ比スレハ較一步ヲ進メタルモノト謂フヘシ然レハ又到底
不正確ニシテ今日ニ採用スヘカラサルハ論ナキナリ

農業用未
穀ノ數等
ニ比例セ
シムル法

第三、農業ニ使用スル未穀ノ數若クハ家畜ノ數或ハ菓樹ノ個數等ニ比
例シテ地稅ヲ課スルノ法此ハ使用道具等ノ多寡ヨリ其収獲ノ大小ヲ
推測スル一種ノ推定法ナリ此方法タルヤ若シ未開舊慣ニ固着スル國
ニ各地方共ニ殆ント同一様ノ勞働ヲナシ又同數ノ未穀ヲ以テ殆ン
ト同一ノ収獲ヲ得家畜モ亦各地共ニ殆ント同一ニシテ其價格モ大同
小異ナル場合ニ於テハ固ヨリ一種ノ便法ナルヘケレハ現今ノ如ク耕
耘ノ方法一樣ナラス即チ牛耕アリ馬耕アリ或ハ器械耕アリテ漸次地
力改良ノ爲メ土地ニ資本ヲ費ス一日ヲ逐フテ盛ンナルニ及ンテハ到

土地ノ總
収獲高ニ
比例セシ
ムル法

底使用資本ノ數ヲ以テ収獲ノ大小ヲ示ス正確ノ外標トハ看做スト能
ハサルナリ故ニ此方法ハ唯耕耘ノ方法一樣ニシテ農業未熟ナル時ニ
ノミ行フヘキモノト謂フヘシ

第四、土地ノ總収獲高ニ比例シテ課稅スルノ法此方法ハ外見上簡單ニ
シテ且ツ宛モ公平ナルカ如クナレハ昔時開明諸國ニ於テ專ラ行ハレ
尙ホ現今ト雖モ費用スルノ國勢カラス現ニ我邦ニ於テハ地租改正以
前マテ行ハレ又歐洲ニ於テモ嘗テ廣ク行ハレタル方法ニシテ所謂十
一稅若クハ十一ノ法ト稱フルモノ即チ是レナリ蓋シ此方法タルヤ其
収獲ノ時ニ方リテ其生産收入高ヲ檢査シ而シテ之レカ總高ノ十分ノ
一ヲ徵スルモノトス抑十一ノ法ト云ヘハ其十分ノ一ヲ収ムルヲ以テ
本旨トスレバ茲ニハ必ラスシモ十分ノ一ヲ徵收スルトハ限ラス只該
法ノ要義トスル所ハ畢竟其總收高ノ若干分ヲ徵收スト云フニ在リテ

往々十分ノ一以上ヲ徵收スルコトアリ故ニ歐洲ノ十一法ト云ヒ我邦古
來ノ制即チ七公三民若クハ六公四民又ハ五公五民ノ制ト云フモ只其
稅率ニコソ輕重ノ差等ハアレ其賦課法ノ原理ニ至リテハ同一ニシテ
決シテ其間ニ差違アラサルナリ又昔時ニ在リテ此方法ヲ便トシ敢テ
其間ニ非常ノ不公平ヲ生セサリシ所以ハ蓋シ往時ハ貨幣ノ流通未タ
今日ノ如ク洽カラス多クハ物品經濟ヲ以テ便利ト爲シ、カ故ニ(例ハ
ハ我邦維新以前ニ於ケルカ如シ)其收穫セル貨物ノ現品ヲ以テ租稅ヲ
徵スルコト官民共ニ便利トシタレハナリ且ツ當時耕耘ノ方法未タ練熟
セス只專ラ土地自然ノ生産力ニノミ依賴シ即チ農民ノ如キモ未タ今
日ノ如ク盛ンニ其資本ヲ土地ニ注カサリシヲ以テ其總收穫高ト純収
獲高トノ如キモ其間ニ甚シキ差ヲ生セス從テ其總收穫高ニ比例セシ
租稅モ敢テ不公平ナラサリシナリ

然ルニ耕耘ノ業漸次進歩スルニ從テ農業モ亦巨大ノ資本ヲ要スルニ
至リ爲メニ純收入ノ總收入ニ對スル比例ハ益々減少スルモノナリ勿論
全體ヨリ云ヘハ土地ノ總收穫ハ農業ノ進歩ニ伴フテ増大スルニハ相
違ナキモ只割合ニ多ク資本ヲ要スルカ故ニ純收入ノ割合モ亦自ラ減ス
ルモノトス是レ他ナシ土地ニ収獲遞減法則ノ存スルカ故ニシテ少シ
ク經濟學ヲ修メタルモノハ直チニ領知スルヲ得ヘシ斯ノ如ク農業ニ資
本ヲ要スルコト益々大ナルニ從テ總收穫高ニ比例スルノ稅ハ則チ良田ニ輕
クシテ惡地ニ重ク勤勉ノ農業ノ方法並ニ土地ノ改良ヲ謀リ從テ其資
本ヲ多ク注入セシ者反テ重稅ヲ負ヒ其舊來ニ於ケル未熟ノ耕耘法ニ
依レル者ハ案外ニ輕課セラル、ノ道理トナル然レハ此方法ハ畢竟未ダ
不公平ヲ免レサルモノニ且ツ反テ耕耘者ノ未熟拙劣ヲ勸奨スルモ
ノ、如シ良シ仮令之ヲ勸奨セサルトスルモ其拂フヘキ租稅ノ一部ヲ

前法ノ不
便

免除スルカ故ニ却テ農業ノ進歩發達ヲ阻害スルモノト謂フヘキナリ
 (備考)愛ニ十一ノ法ヲ行フト雖モ是等ノ不便ヲ減スヘキ一法アリ即
 手耕植ノ品種ヲ分テ稅率ヲ異ニシ悉ク十分ノ一ヲ課セサルト是レ
 ナリ例ヘハ苧麻若クハ菜蘿蔔ノ耕植ハ麥ノ耕植ニ比較シテ巨費ヲ
 要スルモノトセハ其生産ニハ收入高ノ二十分ノ一ヲ課シ麥ノ生産
 ニハ十分ノ一ヲ課スルモ妨ケナシ近年墾地利ノ皇帝ジヨセフ第二
 世ハ殆ント之ニ類セル稅法ヲ布ケリ即チ帝ハ土地ノ總收入高ニ應
 シテ地租ヲ課シ生産品ノ性質ニ隨テ稅率ヲ異ニセリ此法ハ單純ナ
 ル十一ノ法ニ勝ルト雖モ未タ不完全ノ制タルヲ免レス何トナレハ
 同一貨物ト雖モ例ヘハ麥ノ如キハ之ニ用フル資本ハ其生産高ニ比
 例シテ非常ニ變動アルヲ免レサルモノナレハナリ
 上來陳述セル徵收法ハ斯ノ如ク不公平ナルカ上尙ホ且毎年總收獲高

弊檢見法ノ

ヲ調査セサルヘカラサルカ故ニ官民共ニ其煩累ヲ被ルト著ク且ツ少
 ナカラサル不便ト不利ヲ生スルモノナリ我邦舊來ノ制ハ毎年總收獲
 高ヲ檢査スルヲ檢見法ト云ヘリ此法ニ據ルモ或ハ檢見役人ノ寬嚴
 依リ賄賂ノ行ハルト否トノ差ノ如シ或ハ其正邪ニ依リ又ハ檢見ノ
 時間ニ依リ朝ト夕トノ差ノ如キ十分正確ナル結果ヲ得ス從テ租稅ノ
 公平ナルト能ハサルハ勿論民亦其苛政ニ堪ヘサルコトアリ良シ又一
 歩ヲ讓リテ此法左マテ不公平ナシトスルモ許多ノ吏員ヲ要シ隨テ徵
 收費用ノ嵩ムトアルハ世ノ識者ヲ埃タスシテ知ルヘキナリ又仮令數
 萬ノ吏員備夫ヲ置クモ尙ホ農民ノ損害ハ免ル、能ハス何トナレハ農
 作物收獲ノ季節ハ各地方共ニ同一時ナルカ故ニ例ヘハ方今土耳其ノ
 十一法ニ於ケル如ク多クハ收稅吏員ノ目前又ハ收稅吏員カ收納ノ部
 分ヲ定メシ後ニ非レハ收獲ヲ爲スト能ハスト規定セルヲ以テ農民ハ

往々己レノ欲スル好時節ニ於テ収獲ヲ爲スヲ妨ケラレ或ハ検査漏
延ノ爲メ新入延引シテ往々降雨ニ遇ヒ爲メニ収獲ノ幾分ヲ減損スル
等ノ弊害ヲ生スルモノトス
又此税法ニハ一種意外ノ効果ヲ生スルコトアリ即チ凶歲ニ當リテ反テ
農産ノ負擔ヲ重クシ從テ政府ノ收入ヲ大ニスルコト是ナリ今卒然之ヲ
聞ク片ハ如何ニモ疑訝ニ堪ヘサレモ是レ實ニ爭フヘカラサル事實ニ
シテ今之ヲ例ヘンニ試ニ一國ノ米ノ產出高ハ平年ニ在リテハ之ヲ平
均一億石ナリト仮定シ其石高ハ實ニ國民カ一ヶ年ニ需要スル所ノモ
ノナリトセンニ若シ米ノ平均相場ヲ一石四圓トシ政府ハ其總收獲高
シ十分一ヲ徵收スルモノトスレハ平年ニ於ケル地租ノ收入ハ四千万
圓ナリ然ルニ今若シ凶年ニ際シ米ノ収獲四分ノ一ヲ減損シ即チ七千
五百万石トナリシト仮定セハ政府ノ收納ハ七百五十万石トナル而シテ

テ之ヲ貨幣ニ換算スルトキハ政府ノ收入ハ反テ増加スルモノナリ何
トナレハ元來生活ノ最必需品即チ米麥ノ如キ貨物ハ若シ年稔ラス收
獲減損スル片ハ其價格ノ騰貴ハ其減損ノ割合ヨリ大ナルヲ以テ常ト
ス是レ需要ノ必迫ナルト供給ノ專ラ天力ノ支配ニ屬スルトニ由レモ
モノニシテ又經濟學上爭フヘカラサル法則ナレハナリ(我邦昨年以來
本年ニ掛ケテノ米價暴騰ヲ見ハ蓋シ思半ニ過キン)去レハ收獲四分ノ
一減損スレハ米價ハ平日ニ倍スルヲ以テ通例ト爲スカ故今假リニ寬
ニ積リテ米價ハ平常ノ二分ノ一ヲ増加シ一石六圓ニ増加シタリトモ
シカ七百五十万石ノ價ハ四千五百万圓ニシテ政府ノ收入其平常ヨリ
多キ一五百万圓ニ及フヘキナリ去レハ此税法ニ據ル片ハ農民艱難ノ
時ニ方リテ反テ其負擔ヲ重クシ政府ハ意外ニ其歲入ヲ増加スルノ奇
觀ヲ呈ス豈ニ奇怪ノ効果ヲ生スル税法ナラスヤ

歳ノ豊凶ニ依リテ
收入ニ増
減ヲ生ス
ルノ不便

四百七十二

斯ノ如ク現品ヲ徵收シテ貨幣ニ交換スルハ一種奇態ノ現象ヲ生スルモノナレモ左リトテ其支出モ亦現物ヲ以テスル猶ホ我カ舊制ノ如ク毎年ノ總收穫ヲ檢見シテ其幾分ヲ徵收スル税法トスルモ亦財政上少カラサル不便ヲ有スルモノナリ何トナレハ政府ハ年々收入ノ豫算ヲ組ミ其豫算ニ據リテ支出ト對照スルヲ便利トスルモノナレモ此税法ニ據レハ農産ノ豊凶如何ニ由リテ國庫ニ納ムル所ノ現品ニ一々増減アルカ故、正確ナル收入ノ豫算ヲ爲ス不能ハス從テ年々ノ收入甚シク動搖シ財政上ノ不便實ニ極リナケレハナリ而ルニ此財政上ノ不便ヲ除却シ去リシハ全ク我カ地租改正ノ一大功績ニ歸セサルハカラサルナリ(備考)地租條例第二條ニ曰ク「地租ハ年ノ豊凶ニ由リテ増減セス」ト以テ此ノ不便ヲ除却シタルヲ見ルヘシ曾テ德川氏ノ舊制ニ於テ亦此不便ノ幾分ヲ減スル法ヲ設ケタルヲ見タリ則チ德川氏執政ニ

舊幕府ノ
定額納租
法

百六十餘年間其政治最モ整ヘリト稱セラレシ享保元文時代ニ於テ時ノ將軍吉宗ノ政府ハ地租法上ニ於ケル各般ノ改良整理ヲ實行シタリキ而シテ此改良中田租檢視ノ法ニ代フルニ定額納租ノ法制(定免ト稱スル法)ヲ施行シ以テ専ラ官民ノ便利ヲ謀リシカ如キハ洵ニ一大改良ト謂フヘキナリ此法タル若干年間(三年五年七年十年十五年)ハ村ノ地租定額ヲ立テ而シテ將來若干年間(三年五年七年十年十五年)ハ豐歲アリト雖モ敢テ其租ヲ増サス又凶年アリト雖モ其收穫ノ減損十分ノ三以上ニアラサレハ敢テ減租セサル者ト爲シ、是レナリ但シ此定額納租ノ年限内ト雖モ水旱風蝗等ノ天災ニ罹リテ若シ其村稻作ノ減損十分ノ三以上ニ及フハ全村地主ノ申請ニ依リテ特ニ定額ヲ解キ臨時檢視法ヲ施セル上尙ホ相當ノ地租ヲ賦課スルヲ以テ例トセリ且ツ此定額地租法ヲ行フノ各村ト雖モ水旱其他天災

租額減損十分ノ三以上ニ及ブ片減租ヲ許可スルノ制ハ畑地麥作
其他ノ場合ニモ亦之ヲ適用スルコトセリ然ルニ畑地荒蕪減損十分
ノ三以上ノ場合ニ於テ之カ地租ヲ減スルノ例ハ其後十年ヲ經テ元
文三年戊午五月ノ令ヲ以テ更正シ木綿作地ヲ除クノ外ハ之ヲ適用
セサルコトナレリ但シ一郡一村全部罹災ノ場合ニ於テハ其畑租額
ノ十分ノ二個半迄ヲ減免スルコトセリ

地價ニ賦課スル法

第百二十五節 地價ニ賦課スル法 地租ヲ賦課スルノ方法ハ
上來叙列セルカ如ク幾多ノ變遷ヲ經過シ來リ以テ漸ク現今ニ迄ヒ稍
完全ナル賦課法ト爲スヘキモノ二種アルニ至レリ即チ第一地價ニ賦
課スル法第二土地臺帳ニ基キ土地ノ純收入ニ課スル法是レナリ而シ
テ第一法ニ又二種アリ曰ク
第一一定ノ年間ニ於テ調査セル土地ノ賣買價格ニ據リテ課スル法

第二土地ノ純收入ヲ基礎トシテ算定シタル法定地價ニ據リテ課ス
ル法
地價ニ課税スルノ法ハ之ヲ學理上ヨリ云フ片ハ資本ヲ基礎トシテ課
税スルモノナレバ實際之ヲ徵收スルハ全ク歲入ヨリスルモノナリ故
ニ地價ト純歲入ト其比例ヲ保ツ間ハ更ニ不公正ナキモノトス第二ノ
方法ハ地價ト純收入ト比例ヲ保ツ點ニ於テハ迴力ニ第一ノ方法ニ勝
レリ蓋シ第二ノ方法ハ其性質寧ロ土地臺帳ニ基キテ純歲入ニ課スル
ノ方法ニ似タリト謂フヘク而シテ我邦現時ノ法ハ即チ此方法ニ據リ
テ一定ノ年間ニ於テ地價ヲ算定シ年々土地臺帳ニ據リテ課税スルモ
ノニシテ即チ地價課税法ト臺帳法トヲ併用シタルモノナルカ故ニ其
性質ハ寧ロ臺帳ニ據リテ純收入ニ課税スルノ法ニ肖タリト謂フヘシ
是故ニ我邦ニ於ケル法ハ更ニ次節ニ於テ論スルコトシ請フ是レヨリ

土地ノ賣買價格ニ課スル法

土地ノ賣買價格ニ課スルノ法ヲ論辯セシ
 抑、土地ノ賣買價格ニ據リテ地租ヲ課スルノ法ハ之ヲ行フニ容易ナリ
 トス殊ニ土地ノ賣買頻繁ニシテ其所有主ヲ變更スルノ數ナル處若ク
 ハ法律ヲ以テ家父カ其子孫ニ土地ヲ分與スルノ許シ且ツ政府ニ於
 テ之ヲ統轄スルノ處此ハ土地ノ賣買取引ニ由ルノ外更ニ地價ヲ知ル
 ノ一助トナルモノナリ又凡テ是等ノ遺傳讓與賣買取引等ノ登記ヲ政
 府ニ於テ司レル處等ニ在リテハ土地ノ賣買價格ヲ知ルノ一層易々々
 ルモノトス若シ又久シク賣買モナク遺傳贈與モナキ土地ノ價格ヲ知
 ラントスルハ則チ他ノ價格明瞭ナル土地ニ比照セハ以テ其實ニ近
 キ價格ヲ推知スルヲ得ヘシ故ニ土地ノ賣買價格ニ本キテ地租ヲ課ス
 ルノ法ハ寔ニ容易ナリト謂フヘシ且夫レ賣買價格ニソ其實ヲ得ヘキ
 モノトモハ其價格ハ實ニ土地ノ純收入高ノ標準トスルニ適セルモノ

土地ノ賣買價格ニ課スル法

ニシテ又斯ノ如ク賣買價格(即チ資本額)ニ比例シタル地租ハ之ヲ土地
 ノ純收入高ニ比シテ敢テ大不平均ナカルヘキナリ
 然リト雖モ土地ノ賣價ハ他ノ農工大ニ發達シタル國ニ在リテハ當ニ
 一定不變ト爲ス可ラサルノミナラス又屢非常ノ激變ヲ見ルモノナリ
 何ントナレハ其耕耘法ニ於ケル新規ノ改良耕植物ニ於ケル新發見若
 クハ運輸交通等ノ便開達スルハ倏チ土地ノ純收入ニ變動ヲ起スカ
 故ニ隨テ土地ノ純收入ヲ倍乘セシ土地ノ賣價モ亦共ニ非常ノ變動ヲ
 被ラサルヲ得サレハナリボリユ一氏曰ク「新ニ一植物ノ培養ヲ興ス時
 ハ一地方ニ於ケル土地ノ歲入ニ倍四倍時トシテハ十倍ニ至ルヲアリ
 葡萄、甜菜、丹參等ニ於ケル培養ノ如キ即チ是レナリ又一朝偶然ノ一若
 クハ新發明等アル時ハ忽然其純收入並ニ賣價ノ半若クハ其四分ノ三
 ヲ減スルヲアリ例ヘハフィロセラ蟲ノ能ク葡萄園ヲ傷害スル丹參類

似ノ顔料アリザリシノ發明忽チ丹麥培養ノ利ヲ奪ヘル疾病能ク蠶卵ヲ殺シ又能ク桑樹ヲ枯死セシムル等此三者ノ如キハ皆嘗テ佛國地方ニ於テ土地ノ純歲入並ニ賣價ヲ變動セシメシ所ノ者ナリ云々」ト實ニ是等ノ變動アルヲ以テ設令賣買讓與ノ際ニ於テ其代價若クハ算定價格ヲ知り得ルトモ地租ヲ賦課スルニ當リテハ未タ此法ヲ以テ十全ナリト云フヘカラサルナリ且ツヤ是等ノ變動ハ往々突然不測ノ間ニ生スルモノニシテ逆シメ之ヲ量リ得ヘキニ非レハ政府ノ記録ニ登錄セル土地ノ賣買價格ノ如キハ殆ント死物ニ均ク之ニ據ラント欲スルモ已ニ其實ヲ失フカ故ニ復タ其用ヲ爲サ、ルニ至ルヘシ

土地臺帳ニ據リテ純收入ニ課スル法

第四百二十六節 土地臺帳ニ據リテ土地ノ純收入ニ課税スル法

此法ハ土地ノ精確ナル記録ヲ製シ以テ之ヲ課税ノ基礎ト爲シ專ラ土地ノ純收入ニ比例シテ課税スルモノトス而シテ土地臺帳

土地臺帳ノ効用

ノ調製ハ皆ニ租税並ニ統計上ノ目的ヲ達スルノミナラス又不動産ノ所有權ヲ認定シ及ヒ土地ノ移轉ニ關スル事實ヲ確認スルカ爲メ裁判上ノ基礎タル効用ヲナスモノニシテ甚タ有益ノ者トス併シ斯ノ如キ調製ハ得テ容易ニ行フヘキモノニ非ス何トナレハ此レ實ニ巨多ノ時日ト莫大ノ費用ヲ要スル者ナレハナリ然レモ今日ニ在リテハ先ツ此臺帳法ヲ以テ完全ナルモノトスヘシ而シテ若シ一タヒ精密ニシテ且ツ極メテ完全正確ナル臺帳ノ調製整頓スルニ至ル時ハ其地籍ニ基イテ地租ヲ純收入ニ賦課スル方法ハ地租ノ賦課法中蓋シ最モ公平ニ庶キモノトナルヘシ

法定ノ地價ニ課スル法

第四百二十七節 本邦ニ於ケル地租ノ徵課法即チ法定

ノ地價ニ課税スルヲ 我邦地租ノ制ハ維新以來夫ノ財政上一大美事トセル地租改正ニ依リテ其舊來ノ制度ニ一新面目ヲ與ヘタル

ノナリ而シテ今日ヨリ見レハ未タ不完全ノ所ナキニ非サレバ當
 時ニ遡リテ之ヲ考フレハ實ニ其不容易ノ事業ナリシト知ルヘキナリ
 我邦地租改正ノ際ニ當リテ施行セル順序方法即チ土地ノ價格品位等
 級等ヲ調査決定シタル順序方法等ハ姑ク之ヲ後段ニ研究スルコトト
 シ余ハ爰ニ我邦地租改正以來ノ地租ハ其際調査ニ係ル法定地價ニ比
 例シテ賦課スルモノナルヲ陳述スヘシ抑モ我邦現行ノ地租ハ土地
 ノ賣買價格ニ課スルモノニアラスノ地租ヲ徵収センカ爲メ法制上定
 ムル所ノ地價ニ課スルモノトス而シテハ其地券面ニ明記
 シタル地價ニ據リシカ今日ハ專ラ土地臺帳ニ掲ケタル地價ニ依違ス
 ルモノナリ明治十七年三月發布ノ布告第七号地租條例第一條ノ但書
 ニハ地價ト稱スルハ地券面ニ掲ケタル價格ヲ云フトアリシカ同二十
 二年法律第三十号ヲ以テ地價ト稱スルハ臺帳ニ掲ケタル價格ヲ云フ

本邦ニ於
 ケル法制
 上ノ地價
 算定法

ト改正シタリ故ニ本邦ノ地租ハ法制上定ムル所ノ地價ニ比例シタル
 モノナリ去レハ其法制上定ムル所ノ地價トハ何ナルヤヲ見ント尤モ
 必用タリ余ハ是レヨリ進ンテ其方法ノ如何ヲ陳述スヘシ抑モ本邦ノ
 制定地價タルヤ其方法ノ善惡ハ姑ク措キ土地ノ純収入ニ準シ其収獲
 チ資本ニ引直シ以テ計算シタル地價ナリトス而シテ以前地券面ニ掲
 ケ現今土地臺帳ニ掲ケル所ノ地價ハ各土地ニ於ケル収獲米穀ヲ以テ
 之カ基礎トシ利子及ヒ檢査者代ニ依リ其種肥料ヲ収獲物ノ一割五分
 トシ以テ定ムルヲ普通一般ノ例ト爲ス明治十七年四月五日大藏省号
 外達地租條例取扱心得第十四條ニ曰ク地價ハ収獲利率及ヒ檢査石代
 ニ依リ其種肥料ヲ収入額ノ一割五分ト爲シ左ノ算則ニヨリテ定ムル
 モノトスト而シテ其地價算則ト云フハ即チ田畑ハ収獲物ノ中ヨリ種
 肥料ヲ引去リ其殘數ニ檢査石代ヲ乘シテ實ト爲シ其他ノ地目ハ所得

金ヲ以テ實トナシ地租率百分ノ三ト地方稅百分ノ一トヲ合シ之ニ利率ヲ加ヘ法ト爲シ法ヲ以テ實ヲ乘シ得ル數ヲ地價ト爲ストアリ而シテ利率トハ地租改正ノ際用ヒシハ普通六朱ノ定メ是レナリ併シ地方ニ依リ六朱五厘乃至六朱八厘トシタル處モアリキ又檢査石代トハ地租改正期ノ前年即チ明治八年ヨリ前五ケ年間ニ於ケル上中下ノ相場ヲ平均シタルモノ是レナリ併シ比鄰府縣ノ平均額ト甚シク權衡ヲ失ヒシ地方ニ限り其平均額ヲ減シテ定ムルトシタリ茲ニ地價算出方ノ一例ヲ舉ケシニ左ノ如シ

例

一田反別一反歩
此収獲米二石

右収獲米一石ニ付キ代價金五圓ト仮定シ此代價金拾圓

地價算則
ノ一例

内

金壹圓五拾錢	種肥料 <small>(即チ収獲ノ割チ五分)</small>
金八拾五錢	地方稅 <small>(地租改正ノ際村人費ト稱セシモ即チ地租正稅三分ノ一)</small>
金貳圓五拾五錢	地租 <small>(即チ地價ノ百分ノ三)</small>

以上ヲ差引キ殘ル金五圓拾錢ヲ以テ此例ニ舉ケシ純収獲トシ又若シ其利率ヲ六朱トスレハ毎年以上ノ収獲ヲ生スル土地ノ價格ハ即チ金八拾五圓ニ當ル之ヲ其田地ニ於ケル法制上ノ地價ト爲ス本邦ノ地價算法ハ斯ノ如クナリ故ニ法定ノ地價ハ全ク純収獲ヲ基礎トナセルモノナリ去レハ斯ノ如ク制定シタル地價ニシテ若シ果シテ精密ニ土地ノ純収獲ヲ表示シタルモノトセバ之ニ比例セシメタル租稅ハ蓋シ公平ニ庶キモノナランガ併シ土地臺帳ヲ基礎トシテ純収入ニ課稅シ若クハ純収入ヲ基礎トシ

ヲ算定セシ地價ニ課税スルノ方法ハ其地籍調査ノ當時ニ在リテハ頗ル精密正確ナルモノニ類違ナカラシモ多少ノ年月ヲ經ハ以テ土地ノ狀況農業ノ方法等ニ變動ヲ生シ爲メニ其調査ノ結果モ亦必ス變動ヲ受クルヲ免レサルナリ故ニ一定ノ時期ヲ定メテ地租改正ヲ行フコトハ蓋シ此方法ニ附着シテ免カル可カラサルノ必要トス是レ則チ定期ニ地租改正ヲ施ス必要ノ有無ニ就キ二三ノ論議アル所以ナリ此事ハ尙ホ後段ニ於テ陳述スヘシ

土地臺帳ノ調製

第百二十八節 土地臺帳ノ調製順序 前節ニ於テ陳述シタル地租ノ賦課法ヲ採用スルルハ勢其基礎トナルヘキ土地臺帳ノ調製ヲ必要トセサルヘカラス故ニ余ハ此ニ土地臺帳調製ノ困難ナル所以ヲ觀察シ且ツ土地臺帳法ハ其運用頗ル遲緩ニシテ其費用從テ巨大ナルコトヲ論セントスボリユー氏ハ佛國ノ土地臺帳ニ畧分臺帳ト精分臺帳

土地臺帳ノ二種

トノ二種アルコトヲ説キ且ツ曰ク畧分臺帳トハ土地ノ廣狹、作物ノ品種ニ基キ各町村ニ於ケル土地歳入ノ總高ヲ調査シタルモノニシテ決シテ各地主ノ歳入ニ及ハス即チ政府カ地租ノ配賦ヲ行政區ニ行フニ當リテ些ノ不平均ナカラシメンカ爲メ其用ヲ爲スニ過キス而シテ精分臺帳ヲ調製スルニ至ル時ハ常ニ其用ヲ失スルニ至ルモノタルヲ免カレストボリユー氏ノ所謂畧分臺帳トハ即チ佛國ノ制度ヲ云ヒシモノニシテ佛國ニ於テハ地租ハ配賦税トシテ各町村ニ一定ノ地租額ヲ配賦シ其配賦高ヲ各町村ニ於テ其町村ノ地主等ヨリ徴スルカ故ニ畧分臺帳ハ僅ニ行政區ニ配賦ヲ行フニ當リテ些ノ不平均ナカラシメンカ爲メ其用ニ充ツルニ過キスト言ヒシ所以ナラン精分臺帳トハ現今各國ニ行ハル、所ノ臺帳ノ謂ヒニシテ始メテ伊太利ノミラン府ニ行ハレ尋テ佛國ニ入りテ王政ノ時始メテモンタウバン州ニ行ハレタル

モノナリボリユ一氏又曰ク「精分臺帳ノ義解ハ左ノ如シ
精分臺帳トハ耕地ノ類別、性質、價格ノ明細帳ニシテ各地主ノ反別、耕
植ノ種別、若クハ天爲人造ノ區畫ニ至ルマテ苟モ其著キモノハ悉ク
之ヲ記載スルモノヲ云フ」ト

土地臺帳ノ調製ニハ何レノ國ニ於テモ二段ノ手續アリ曰ク第一技術
的順序ト第二經濟的及ヒ財政的順序是レナリ

臺帳調製
的順序第
一技術的
順序

第一技術的順序ニハ

一、土地ノ測量 土地ノ測量トハ三角法等ニ依レル一般土地ノ丈
量ヲ云フ但シ一般土地ト云ハンヨリ寧ロ一般課稅地ノ測量ト
云フヲ以テ至當トス

二、地圖ノ調製 地圖トハ測量ニ據リテ得タル結果ヲ精細ニ記載
シタルモノニシテ其所有者ノ位置及ヒ耕作ノ性質等ニ從テ區

分シタル種々ノ小區畫ヲ明記シタルモノトス

三、境界ノ概圖及ヒ所有權ノ確定

以上三箇ノ手續ヲ技術的順序ト云フ而シテ經濟的及ヒ財政的順序ト
ハ土地ヲ數種ノ等級ニ分チ又各土地ノ收穫ヲ調査シ其收穫ノ多少並
ニ土地ニ於ケル品位優劣等ニ由リテ更ニ其土地ヲ各階級ニ分配スル
手續ヲ云フ蓋シ此順序ハ各國其法ヲ一ニセサルヲ以テ一々各國ニ就
キ其方法ヲ研究スルヲ必要トス

ボリユ一氏ハ佛國ノ制度ヲ以テ左ノ如クナリト云ヘリ

「測量地圖成ルノ後地租ヲ賦課センカ爲メ必ラス歲入ヲ算セサル可カ
ラス然ルニ佛國ノ制ニ從ヘハ各土地ノ歲入ハ敢テ精密ニ檢査スルヲ
要セス此レ蓋シ各邑共ニ算定ノ原則ヲ同サセハ則チ足レリト爲スノ
故ニシテ又其各土地ノ歲入ヲ算定スルニ當リ二割乃至五割ヲ減視ス

第二經濟
的及財政
的順序
佛國ノ制

分級
定級

ルノ意ヲ以テ之ヲ行ヒ敢テ非常ノ不便ヲ感セサル所以ノモノハ則チ
佛法ノ地租ハ配賦法ニシテ定率法ニアラサルニ由ル故ニ各土地歳入ノ
價格算定ノ事務ハ專ラ其邑内ノ地主ヲシテ之ヲ掌ラシメ或ル事務ニ
於テハ他ノ地主ヲシテ共ニ事ヲ執ラシムルモノトス其方法左ノ如シ
歳入價格ヲ算定スルニ其事務ヲ分チテ三次トス但シ次ヲ逐フテ之ヲ
定ム即チ分級定級及ヒ定格是レナリ分級トハ土地良否ノ度ニ從テ數
個ノ種類ヲ分チ五名ノ地主ヲシテ其事ニ當ラシム其二名ハ他邑ノ地
主ヨリ任シ邑會議員之ヲ撰定ス爾シテ階級ノ數ハ農地ハ五級ヨリ多
カラス鄉村ノ邑ノ家屋ハ十級ヨリ多カラサルモノトス又市府ノ家屋
ハ級ヲ分タスシテ各特ニ價格ヲ定ム以上階級ヲ定ムルニハ先ツ最上
ト最下トヲ定メ餘ハ悉ク之レニ準シテ其級ヲ定ム
斯ノ如ク第一次ニ於テハ其大體ヲ立テ次イテ地主等ハ各部ノ土地ヲ

定級

以テ其階級ニ配賦ス之ヲ定級ト云フ右ノ順序ヲ經タル片價格ノ算定
ヲ爲シ土地ノ大小ニ從ヒ每級其純歳入ノ額ヲ定メ之ヲ決定スル者ハ
邑會議員ニシテ地租ノ最大額ヲ拂フ所ノ地主ト更ニ相議シテ決定ス
其地主ノ人員ハ議員ト同數ナラシム之ヲ定格ト云フ此定格ニ於テハ
農地ノ性質ニ依リテ各級ノ歳入ヲ決定スルニ在リ故ニ斯ノ如ク各種
各級ノ價格ヲ定ムル片ハ業ニ既ニ各部ノ土地ニ於ケル法律上ノ純歳
入ヲ知ルヲ得ヘシ從テ邑ニ於ケル各地主ノ法律上ノ純歳入及ヒ全邑
ニ於ケル土地ノ純歳入ヲ知ルモ亦容易ナリ若シ地主ノ階級ヲ定ムル
ニ當リ之ヲ不當ト考フル片ハ地主ハ之ヲ法庭ニ訴ヘ其改正ヲ請求ス
ルヲ得ヘシト雖モ他ノ分級ト定格トニ至リテハ其不當ヲ訴フル所ナ
シ唯行政府ヲシテ其不當ヲ覺ラシムルニ在ルノミ云々ト之ヲ佛國ニ
於ケル土地ノ法定純歳入ヲ算定スル順序トス

第百二十九節 本邦地租改正ノ際ニ施行シタル順序

我邦現行ノ地租ハ土地臺帳ニ掲ケタル法定地價ニ比例スルモノナリ而シテ其土地臺帳ニ登錄シタル地價ハ曾テ地租改正ノ際調査シタルモノニ係ル是ヲ以テ我邦土地臺帳ノ調製ハ始メテ其源ヲ地租改正ノ調査ニ發セシコト明カナリ故ニ余ハ此レヨリ地租改正ノ際ニ於ケル順序方法ノ概畧ヲ舉ケ我邦ニテハ如何ナル技術的及ヒ經濟的並ニ財政的順序ヲ採リシカヲ見ントス勿論地租改正施行ノ順序方法ハ各地方ニ依リ多少ノ異同アリト雖モ爰ニ或ル一地方ノ例ヲ舉ケ餘ハ讀者ノ類推ニ任セン乃チ當時埼玉縣ニ於テ施行セシ普通ノ順序ハ左ノ如シ

- 一、字及番地
- 二、丈量、地圖
- 三、地押

字及ヒ地番

- 四、地位等級
 - 五、收穫
 - 六、地價
- 以上ノ順序ニ依リ列記セハ左ノ如シ
- 一、字及ヒ地番
- 字ハあざト訓シ其名稱恰モ町村名ノ如シ古來町村内ニ於ケル地理ノ小區分ニシテ蓋シ昔時檢地ニ際シ取扱上ノ便宜ヲ計リテ之ヲ定メシナリ地租改正ニ當リテモ尙各町村中此等ノ小區分ヲ定メテ土地ノ整理ヲナセリ
- 地番ハ土地一筆毎地券一枚ナリニ附スルトコロノ番號ニシテ字ト同シク昔時ヨリ費用セルモノナリ改租ニ方リテモ尙取扱上之ヲ必要トナシ、故字ニ亞イテ毎地ニ番號ヲ附スルコト、ナ

丈量及ヒ地圖

二丈量及ヒ地圖

地番ハ一町村通シ番トナシ字ニ限リ順次番號ヲ附シタリ
 二丈量及ヒ地圖
 丈量ハ十字法三斜法ヲ用ヒタリ
 地圖ハ一町村全圖ト字限リノ地圖アリ一町村全圖トハ一村内ノ
 重ナル道路溝渠堤塘ヲ畫キ字ノ境界線ヲ引キ以テ一村ノ大體ヲ
 明ニシ字限リノ地圖ハ一字ヲ一圖トナシ道路溝渠ハ勿論字内毎
 筆ノ境界ヲ畫シ之ニ地番地目田島等ヲ記入シ以テ土地ノ位置ヲ
 明ニスルモノナリ

三地押

地押

但町村ニヨリ一村全圖ニ一筆限リノ境界線ハ勿論道路溝渠等
 ヲ引ケル字限リノ地圖ト同シキモノアリ

地位等級

四地位等級

地押ノ目的ハ落地重複ヲ防キ以テ帳簿ト實地ト相違ナカラシム
 ルニ在リ故ニ地押ハ一番ヨリ順次之ヲ踏査シ帳簿繪圖ト實地ト
 齟齬ナカラシムコトヲ期スルモノナリ
 以上技術的順序トス
 四地位等級
 地位等級トハ一町村田畑宅地一地目毎ニ各其品位ニ依リテ之ヲ
 若干ノ階級ニ區別スルコトニシテ其區別ハ其地ノ收益ニ基クテ通
 則トス例ヘハ茲ニ收穫米平均二石二斗ヲ得ル田地アランニ甲ハ
 普通ノ耕耘費ニ止マルモ乙ハ甲ヨリ用水費トシテ年々若干ヲ要
 スル片ハ同一ノ收穫アリト雖モ甲チ一等トシ乙チ二等トスルカ
 如シ

地位等級ハ地味ノ肥瘠耕耘ノ難易水利運輸ノ便否等ヲ推究シ其

第一章 地租

地ノ品位等級ヲ詮定シ其所得ヲ審査シ尙其他ノ狀況ニ應シテ定ムルモノトス

地位等級ハ一等二等乃至十等孰レモ其間ノ差ヲ收穫米壹斗五升トシ又一等中ニ甲乙ヲ附シ其間ノ差ヲ七升五合ト定メタリ

五收穫

收穫ノ定メ方

收穫ハ田畑ヨリ年々收納セラレヘキ穀物ノ數量ニシテ地價算出ノ基礎トナルトコロノモノナリ

田ノ收穫ハ米ヲ以テシ畑ハ大麥ヲ以テ定メタリ

宅地ハ收穫ナキヲ以テ一町村ノ田畑地價ノ平均壹反歩ニヨリ若クハ一等畑ノ價格ニ依リ定メタリ

埼玉縣ノ收穫ハ各町村ニ其總額ヲ配付シ之ニ依リ地位等級ヲ定メシメ官廳ハ敢テ之ニ關セサリキ故ニ地位同等ナルモ甲村ノ一

等ハ二石トシ乙村ノ一等ハ二石一斗五升ト爲スニ至ル是レ各町

村地主ノ協議ニ放任セシニ由ル

一町村ノ收穫ヲ算出センニハ例ヘハ其町村ノ一等ヲ二石ト定ムル片ハ其間差ノ制アルヲ以テ二等以下每等ノ收穫ヲ得依リテ之ヲ合計シテ全村ノ收穫ヲ求ムルニ在リ

六地價

地價算定法

地價ノ算法ハ既ニ前節ニ述ヘタルヲ以テ茲ニ畧ス但シ地價算定ノ爲メニ用ヒシ利率ハ運輸交通ノ便否堤防費用水費等ノ多少ニ基キテ之ヲ定ムルモノトス故ニ山間不便ノ地ニ多ク平坦便利ノ地ニ寡シ又用水費堤防費ノ多キ部分ハ其利子ヲ多クス

人家稠密ニシテ商工業盛ナル町村ノ宅地ハ郡村宅地ノ調査方ト異ナリ其宅地ノ地價ハ貸地料賣買價格等ヲ斟酌シテ之ヲ定メタ

第一章 地租

我邦ニ於テハ概畧斯ノ如キ順序ニ依リテ土地ヲ調査シ各部ノ土地ニ法律上ノ地價ヲ附シ各地主ニ地券ヲ交附シ地租改正ニ依リテ始メテ地租ヲ課スヘキ基礎確定シタル後明治二十二年三月二十二日勅令第三十九號ヲ以テ土地臺帳規則ヲ發布シ土地臺帳ノ制ヲ設ケラレキ其規則ノ第一條ニ曰ク「土地臺帳ハ地租ニ關スル事項ヲ登録ス」ト又土地臺帳規則施行細則第一條ニ曰ク「土地臺帳ハ市町村ニ區別シ土地ノ字番號、地目、反別、等級、地價、地租、所有者及ヒ質取主ノ住所氏名ヲ登録スヘシ」トアリキ是レ即チ我邦土地臺帳ニ於ケル法律上ノ義解ト云フヘキナリ而シテ土地臺帳ノ原本ヲ要スル者ハ之ヲ交附スルコト、シ且ツ地券ニ記載ノ事項異動ヲ生セサルモノハ其地券ヲ以テ直チニ土地臺帳ノ原本ト看做スコトヲ得ト規定セラレタリ

第四百四十節 固定地租説ト定期地租改正説ノ得失

臺帳法ニヨリテ地租ノ純歳入若クハ地價ニ賦課スル法一タヒ出テシヨリ之ヲ定期ニ改正スルノ必要アリト云ヘル説ト地租ハ之ヲ固定ニスヘシト云ヘル固定地租説ノ論議ヲ生スルニ至レリ抑モ固定地租説トハ一旦調査セシ臺帳ニ掲ケタル地價若クハ純歳入ニ比例シテ永年間一定不動ノ地租ヲ賦課スヘシト云フニ在リ畢竟此説タル地租改正ノ困難即チ全國ノ土地ヲ調査シ等級ヲ定メ而シテ地價純歳入等ヲ確定調査センニハ蓋シ數多ノ年月ト巨大ノ費用ヲ要スルカ故仮令固定地租ハ年月ヲ經ルニ迨ヒ多少ノ不公平ヲ生スルトモ又固定地租ナルカ爲メ地租ノ收入ニ毫モ自然ノ増加力無シトスルモ其費用ト繁雜堪ヘ難キカ爲メ良シ人民ハ地租改正ニ依リテ其不平均ノ矯正ヲ受クル利アリトスルモ其繁雜ニ比シテ得ル所少ク又政府ハ縦ヒ之カ爲メ其

地租ヲ固定ニスヘシト云フ説

收入ヲ増ストモ到底之ヲ以テ其費シタル時日ト勞力ト費用ノ三者ヲ
 價フニ足ラス故ニ地租改正ヲ行フノ舉ハ損得相償ハサルモノナリト
 云フニ在リ然ルニ固定地租說ヲ非難スル者ハ曰ク屢時期ヲ定メテ地
 租ヲ改正スヘシ蓋シ地租ハ元來土地ノ收益ニ課スル租稅ナルカ故常
 ニ其土地ノ純收穫ノ増減ニ比例セサルヘカラス然ルニ之ヲ固定地租
 ト爲ストキハ漸ク星霜ヲ經ルニ從ヒ遂ニ地租ノ性質ヲ一變シテ地租
 ハ一種ノ土地ニ附帶スル義務金ト變スルノ弊ヲ屢スニ至ルヘシ若シ
 斯ノ如クンハ地租ハ決シテ土地ノ收益ニ比例シタルモノト云フヘカ
 ラス何トナレハ凡ソ農業上ニハ種々ノ改良進歩アリ又耕植ノ種類ニ
 ハ屢新發見ト共ニ變化起リ又漸次運輸交通ノ便開クルニ從ヒ土地ノ
 品位ニ甚シキ異動ヲ生スレハナリ況ンヤ數年ヲ經ルルハ國內各部ニ
 於ケル土地ノ純收穫ニ甚シキ異動ヲ生スルモノナルニ於テヤ是ニ

固定地租
 ハ遠ニ土
 地ニ附帶
 スル一種
 ノ義務金
 トナル
 固定地租
 ハ遠ニ土
 地ノ純收
 入ニ比例
 セサルニ
 至ル

由リテ之ヲ觀レハ萬一地租ヲ以テ固定トシ少シモ之ニ改正ヲ施サ、
 ルルハ其年月ヲ經ルニ從ヒ不公平極ル一種ノ土地ニ附帶スル義務金
 トナルヤ必セリ例ヘハ我邦ノ如キ良シ地租改正ノ當時ニ在リテ其法
 定價格ハ純收穫ト全ク比例ヲ得タリトスルモ爾來星移リ物換リ運輸
 交通ノ便日々開クルノ今日ニ於テ豈ニ獨リ地價ノミ其變動ヲ受ケサ
 ルノ理アランヤ況ヤ鐵路ノ到ル所昔日ノ峻阪ハ變シテ坦途トナリ山
 間僻陬ノ寒村モ今ハ一小市ノ賑ヒヲ致セルコト吾人カ往々目撃セル
 事實ナルニ於テヤ地租改正以來地價ニ何程ノ變動ヲ生セシヤハ實
 ニ測リ知ルヘカラサル所ナリ去レハ地租固定說ノ不公平ヲ生シ易キ
 ハ復タ多言ヲ費サスシテ判知スヘキナリ然ルニ又固定地租ヲ主張ス
 ル者ハ曰ク屢地租ノ改正ヲ行フト雖モ其改正セル價格果シテ從前ノ
 價格ヨリ正當ナルヤ否ヤヲ知ルコト能ハス良シ一時ハ其宜シキヲ得ル

地租改正
 無効ナリ
 ト云フ説

屢、地租
ヲ動搖セ
シムルハ
ハ反リテ
農業ノ進
歩ヲ阻止
スヘシト
云フ説

モ忽チニシテ地價ニ變動ヲ起シ其當ヲ失スルニ至ルハ蓋シ數ノ免カ
レサル所ナリ故ニ屢、地價ヲ改正スルハ畢竟勞シテ功ナキモノト云フ
ヘク且此ノ如ク數、地租ヲ動搖セシムルハ夫ノ農民カ銳意熱心以テ
土地ヲ改良シ農業ヲ進メ而シテ土地ノ純收入額ヲ増サントスルノ念慮
ヲ障礙シ反リテ農業ノ進歩ヲ阻止スルニ至ルヘシト併シ以上ノ如ク
土地ノ價格ヲ動搖セハ以テ農業ノ進歩ヲ妨阻スヘシト云ヘル論ハ所
謂天柱地軸ノ崩墜センコトヲ恐レシ杞人ノ憂ニ等カルヘシボリユー
氏ハ之ニ答ヘテ下ノ如ク言ヘリ曰ク若シ年毎ニ價格ノ改定ヲ行ヒ毫
モ被稅者ヲ恕セスシテ直チニ租稅ヲ増加セハ或ハ農業ノ進歩ヲ妨ク
ルコトナシトモ云フヘカラス元來價格改定ノ事タル頗ル困難ニシテ
往々過誤ニ陥リ易キモノナリ去レハ課稅ノ度ニシテ若シ嚴密ニ過キ
ハ改進ノ氣象ヲ挫折スル寔ニ論者ノ言ノ如ケン然レモ若シ例ヘハ十

年ヲ以テ一期ト爲シ改正ヲ行ヒ其間蕪莽ヲ拓キテ耕地ト爲シ森林池
沼ヲ變シテ田圃ト爲スカ如キコトアラハ宜シク租稅免除ノ制ヲ設ケ
テ之レニ五六年若クハ數年ノ歲月ヲ借スヘシ然ラハ良ニ至公至當ノ
法トナリテ農業ヲ進メコソスレ豈ニ農業ヲ害スルカ如キコトアラシ
ヤ是レ佛國ノ營業稅ニ於テ其營業者ヲ處スルノ法ヲ見ハ以テ益、此言
ノ虛ナラサルヲ証スルニ足ラン佛國ニ於テ營業稅ヲ課スルノ法ハ機
械ノ多少地位ノ良否ヲ調査シ之ヲ定ムルカ故ニ其生産ヲ増加セシ者
ハ直チニ租稅ヲ増加セラル然ルニ此制度アルカ爲メ毫モ佛國工業ノ
進歩ニ害アリシコトヲ証スルニ足ルモノナシ余輩ノ行ハント欲スル法
ハ十年ニ一回改正ヲ爲シ其間農業ノ變化ニ依リテ土地ノ價格ヲ増加
セハ猶之ニ數年ノ猶豫ヲ與ヘテ租稅ヲ増加セサルニ在リ然ラハ即チ
何チ以テ農業ノ進歩ヲ妨グト云ハンヤ云々ト實ニボリユー氏ノ言ノ

如ク縦ニ地租ヲ改正シタレハトテ十年ニ一回之ヲ施行スルニ於テハ
 決シテ彼ノ農民ノ改良ノ念ヲ減シ又農業ノ進歩ヲ阻止スルカ如キ極
 ニ至ラサルヘシ然レモ余ヲ以テ之ヲ見レハホリユー氏ノ所謂十年一
 回ニ地租改正ヲ行ハントスルカ如キ説モ尙ホ頻繁ニ過クルモノト云
 ハサルヲ得ス蓋シ全國ノ土地ヲ調査シ等級地價ヲ評定シ畫一ノ法ヲ
 以テ地租改正ノ法ヲ行フ之ヲ理論上ヨリ言ヘハ洵ニ美舉ニシテ屢
 之ヲ行フ程地租ノ平均ハ得ラレ其收入ハ増シ之ヲ固定地租ニ比スレ
 ハ其良否固ヨリ同日ノ論ニアラサルモ之ヲ實施スルニ當リテ其困難
 ト不公平ナルトハ余輩之ヲ各國ノ經驗ニ徵シ遺忘スヘカテサルモノ
 アレハナリ即チ佛國ニ於テハ一七九一年ノ條例ヲ以テ始メテ精分蓋
 帳ヲ製スルノ意ヲ示シ尋テ一八〇七年ノ條例ヲ以テ之ヲ實施スヘキ
 令ヲ發シ一八五〇年ニ至リカントル州ニ於テ完成ニ告ケ茲ニ始メテ

地租改正
ノ困難

費用ト年
月ヲ要ス

其功ヲ畢ヘリ其間實ニ四十三年ニシテ即チ半世紀ニ垂ントスル長日
 月ヲ費シ且ツ其費用ハ一億五千万乃至二億法ノ巨額タリ又我邦ノ地
 租改正ト雖モ明治六七年ニ始メ明治九年ヲ限リテ全國地租改正ヲ完
 了セシムルノ豫定ナリシカ遂ニ延イテ明治十一二年ニ涉リ始メテ漸
 ク其竣功ヲ見タリ加之ナラス明治十一二年ノ頃ト雖モ其表面コソ竣
 功シタレ實際内部ノ事業ヲ視察スレハ地租ノ帳簿ト云ヒ圖面ト云ヒ
 式ノ如ク完成ヲ告ケシモノハ實ニ僅々ニシテ其地租假納ノ計算スレ
 尙内部ニ於テハ未タ了ラサルモノ頗ル多カリキト云ヘリ去レハ其長
 日月ヲ要シ且ツ巨額ノ費用ヲ要スルコトハ復タ疑フヘカラサルノ事
 實ト云フヘシ故ニ地租改正ノ舉ニヨリテ地租ノ不平均ヲ更正スル説
 ハ夫ノ理論ノ如ク容易ニ出來得ヘキモノニ非サルナリ加之ナラス仮
 令其費用ハ巨大ナラストスルモ改正ノ爲メニ長日月ヲ要スル片ハ其

長日月間ニ起ル所ノ變化ニヨリ例ハ運輸開通ノ變動米穀價格ノ變動等ニ依リ其改正ノ初年ニ當リテ調査サレシ地價ト其後年ニ調査ヲ受ケシ地トニ不平均ヲ生スルコトアルヲ免カレス又地租改正ニハ全國通シテ法律上畫一ノ方法ヲ用フルトスルナランカ是レトテ實際其改正ノ局ニ當レル官吏ニ緩急ノ差アリテ容易ニ甲縣ト乙縣若クハ甲町村ト乙町村トノ間ニ公平ヲ得ルヲ難シ故ニ地租改正ノ舉ハ理論上極メテ公平ヲ求ムル美舉ナレモ更ニ時日勞力及ヒ費用ノ點ヨリ觀察セハ之ヲ數スルハ決シテ害アリテ益ナキモノト云フヘシ故ニ余ノ考ニ據レハホリユ一氏ノ所謂十年一不定期ニ地租改正スルヲ可トスル說モ少シク頻繁ニ過クルト爲ス所以ナリ且ツ元來租稅ナルモノハ兎角新設ノ際ハ人民ノ感情ヲ害ヒ生産ノ常態ヲ紊ス等ノ弊アルカ爲メ人民ノ不平ヲ招キ易ク又其設置永年ニ涉ルハ一種ノ義務金ノ如キ

ホリユ一氏ノ十年一不定期地租改正ニ對シテ云フ駁ス

地價修正
ハ必要ナリ

觀テ呈シ人民之ニ慣レ從テ產業ノ有様モ亦之ニ適シ甚シキ不公平ヲ生セサル限リハ亦甚シキ不平ヲ生セサルモノナリ故ニ屢地租改正ヲ舉行シテ巨大ナル民費ヲ消費シ巨大ナル日月ヲ徒費シ空ク許多ノ煩勞ヲ加フルハ却テ政府ニ益ナクシテ人民ニ不平ヲ起サシムルノ原因トナル去レハ其甚シキ不平均ヲ生セサル限リハ之ヲ改正セサルヲ宜シトス但シ地目ノ變換セシ時特ニ一部分ニ於ケル土地ノ價格ヲ修正シ又土地所有ノ移轉賃入等ノ登記アルニ方リテ能ク注意シテ土地價格ノ變動若クハ歲入ノ増減ニ應シテ法定價格ヲ折衷スル等ノコトハ常ニ履行フテ以テ可トスルモノナリ故ニ余ハ日ク地租ヲシテ固定ナラシムルハ土地ニ於ケル一種ノ附帶金ト爲スモノナルカ故ニ之ヲ不可ナリトスレモホリユ一氏ノ所謂屢全國ノ地價ヲ更正シテ地租改正ヲ舉行スルハ得ル所少クシテ損スル所多シ故ニ常ニ必要ノ場合ニ

方リテ特別ノ地價修正ヲ舉行スルコトヲ注意シ夫ノ全國地價大改正ノ如キハ宜シク時期ヲ定メス必要ノ場合ニ數之ヲ行フヲ以テ最モ良法トナスナラント信スルモノナリト

第四百一節 本邦ニ於テ地價修正ヲ必要トスル場合

本邦ノ舊地租條例ハ五年ニ一回地租改正ヲ舉行スル旨布告シタリ而シテ之ヲ實施セントスルニ當リテ民間ノ反對甚シク政府モ亦其得ル所少キヲ悟リテ之ヲ止メタリシカ其後明治十七年ニ地租條例ヲ以テ地租改正ノ期限ヲ不定期トシ若シ一般ニ地價ノ改正ヲ要スルハ前以テ其旨ヲ布告シ然ル後チ舉行スルコトトシ又地價ヲ定メ若クハ地價ヲ修正スルハ地價番ト共ニ之ヲ丈量スルコトトナセリ且ツ地價ハ左ノ三箇ノ場合ニ修正スヘキモノトセリ即チ(一)地目變換ノ場合(二)開墾ノ場合(三)第一類地ヲ第二類地ニ變換シタル場合はレナリ

地價ノ修正ヲ必要トスル場合

(備考)有租地 二類ノ區分ハ左ノ如シ

第一類田畑郡村宅地、市街宅地、鹽田、鑛泉地

第二類池沼、山林、牧場、原野雜種地

地目變換トハ第一類中又ハ第二類中ノ各地目變換スルモノヲ云フ

開墾トハ第二類地ニ勞費ヲ加ヘ第一類ト爲スコトヲ云フ

以上ノ場合ニ一部ノ地價修正ヲ行フハ至當ノ事トスヘシ我邦ノ歴史ニ依リテ見ルモ定期ニ全國ノ地租改正ヲ舉行セントシテ其失敗ヲ告ケシト先蹤既ニ歴然タリ是ニ由リテ之ヲ觀ルモ定期ニ地租改正ヲ行フハ不利ナリ且若シ定期ニ行フト約シ會其期ニ至リテ戰爭等起リテ之ヲ行フ能ハサル場合ニ於テモ尙之ヲ舉行セサルヘカラサル不便アルカ故ニ全國ノ地租改正ハ必要ノ場合ニ當リ不定期ニ時々之ヲ行フヲ以テ最良ノ法ト爲ス

地租改正ノ時期ヲ定メハシテ必要ナル時ニ之ヲ行フ

臺帳法ノ
不便不利
ナル點

第四百十二節 地主ノ申告ニ因リ土地純收入ニ課スル法

臺帳法ニ反對スル論者ハ前陳シタル如ク其運用遲緩ナルト費用勞力ノ巨大ナルト實際臺帳調製ノ期日各地共ニ一様ナラス從テ畫一ノ調査法全國ニ普通シ難ク爲メニ公平ヲ欠ケル事ト土地ノ純收入額ノ増加ニ比例シテ税額ヲモ之ニ伴ハシメ而シテ國庫ニ納ムヘキ收入年々増加シ難キコト即チ租税ニ屈伸力ノ乏キ事等ノ理由ヲ根據トシテ臺帳法ヲ非難シ而シテ此臺帳法ニ代フルニ土地所有主ノ届出ヲ本トシ監督員ヲ派シテ之ヲ檢閲セシムルノ方法ヲ採用スヘシト唱說スルモノアリ其主張者ハ曰ク申告法ハ既ニ家屋税ニ於テ好結果ヲ奏シ且ツ現實ノ収獲ニノミ課税ヲ及ホシ夫ノ單ニ假想ニ過キサル認定収獲高ニ課税スルカ如キコトナク實ニ公正ナル課税法ト云フヘク又且節儉迅速ニシテ而モ其収入ハ純収獲高ノ増加ニ比例シテ増加スルヲ得ヘ

地主ノ届
出ニ基キ
純収獲ニ
課スル法

其得失

キ良法ナリト併シ此ノ如ク申告ニ依リテ課税スル時ハ地主ノ所得ヲ基礎トシタル一種ノ人税トナルヘシ且ツ此法ニ據ル時ハ納税者ノ届出ニ誠實ヲ欠クノ恐レアルノミナラス又土地ハ次第ニ分割セラル、處殊ニ普通教育未タ一般ニ涉ラス農家ノ智識低ク耕作ニ關スル簿記法未タ不完全ナル處ニ在リテハ其總収獲中ヨリ資本ノ利子賃銀トシテ何程引去ラルヘキモノナルヤ總収獲ト純収獲トノ比例幾何ナルヤ等ヲ確定シ又政府ニ於テモ之ヲ檢定スルコト頗ル困難ニシテ此法ヲ管理シ及ヒ之ヲ實行スル上ニ於テ甚シキ困難アルヲ免カレサルモノトス故ニ此方法ハ決シテ完全ナリトスル能ハス猶ホ其短所少キハ臺帳法ナリト云フヘシ蓋シ臺帳法ノ一タヒ完成セル國ニ於テハ設令時々異動ヲ修正補綴スルコトアルモ決シテ甚シキ困難アルモノニアラス又始メテ土地臺帳ヲ調製スル如キ非常ノ長日月ト巨大ノ費用トヲ

要スルコトアラサルナリ故ニ地租徴収法ニ於テハ先ツ土地臺帳ニ依
リテ地價若クハ純収入ニ課税スル方法ヲ以テ最良トスヘシ況ンヤ臺
帳ノ調製ニ就テハ是レ實ニ地租上ノ基礎トナルノミナラス其間接ノ
利益ニ至リテハ所有權ヲ確定シ財産ノ移轉ニ課税スルノ便宜ヲ與ヘ
且ツ統計上ノ便利ヲ與フル等間接ノ利益アルニ於テヲヤ

第四百十三節 地租ノ負擔

地租ノ負擔

地租負擔ノ歸着スル所ハ何レニ
アリヤトハ寔ニ答ヘ易カラサルノ問題ト云フヘシ從來右ニ關シテ四

說アリ即チ第一地租ノ負擔ハ農産物ノ消費者ニ在リト云フ說第二借
地人ニ在リト云フ說第三地主ニ在リト云フ說第四地租設置ノ際ニ於
テ地租ヲ課スルルハ土地ノ賣買價格ヲ減少スルモノニシテ即チ當時
ノ所有主獨リ其歲入ト財産トヲ減シテ之ヲ負擔シ後來土地ヲ買フ者
ハ勿論讓受人ト雖モ其拂フ所ノ地租ハ我收入外ノモノナルカ故ニ毫

地租負擔
ノ四說

地租ノ負擔
ハ農産物
ノ消費者
トノ說

モ之ヲ負擔スルモノニアラスト云フ說是レナリ

第一地租ノ負擔ハ農産物ノ消費者ニ歸スト云ヘル說ノ誤謬ナルコト
ハ固ヨリ辯ヲ埃タサルナリ何トナレハ農産物ノ價格中ニハ地主ノ所
得タル地代ヲ含有セス且ツ地代ハ土地ノ總収獲物ヨリ資本ノ利子農
業者ノ利潤勞力者ノ賃銀等ヲ引去リ其殘レル餘裕ナリト云フコトハ夙
ニ經濟學者ノ論辯セル所ニシテ少シク經濟書ニ依リテリカトウ氏ノ
地代論ヲ研究シタル者ハ疾クニ熟知セル所ナレハナリ抑製造品ノ價
格即チ其生産入費中ニハ既ニ租税ヲ含有スレバ農産物ノ價格ハ全ク
需要ト供給トノ大原理ニ由リテ定マルモノニシテ即チ耕作ノ極端ニ在
ル最劣等地ノ耕作費用ニ因リテ定マルモノナリ去レハ各地ノ地代ハ
其耕作ノ極端ニ在ル最劣等地ノ生産物ニ超過シタル収獲即チ其餘裕
ナルカ故其餘裕ノ一部分ニ課税シタリトテ未タ其餘裕ノ全額ヲ政府

ニ沒収セラル、ニ至ラサレハ地主ハ其耕作シ得ヘキ地ヲ棄テ、農業ヲ廢止スルト云フ極ニハ達ラサルナリ是故ニ地租ハ縱令非常ニ重ク地主ニ課セラル、モ未タ其収入ノ全額ヲ擧ケテ政府ニ沒収セラレサル間ハ決シテ耕作地ヲ減少スルモノトハ云フヘカラス若シ地租ニシテ耕作地ヲ減縮スル結果ヲ生スルコトナシトセハ米穀ノ供給ニ減少ヲ生セサルヤ勿論ニシテ尙ホ一方ニハ人口依然トシテ増減セサレハ從テ需要ニ變動ヲ起サ、ルナリ斯ル場合ニハ地租ノ増加ハ決シテ農産物ノ價格ニ及ホスモノニアラス即チ農産物價格ノ騰貴ハ全ク需要ノ増加即チ人口ノ増加ニ依リテ影響ヲ被ムルモノナリ左レハ地價ノ増課ハ決シテ人口ノ増加ヲ引起サス又農産物需要者ノ購買力ヲモ増加セサルカ故ニ地租増加ノ爲メニ其需要ヲ増加シ需要増加ノ爲メニ農産物ノ價格ヲ騰貴セシムルノ結果ヲ生スヘキモノニ非サルナリ斯ノ

前説ノ誤

如ク地租ノ増加ハ果シテ農産物ノ需要ニ影響セス又耕作地ヲ減縮セシムル影響ナシトセハ地租ノ増課ハ農産物ノ價格ヲ騰貴セシメ隨テ地租ノ負擔ハ農産物ノ消費者ニ歸着スト云フハ大ナル誤謬ト謂フヘシ併シナカラ若シ地租ノ徵収非常ニ重ク又其賦課法極メ苛虐ナル片ハ農民未耖ヲ棄テ、耕作地ヲ去ルニ至ルヘク左レハ農産物ノ供給減シ爲メニ消費者ハ地租ノ一部ヲ負擔セサルヘカラサルニ至ルヘシ嘗テ土耳其帝國ニ於テ一八七五年ノ一揆前ニ當テハ地租ノ徵収其純歲入ニ比例セス且ツ税率非常ニ重ク即チ十一税法ニ據リテ一割二分半ヲ課セリ加之ナラス尙ホ農民ノ羊豕等ニハ別ニ税ヲ課シ殊ニ其賦課法ハ尤モ不公平ヲ極メタルカ故ニ一部ノ地方ニテハ殆ト純歲入ノ過半ヲ政府ニ沒入セラル、ノ有様ヲ呈シ此ニ於テ農民ハ沮喪落膽シテ遂ニ其農業ヲ拋棄スルニ至リキ當時英國領事ノ報告書ニ云ヘルアリ

曰ク土耳其帝國ノ或ル地方就中シリイニ於テハ租税ノ爲メニ全ク耕作地ヲ減セリト又ボリユー氏曰ク方今ト雖モ或ル場合ニ於テハ此ノ如キ不幸ナキヲ必セス(中略)某地方ニ於テハ其不當ナル賦課法ノ爲メニ純歲入ノ大半ヲ殺レ耕作ヲ廢シ爲メニ農産物ノ生産ヲ減縮スレコトアリ或ハ云フ英國ニ於テ其地方税重キニ過キ現ニ其耕作ヲ廢セシ者アリト是ニ由リテ之ヲ觀レハ地租ト雖モ賦課法惡ク負擔非常ニ重キニ過ルル片ハ全ク農産物ノ價格ニ影響ヲ及ホサスト言フヘカラス

第二地租ハ借地人ニ歸スト云フ說モ亦前同様誤謬ニ歸スルモノトス但シ都テ建物敷地用ニ供セラル、土地即チ宅地租ハ家屋税ニ類スルモノナルカ故ニ之ヲ除キ爰ニハ全ク農産物ノ生産地タル耕作地ニ就キテ陳述セントス抑モ借地料ハ借地人間ニ於ケル競争ニ依リテ定リ而シテ其競争地代ノ行ハル、所ニテハ借地人ハ耕作入費ト之ニ加フ

地租ノ負擔ハ農業者ニ歸スト云フ說

前稅ノ誤謬

地租ノ負擔ハ地主ニ歸ス

ルニ相當ノ利潤ヲ獲得スル外其餘裕ハ悉ク之ヲ地主ニ納ムルモノトス故ニ借地人ハ相當ノ利潤ヲ得ル外些モ他ニ所得ヲ有スルモノニアラス然ルニ其相當ノ利潤中ヨリ地租ヲ徴収セラル、モノトセハ勢農業ヲ全廢シテ他ノ利潤多キ職業ニ轉セサルヲ得ス是故ニ地租ハ土地ヲ所有者即チ地主ニ課セラレタル時地主ハ其一部分ヲ其之ヲ借地人ニ轉嫁シテ之ヲ負擔セシムル能ハス地主ハ之ヲ自己ノ所得タル餘裕即チ地代中ヨリ拂ハサルヘカラス左レハ地租ハ到底借地人ニ轉嫁スル能ハサルヤ明カナリ

故ニ第三說ノ地租ハ地主ノ負擔ニ歸スヘキモノナリト云フヲ以テ宜ク正當ニシテ誤謬ナキモノト思考スヘシ併シ宅地ノ地租ノ如キハ其性質稍家屋税ニ類スルモノナレハ茲ニ例外トシテ姑ク措キ農地ニ於タル地租ハ大抵地主ニ歸スルトスルヲ以テ誤謬ナキモノトス

地租ハ財
産ノ價格
一時ニ當
シテ減少
スル時ニ
地主ノ財
産ニ歸ス
ト云フ説

第四地租ノ負擔ハ地租設置ノ際ニ方リ地主ノ所得ト財産ノ價格ヲ減
シ即チ當時ノ所有者一時ニ之ヲ負擔スルモノナリト云ヘル説ハ奇巧
ノ尤モ甚シキモノニシテ決シテ其當ヲ得タリト言フヘカラス併シ此
説タル往々有名ナル財政家ノ唱フル所ニシテ佛國ニ於テハイポリー
トバツシー氏嘗テ此説ヲ主張セリ其所説ニ據レハ曰ク凡ソ新ニ地租
ヲ課シ若クハ之ヲ増加スルハ是レ即チ忽然永久ノ地代ヲ割イテ之
ヲ政府ノ有ト爲スモノニシテ其地代ノ収入額カ資本ニ相當スルタケ地
主ノ財産價格ヲ減少スルモノナリ故ニ地租ヲ新設シ若クハ之ヲ増加
スルハ即チ當時地主ノ財産ノ一部ヲ沒收スルニ異ナラサルモノニ
シテ後來ノ地主ハ毫モ之ヲ負擔セサルモノトス何トナレハ讓與若ク
ハ賣買ノ際ニ方リテ其歳入高ヨリ地租ノ高ヲ減シ更ニ財産ノ價ヲ定
ムルモノナレハナリト此説ヤ奇ハ則奇巧ハ即チ巧ナリト雖モ決シテ

其當ヲ得タリト云フヘカラス何トナレハ若シ地租ハ土地ノ賣買價格
ヲ減少スルモノナルカ故ニ當時ノ所有主ノミ一時ニ之ヲ負擔シ後來
ノ地主ハ其地租額ヲ差引ケル歳入ヲ見込ミテ買取リシ故ニ地租ヲ負
擔セスト云フヲ得ハ凡ソ世間ニ収益アル財産ニ課スル租税ハ何モノ
カ皆此ノ如クナラサラン即チ公債証書ニ課税スルハ該公債証書ノ
賣買價格ヲ減少シ株券ニ課税スルハ株券ノ賣買價格ヲ減少シ其他
貸家ニ家屋税ヲ課セハ其價格ヲ減少スル等是レ皆一時ニ於ケル租税
ノ効驗ニシテ一方ニ於テ政府ハ其財産價格ノ減少額タケ更ニ地租ノ
収入ヲ國庫ニ増シ得タリト云フニ非サレハ決シテ政府ハ一時ニ永遠
ノ租税ヲ收入シ得タリト言フコト能ハサルナリ又當時ニ於ケル財産
所有主トテ只一定期ノ租税ヲ拂フノミニ止リテ決シテ一時永世ノ租
税ニ相當スル資本ヲ政府ニ納レシモノニアラス故ニ財産價格ノ減少ハ

租税ノ効驗ヨリ波及スル影響ナリト云フヘク又財産所有主ニ取リテハ、將來其財產ニ於ケル需要供給ノ變動如何ニ依リ再ヒ其價格ヲ回復スル望ミナシト言フヘカラス又萬一地租ニシシ萬古固定不動ナルモノトセハ此効驗モ或ハ永久ナルヘケレモ現今ノ地租ハ決シテ固定不動ノモノニアラス或ハ政府ノ措置如何ニ由リテ尙ホ之レヨリ増加セラル、ヤノ恐レアリ又他ノ租税ト權衡ヲ失シ若クハ賦課偏重ニ過キテ弊害甚シク起ル片ハ之レヨリ輕減セラル、望ナシト言ヒ難シ其レ斯ノ如ク輕減ノ望アレハ未タ必ラスシモ地租ノ増加タケ土地ノ價格ヲ低落セシムルモノト想像スル能ハサルナリ若シ又此說ニシテ正當ナラシメシカ地租ノ設ケナキ國ニ於テハ決シテ新ニ地租ヲ設ケルヲ得サルヘシ何トナレハ地租ヲ新設スル片ハ一時地主ノ資本ノ一部分ヲ取リテ之ヲ政府ニ移スモノニシテ即チ地主ノ財產ヲ奪掠スル効驗アリ

レハナリ又既ニ地租ノ制アル國ニ於テ之ヲ施行セシトスルモ前上ト、等ク地租ヲ増減スルコト能ハサルヘシ何トナレハ假令舊制ニ過誤アルカ若クハ一方ニ偏重ナル時ト雖モ之ヲ減スルコト能ハサルヘク又之ヲ減スレハ故ナキニ現在ノ地主ニ恩賜ヲ施スニ等ク或ハ故ナキニ唯地主ヲ利スルニ止マルモノナレハナリ左レハ社會變遷ノ影響ニ依リテ地租カ純収入ト甚シキ不平均若クハ不公平ヲ生シタル時ト雖モ、此說ニシテ眞理ナル以上ハ到底改正ヲ行フコト能ハサルヘシ世間豈ニ亦此ノ如キ道理アリテ存センヤ

地租ノ收入

第四百四節 地租ノ收入 地租ノ收入ハ各國共ニ直税中其要地ヲ占ムルモノナリ併シ歐洲各國ニ於テハ我邦ノ地租ニ於ケルカ、如ク租税中第一ノ要地ヲ占ムルモノニアラスト雖モ直税中其要地ヲ占ムルニ至リテハ決シテ異ナラサルモノトス爰ニ地租ノ收入ヲ觀察

農地租ト
宅地租ト
區別スレ
キ

地租收入
ノ不動ナ
ル

スルニ當リテ先ツ農地ニ課スルモノト宅地ニ課スルモノトヲ區別セサ
ルヘカラス或國ニ於テハ農地ニ課スルモノト宅地ニ課スルモノトヲ
悉ク混シテ之ニ附スルニ地租ノ名稱ヲ以テスルモノアリ然ルニ宅地
租ハ前陳シタル如ク其性質稍家屋稅ニ似タルヲ以テ尙ホ之ヲ區別セ
サルヘカラサルモノナリ佛蘭西ノ如キモ猶ホ二種ノ稅即チ農地ト建
物地ニ課スル所ノモノヲ併セテ共ニ地租ト稱セリ故ニボリュエー氏ノ
如キハ此二種ノ租稅ヲ區別スルヲ適當トシ即チ其財政學ニ於テ二稅
ヲ分チ宅地ニ課スルモノハ之ヲ家屋稅ノ部ニ論シタリ我邦地租中ニ
モ亦農地租及ヒ宅地租ヲ混スルカ故ニ今學理上ヨリ之ヲ論スルハ
仍ホ二稅ヲ區分セサルヘカラサルモノトス但シ地租ノ收入ハ元來屈
伸力ヲ有スルコト鮮シ是レ何故ニ然ルヤト云ハンニ現今地租ノ賦課
法ハ各國ト共ニ率チ土地臺帳ニ依リテ調査セル一定ノ純歲入若クハ

佛國及ヒ
普國ノ例

英國地租
ノ收入

地價ニ課シ而シテ數之ヲ改正スル能ハサルカ故ナリ左レハ時々地租
ト地價ノ修正ナキ以上ハ其收入高モ亦殆ト一定不動ノモノト云フヘ
シ殊ニ佛國及ヒ普國等ニ於テハ地租ヲ賦課スルニ配賦法ヲ以テスル
カ故ニ尙更一定不動ノモノトスボリュエー氏曰ク「一八二一年以來農地
ニ課スル正稅即チ佛國中央政府ニ收入スル所ノ地租ハ一定不動ナリ
ト雖モ其家屋ニ課スルモノハ變動スヘキカ故ニ每年少額ノ増加ヲ得
ト佛國ノ外白耳義和蘭等ノ國ニ於テモ猶ホ地租ト家屋稅ヲ混交セリ
普國及ヒ英國ハ之ニ反シテ地租ハ判然家屋稅ト區別セリ茲ニ著キ事
實ハ英國地租ノ收入ハ歐米諸大國中曾テ其比ヲ見サルカ如キ少額ナ
ルト是レナリ抑モ英國地租ノ收入ハ一八八八年度ノ豫算ニ據ルニ其
額五百二十三萬圓ニシテ之ヲ十數年前ニ比スルニ其間更ニ著キ變動
ナシ斯ノ如ク英國地租ノ收入僅少ナル所以ハ即チ他ニ類例ナキ事實

ナリテ存ズルカ故ニシテ其地租ノ制ハ嘗テピット宰相タリシ時代ヨリグラッドストーン氏ニ迄ルマテ其財政上ニ一奇法行ハル、ニ由ル蓋シ其方法タル被稅者ヲシテ其望ニ從ヒ一時政府ニ資本ヲ拂込マシメ以テ永世免租ノ特權ヲ與フルモノニシテ即チ租稅ヲ買ハシムル法ナリ政府ハ該法ヲ以テ悉ク全國ノ地租免租料ヲ収メント欲シ、カトテ遂ニ十分其意ヲ達スルコトヲ得サリキ然レモ又之ヲ買ヒシ者妙カラズ是ヲ以テ大ニ地租ノ收入ヲ減シタリ若シ斯ル奇法ニシテ行ハレサランニハ英國地租ノ收入高ハ心スヤ方今ノ收入高ニ倍從セシナラン一七九八年前即チ地租賣買ノ行ハレサリシ以前ハ中央政府地租ノ收入高ハ一千〇二十萬圓ニ超過シタリ是ニ由リテ之ヲ觀レハ英國地租ノ收入ハ一種特別ノ性質ヲ有セルモノト言ハサルヘカラス加之ナラズ英國ノ財政法ハ專ラ間稅ヲ以テ中央政府ノ歲計ヲ維持シ其直稅ノ

本邦地租ノ收入

收入極メテ巨大ナルモノハ僅ニ所得稅タルニ過キス而シテ地方政府ハ之ニ反シテ專ラ直稅殊ニ土地ニ地方稅ヲ負擔セシメ以テ其地方費ヲ支辨スルモノナレハ唯此表面ニ現ハレシ中央政府地租正稅ノ收入高ヲ見テ直チニ英國ニ於ケル土地ノ負擔ハ他國ヨリ輕シト云フコト能ハス而シテ地租ノ收入獨リ他ニ卓絶シテ割合ニ多キハ我邦ニ如クモノナシ明治二十二年度ノ豫算ニ從ヘハ歲入總額七千六百萬圓中地租ハ其過半即チ四千二百萬圓ヲ占メリ又同年度租稅收入ノ總計ハ六千七百萬圓ナルカ故ニ地租四千二百萬圓ノ收入高ハ租稅總額ノ殆ト三分ノ二ヲ占メ又同年度ニ於ケル地租四千二百二十四萬八千九百八十一圓中其農地ニ係ル地租ノ概畧ヲ知ラン爲メ之レヨリ郡村宅地租及ヒ市街宅地租合セテ三百四十五萬二千九百九十七圓ヲ扣除スルハ農地租ノ收入高ハ概畧三千八百七十九萬五千八百八十四圓トス故ニ

農地租ハ尙本租稅收入ノ過半ヲ占ムルヲ及ヒ我邦ノ地租ハ租稅收入ノ要地ヲ占ムルモノナルヲ一見亮知スヘシ然リト雖モ其地租收入高ノ巨額ナルヲ見テ漫然之ヲ他國ニ比シ以テ其地租ノ重キヲ論スヘキモノニアラス何トナレハ國各其歴史アリ隨テ其國情ヲ異ニスルモノナレハ大リ抑我邦地租ハ其由リテ來ルヤ久シ民亦之ニ慣レテ敢テ痛苦ヲ感セサルカ故ニ直チニ他國ノ類例ヨリ推シテ俄ニ之ヲ輕減スルニ及ハサルナリ(甚シク農業ノ進歩發達ヲ妨ケサル以上ハ)余ハ現今ニ於ケル地租ノ賦課法并ニ徵收法ハ敢テ完全ナリト云ハス又地租ノ賦課徵收ニ不公平ナシト言ハス又農民ノ地租負擔ハ敢テ偏重ナラス他ノ工商民ノ負擔ト權衡ヲ失スルヲナシト言ハス然レモ賦課法ノ弊害ヲ除キ徵收ノ不平均ヲ減スルヲ得ハ決シテ甚シク地租ヲ輕減スルニ及ハスト言フニ在リ否余ト雖モ之ヲ輕減スルヲ欲セサルニアラス只

漫ニ輕減スルコト能ハサルヲ奈何セン何トナレハ財政ノ點ヨリ租稅ヲ論スルハ八千萬圓ノ日本政府ノ經費ヲ標準トシテ之ニ應センカ爲ニハ宜ク現在ノ租稅高ヲ以テ其必要額ト認メサルヘカテサレハナリ(經費節減論ハ別問ニ題屬ス)左レハ地租ヲ輕減スルト同時ニ如何ナル他ノ租稅ヲ以テ之ニ代フヘキヤ又如何ナル他ノ租稅ヲ增課シテ其收入ノ減少ヲ償フヘキヤ又他ノ新稅ヲ起シ他ノ租稅ヲ增課スルモノトセハ其地租ヲ現在ノ儘ニ据置キテ人民ニ及ホス所ノ不便ト其得失果シテ如何其產業上ニ及ホス弊害ハ如何民心ニ背戾スル度ハ如何其政府ニ得ル所ノ收入ハ如何等ヲ一々比較對照シテ以テ其是非ヲ斷セサル可ラス斯ノ如クシテ地租ヲ輕減シ之ニ代フルノ租稅亦其害少ク其利多キヲ見ハ奚ソ又地租輕減ニ躊躇スルヲ要セン元來租稅ハ保守的ノモノナリ故ニ舊置ノ租稅ニシテ其弊害極點ニ達セサル間ハ之ニ

堪得ヘシ仮令新設ノ租稅ハ其目的方法善良ナリト雖モ多少官民ノ間ニ損失ヲ生シ又人心ヲ激スルノ効驗アルヲ忘ルヘカラス希クハ世人財政ノ眼ヲ以テ此點ヨリ觀察ヲ下シ而シテ地租輕減論ヲ主張センコトヲ抑モ本邦ノ財政ハ專ラ直稅ヲ以テ成立ツモノナリ若シ英國ニ於ケルカ如ク間稅十分ニ發達シ殊ニ稅權我ニ歸シ海關稅ノ收入今日ヨリ増加スルヲ得ハ則チ始メテ論者ノ希望ノ如ク盛ニ地租輕減ノ目的ヲ達スルヲ得ヘキナリ

地租収入ハ屈伸力ニ乏シ

各國地租収入ノ概況ハ大抵斯ノ如シ元來地租ノ收入ハ屈伸力ニ乏シク即チ國富ノ増進ニ伴テ毎年増加スルモノニハ非サレバ其收入ハ他ノ租稅ヨリモ稍確實ニシテ其希望ノ額ヲ得ラルヘシ何トナレバ地租ハ土地ト云ヘル確實ナル不動產ノ擔保ヲ有スルカ故ニ其收入從テ確實ナレハナリ然リト雖モ其收入ノ増加セサル點ニ至リテハ尤モ著ク

地租ノ増加法セシムル

且ツ配賦稅ニ據リテ地租ヲ徵收スル處ニ在リテハ殊ニ其自然ノ増加力乏シキモノナリ但シ土地ハ社會ノ進歩ニ伴フテ其必要ヲ増シ地價モ亦漸次騰貴シ從テ地代ノ増進スルハ一般普通ノ事實ナルカ故ニ時々能ク土地臺帳ヲ修正補綴シ地價ノ増進若クハ土地純收入ノ増額ニ比例シテ之ニ改正ヲ施シ以テ地租ヲシテ其増加ニ伴フコトヲ得セシメハ地租収入ノ増加ト雖モ亦強チ望ムヘカラサルモノニ非ス

第四百五節 地租ヲ賦課スルニ公平ヲ得カタキ

地租ヲ賦課スルニ當リ第一ノ目的ハ地租ヲシテ公平ニ土地ノ純收入ニ比例セシメンコトヲ勉メサルヘカラス然ルニ凡ソ賦課ノ平等ヲ得ンハ尤モ難キモノニ土地臺帳ニ依リテ純歲入ニ賦課スル法ト雖モ其臺帳ノ調製ニ當リテ巨多ノ歲月ヲ費スカ爲メ甲地ト乙地ニ於ケル調製ノ時日甚ク懸隔シ又タ何レノ國ニ於テモ法律上全國畫一ノ方

地租徵收ノ不均

法ヲ以テスルトコソ定ムレ其調製ハ盡ク同一官吏ノ手ニ成リシモノニ非レハ其方法ノ如キモ同一軌ニ出デス全國整然トシテ毫厘ヲ差ヘサル丁最モ困難ニシテ其調製ノ區々銘々ニ出ル亦異シムニ足ラサルナリ左レハ臺帳調製ノ始メニ於テスラ既ニ全國ヲ通シテ觀ルル片ハ地租ノ不平均アルヲ免カレス况ヤ地租ヲ徵收スルニ配賦法ヲ用フルコト猶佛國普國等ニ於ケルカ如クセハ土地臺帳ノ要ハ唯、各邑内ノ各地主ニ地租ヲ割賦スル基礎タルノ用ヲナスニ止マルニ於テヲヤ併シ此方法ニ據レハ各邑内ニ於テハ較、公平ニ近キ地租ヲ賦課スルヲ得レ凡ク全國ヲ通シテ觀ルル片ハ猶ホ中央政府ヨリ租稅ノ總額ヲ各州ニ配賦シ各州ハ之ヲ各郡ニ配賦シ各郡ヨリ之ヲ各邑ニ配賦スルモノニシテ其配賦ノ都度其配賦額ハ大概子臆算ニ出ルカ故ニ其各地主ニ達スル比ニハ甚シク不平均ヲ生スルモノナリ是故ニ配賦稅ヲ以テ地租ヲ

地租ヲ徵
收スルニ
配賦法ヲ
以テスル
不可

課スル國々ニ於テ公正ヲ欲セハ寧ロ配賦稅ヲ廢シテ定率法ヲ採ルノ迫カニ勝レルニ若カサルナリ加之ナラス臺帳法ニ據ルル片ハ仮令土地臺帳調製ノ當時ニ於テ地租ノ賦課ハ公平ナリトスルモ調製以來許多ノ年月ヲ經ルル片ハ忽チ農業ノ進歩若クハ土地ニ於ケル耕植種類ノ變異運輸ノ便否交通ノ模様等ニ依リテ各部ニ於ケル土地ノ純歲入ハ甚シク變動ヲ生スルカ故ニ時々注意シテ土地純歲入ノ變動ニ應シ臺帳ヲ修正スルノ必要アリ

(備考) スタイン氏ハ此點ニ關シテ反對說ヲ有スルモノ、如シ氏曰ク「前略」配賦法ニ依ルル片ハ中央政府ハ只タ全國ノ土地ニ其負擔セシムヘキ總額ヲ配賦スルニ止マリテ其他ハ尽ク地方官吏ヲシテ各地方ニ於ケル各部土地ノ收益(即チ各地主ノ所得)ノ變更ニ應シテ配賦セシムルヲ得ヘシ蓋シ各個土地收益ノ變更ヲ最モ親ク最モ詳カニ探

知シ得ルモノハ各地方(町村)ノ官吏ニ如クモノナシ且ツ町村吏ハ地籍ヲ基トシ年々ノ變更ヲ斟酌シテ各個土地ニ地租ノ配賦ヲ行フカ故ニ各個地主ノ負擔スルトコロノ稅額ハ亦々年々土地ノ收益ノ増減ニ比例シテ變更スルコトヲ得ヘシ然ルニ定率法ニ依ルルハ各地負擔ノ稅額ハ毎年一定シテ活動ノ途ナク所謂賦稅上ノ一大要點ヲ欠クモノナリ然レモ配賦法ヲ行フルハ毎年土地收益ノ變更ヲ調査セシムルノ手續煩ナルノミナラス訴願ノ事極メテ多端トナルノ弊害ハ之ニ伴フテ存スルモノナレモ公平ナルコトハ配賦ヲ行フニ如クモノナシ云々ト余輩ヲ以テ見レハ配賦法ヲ行フルハ各邑内ニ於ケル賦稅ノ公平ハ蓋シ氏ノ言フ如ク得ラルヘケレモ全國ヲ通シテ各府縣各郡ニ於ケル地主ノ負擔ヲシテ更ニ公平ナラシムルニハ定率法ニ據ルノ勝レルヲ信スルナリ

本邦ノ地租ヲシテ公正ナラシムヘキ

第一、収獲ノ定メ方ハ畫一ナラシムヘキ

土地ノ等級ヲ多カクシムヘキ

第百四十六節 本邦ノ地租ヲシテ公平ナラシムヘキ

本邦ノ地租ハ元ト地價ニ課スルモノナレハ其法制上ノ地價ヲシテ純歲入ト精密ニ比例セシムルニ從ヒ愈々地租ノ公平ナルヲ得ヘシ今地價ヲ制定スルニ付キ更ニ四箇ノ注意スヘキモノアリ

第一、収獲ノ定メ方、既ニ前節ニ陳述シタル如ク地價制定ニ際シテハ其基礎トナルヘキ土地ノ丈量ヲシテ精密誤謬ナカラシムルヲ要スルハ勿論ナルカ此ハ技術的ニ屬スルモノナレハ敢テ此ニ論セス次ニ土地ノ地位等級ノ區分法ハ各町村區々ニシテ或ハ其等級ノ多キモノ或ハ少キモノアレト元來土地ニ等級ヲ設クル所以ハ各部ノ土地ニ就キテ一々調査スルノ困難煩雜等ヲ避ケンカ爲メ之ニ代フルニ其地位地味ノ較、類似シタル土地ヲ分級スルニ在ルモノナレハ土地等級ノ數ハ成ルヘク多キヲ以テ精確ナルモノトス又各部ニ於ケル土地ノ収獲定

メ方ノ如キ前節ニ舉タル埼玉縣ノ場合ニハ各町村ニ其總額ヲ配賦シ之ニ依リテ此地位等級ヲ定メ官廳ハ敢テ之ニ關セス專ラ各町村地主ノ協議ニ放任セシカ爲メ同一縣下ニシテ同一ノ地位ナルモ甲村ノ一等ハ二石乙村ノ一等ハ二石一斗五升ト爲スカ如キ差ヲ見ルニ至ル又場所ニ依リ實際坪高ヲナシテ收穫ヲ驗査シタルモノアリ或ハ從來ノ檢見坪高若クハ定免取ノ有毛等ニ由リテ收穫ヲ定メタルモアリ之ヲ要スルニ收穫ノ定メ方ハ全國統一ノ方法ヲ欠キ從テ寬嚴其度ヲ一ニセス其不平均ヤ亦實ニ太甚シ斯ノ如キ事ハ佛國等ニ於テモ亦同様ノ弊害アルモノニシテ即チ專ラ地主ト邑會議員ノ協議ニ成リ中央政府ノ官吏ノ如キ敢テ之ニ關係セサルヲ以テ全國畫一ナルト能ハス從テ全國通シテ甚シキ不平均存セリト云フ是故ニ收穫ヲ算出スルニ當リテハ專ラ中央政府ノ官吏之ヲ監督シテ全國畫一ノ方法ニ依ラシム

ルヲ宜シトス

(備考) ボリユー氏曰ク「往年ノ定格法ハ甚タ其當ヲ失ヘリ如何トナレハ之ヲ行フニ全國一致ノ法ヲ以テセス分級、定級、定格ノ事務ヲ以テ舉ケテ之ヲ地主若クハ邑會議員ニ委テ且ツ其定格ハ一般ニ實際ノ價格ニ及ハサルコト遠ク加フルニ其差ノ大小各地方ニ依リテ大ニ異同アリシテ以テナリ是等ノ失錯ヲ修正スルハ其測量順序ニ於ケルヨリ却テ簡易ナルヘシ政府ハ直稅局ノ監督官一人収稅吏數人記録局ノ吏員一人ヲ以テ政府ノ委員トシ副フルニ地方ノ吏員一二名ヲ以テセハ速ニ之ヲ辨スルニ足ラン方今吏員カ新築家屋ノ價格ヲ定ムルヲ見ルニ其寔ニ容易ナルヲ以テモ知ルヘキナリ」

第二、檢査石代ノ「檢査石代ハ收穫ヲ更ニ金錢ニ換算スルノ基礎ト爲ルモノナリ元來穀物ノ價ハ地方ヲ異ニスルニ從ヒ甚シク相違スル

第二、檢査石代ノ

モノナルカ故ニ検査石代ハ成ルヘク其種類ヲ多クシ各地方ニ就キテ平均ヲ取り以テ之カ標準トスルヲ要ス抑農産物ノ價格ハ殆ト各地方毎ニ異なるモノニシテ即チ運輸交通ノ便否等ニ依リ便利ナル市場ニ近キ所ニ高價ニ不便ナル僻陬ノ地ニ廉價ナルヘキノ理ナリ然ルニ一縣下若クハ一國內ヲ通シテ穀物ノ平均價格ヲ取り以テ同一ノ検査石代ヲ用フルハ餘リ廣キニ過キテ精確ト云フ能ハス即チ都會若クハ市場ニ近キ便利ノ土地ニテハ實價ヨリ廉ナル價格ヲ以テ収獲ヲ算セラレ山間僻陬ノ地ハ之ニ反シテ實價ヨリ高價ヲ以テ算出セラル、ノ不幸アリ故ニ各地方ノ地位便否ニ應シテ成ルヘク適當ナル最近數年間ノ平均穀物相場ヲ以テ石代トスルコトシ且ツ検査石代ハ成ルヘク土地ノ狀況ニ應シテ段階ヲ多クシテ差異アラシムルヲ以テ稍公平ヲ得ルニ近キモノトス

第三、利率
ナルハ書一
スナラフ要

第四、種肥料ヲ一
定ノ割合
トシタル
ハ不可ナ
リ

第三、利率 土地ノ純収獲ヲ地價ニ換算スルニ當リテ用フル利率ハ地方ニ依リ甚シキ差異アリシモノナルカ是レ亦宜シク全國畫一ノ利率ヲ採用スヘシ同一ノ純収益ヲ生スル不動産ノ價格ハ須ラク同一ナラサルヘカラス決メ異ナレル利率ヲ以テ地價ヲ算出スヘキモノニアラス

第四、種肥料 種肥料ハ我邦地價ノ算則ニ在リテハ普通一割五分ト定ムレト若シ精密ナル純収獲高ヲ得ントスルニハ更ニ地味ノ肥瘠耕耘ノ難易水利運輸ノ便否等ヲ斟酌シ又作業費使用牛馬農具ノ損料種肥等凡テ使用資本ノ利子ヲ算定シ之ヲ總収獲高ヨリ差引カサルヘカラス然ルニ一定ノ割合ヲ以テ種肥料ヲ總収獲高ヨリ差引クハ則チ總収獲高ノ一部ヲ免税スト云フニ止リテ未タ眞ノ純収獲高ヲ算出シタリトハ言フ能ハス故ニ純収獲高ヲ知ラムトスルニハ勢種肥料即チ使用資本ノ額ニ等差ヲ設ケ成ルヘク其實ニ近キ種肥料ヲ總収獲高ヨリ減額

セサルヘカラサルモノトス
以上四個ニ付テハ我邦地價ノ算定上ニ於テ多少ノ欠點アリ若シ地租ヲシテ純収入ニ比例セシメ其賦課ニ不平均ヲ生セサラシメントスレハ是等ハ尤モ注意セサルヘカラサル要點ナリトス

地租賣拂ノ得失

第四百七節 地租賣拂ノ得失 人民ニ地租ヲ拂下クル法ハ

或ル國ニ行ハル、制ニシテ吾人ノ果シテ之ヲ學フヘキモノナルヤ否ヤ請フ是レヨリ其得失ヲ觀察セン地租拂下ヲ可トスル論者ハ曰ク地租ヲ人民ニ買ハシムルコトハ人民政府共ニ損失ナシ何トナレハ地主ハ一タヒ地租ヲ買フコトニ依リテ將來永世ノ負擔ヲ免カレ政府ハ亦一時ニ巨大ノ収入ヲ得テ其欠乏ヲ補充スルヲ得ヘク實ニ此法ニ據リテ巨大ノ欠額ヲ補充スルハ國債ニ代用スルヲ得テ其元利償還ノ爲メニ租稅ノ増課ヲ要セサルコトハ大ニ國債ニ優ルモノナレハナリト

是レ地租拂下ノ良法ナルコトヲ主張スル論者ノ說ナルカ余輩之ニ同意ヲ表スル能ハス蓋シ地租ヲ買取ルコトハ果シテ地主ニ取リテ利益ナルヘキヤ余輩未タ之ヲ信スル能ハス若シ政府ニシテ極メテ誠實ナルモノナラシメハ人民ハ政府ヲ信シテ地租ヲ買受ケ未來永々安全ナルヲ得ヘキモ政府ハ果シテ人民ニ地租ヲ賣リ未タ幾クナラスシテ又他ノ名稱ヲ以テ租稅ヲ課スル等ノ事ナキカ余輩ハ未タ決シテ之レナシト斷言スルヲ得ス且ツ現今ノ政府ハ果シテ誠實ヲ以テ地租ヲ拂下ケ將來再ヒ地租ヲ課セサルコトヲ約束シ得ルトスルモ未來ノ政府ハ果シテ其約束ヲ守ルヘキヤ未タ信ヲ置クニ足ラサルナリ左レハ小心慎重ナルモノハ果シテ政府カ地租ヲ拂下クルコトアルモ誰カ亦之ヲ買取ルモノアラシヤ想フニ必ス斷然之ヲ拒絕スルナルヘシ又政府ニ於テ最モ課稅物件トナスニ適セル全國ノ一大財産ヲ擧ケテ之ヲ免稅

英國ノ例

シ一時巨額ノ資本ヲ得タリトテ何ソ益スル所アラシヤ寧ロ今日ノ如ク國家信用ノ發達セル時ハ國家非常ノ艱難ニ際シ財用給ラサルニ當リテハ尋常ノ國債ヲ起シ地租ノ收入ヲ以テ其元利償還ニ充ツルモ可ナリ然ルニ何ヲ苦ンテ殊更ニ此奇法ヲ行フコトヲ要センヤ此奇法カ現ニ英國ノ如キ文明ニシテ且ツ人民モ亦專ラ着實ヲ旨トセル處ニ行ハル、ハ豈ニ之ヲ奇怪ト云ハスシテ何ソヤ蓋シ英國カ創メテ此奇法ヲ行ヒシハ實ニ第十八世紀ノ終ニシテ爾後延イテ今日ニ及ヘリ而シテ此奇法ハ一七九八年ピットノ考案ニ基キシモノニシテ當時英國ノ永世据置キ公債證書ハ爲メニ大ニ其價格ヲ失シタリ然ルニ之ニ反シテ土地ノ賣買價格ハ其歲入ノ三十倍ニ上レリ左レハ氏ノ方法ハ地租ヲ賣リテ三分利公債證書ノ年利高ノ差ヲ政府ニ利シ以テ政府ノ歲出ヲ減セント欲シタルニ在リキ當時英國地租ノ額ハ一千萬圓ニシテ人

ピットノ
考案ニ基
ク

民ニ拂フ公債證書ノ年利高ハ一千一百万圓ナリキ故ニ政府ノ意ハ則チ一千萬圓ノ財源ヲ棄テ、永世据置公債證書ノ利子一千一百万圓ヲ減シ且ツ此方法ニ依リ一方ニ於テ三分利公債證書ノ需要ヲ喚起シ以テ其價ヲ回復セント欲シタリ併シ以上ノ計畫ニ依リ政府ノ目的ヲ達セシハ唯公債證書ノ騰貴ノミニ止レリ是レトテ專ラ地租拂下ノ効驗ト云フヲ得ス加之ナラス地租拂下ノ事ハ豫定ノ如ク十分之ヲ貫ク能ハサリキ是レ當時人民ノ進ンテ之ヲ買受クル者ナカリシカ故ニシテ此地租拂下ノ法ハ爾後七十餘年間尙依然トシテ存續セルカ其拂下ケシ高ハ今日ニ至ルモ尙ホ其半額ニ充タズ是レ一時ノ考案ニ出テタル奇巧ナル方法ニシテ之カ爲メニ英國政府ハ課稅物件ノ最モ適當ナル者ニシテ且ツ全國地價ノ増進ニ從ヒ其收入ヲ増加スヘキ課稅物件ノ一部ヲ失ヒシモノト謂フヘシ英國ノ例豈ニ倣フニ足ランヤ

前ト等シキ法ハ埃及ニ於テ設ケタルムーカバラト稱スルモノ是レナ
リ埃及王大ニ國庫ノ缺乏ヲ憂ヒ此ニ於テムーカバラナル法ヲ設ケ地
租ノ半ハヲ賣リ之ニ拂ハシムルニ租税額ノ十二倍ヲ以テセリ若シ當
時埃及政府カ誠意誠心以テ之ヲ行ヒ其地租ヲ賣リシ以テ全ク高利
ナル一割二分ノ公債償却ニ充テタランニハ此方法ト雖モ必ス良結果
ヲ奏シツランニ左ハナクテ埃及政府ハ内心他意ヲ包藏シ此ノ如ク虛
名ヲ以テ民財ヲ聚斂シ而シテムーカバラノ期限終ル片ハ又異名同實
ノ税ヲ課セント欲シタリキ故ニ一八七六年ノ財政改革ニ於テ遂ニ地
租拂下ノ法ヲ停止スルニ至リタリ以テ此奇巧ナル方法ノ取ルニ足ラ
サルヲ見ルヘキナリ

第二章 家屋税附門窓税

家屋税ハ
良税タルハ

家屋ハ被
税物トナ
スニ適ス

第四百十八節 家屋税ノ性質及ヒ家賃税トノ區別 家

屋税ハ家屋ナル不動財産ヲ以テ課税物件ト爲シ而シテ家屋ノ所有主
ニ賦課スル租税ニシテ家屋税ノ一種良税ナルコトハ財政學者ノ萬口
齊シク唱フル所ナリ元ト家屋ハ土地ノ如ク確實ナル財産ニアラサル
モ土地ニ次キ確認シ易キ財産ニシテ且ツ其數甚タ多ク又人口ノ増加
ニ從テ益増加スルモノナリ加之ナラス該財産タルヤ之ヲ隱蔽スルニ
頗ル難ク而シテ之ヲ調査スルニ容易ニシテ又尤モ明瞭ナルモノトス
故ニ家屋税ハ一般ニ課税物件ト爲スニ適スルヤ明カナリ是レ地税ニ
次キ廣ク各國ニ行ハル所以ニシテ殊ニ其設置コソ地租ヨリ舊カラサ